
ハワイアンソウル

Natary

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハワイアンソウル

【Nコード】

N0992U

【作者名】

N a t a r y

【あらすじ】

アースが人類の滅亡を決めました。

ショッキングなニュースを窓から飛び込んできた

妖精に聞かされたシル。

冒険の始まり

終わりの始まり

真っ暗な地中深く、真っ赤に燃え上がる太陽のようなエネルギーの塊がぐるぐると回っている。

真っ赤だった光の巨大な塊は何かを伝えるかのように一瞬真っ白な光を強く放った。

その瞬間。溶岩に囲まれた部屋で髪をとかしていた妖艶な美女の手がぴたっと止まった。

“ ついに・・・ ”

美女はつぶやいた。

“ 妖精を集めなくては。テトをここに、ヒイアカ。ヒイアカ ”

凜とした声が洞窟をこだました。

ー 出会いー

“ ふうー。 ”

山積みの書類を前にジルはうんざりしたようにデスクに座り、タバコに火をつけようとした。

ニューヨークにあるジルのオフィスは広いとは言えず、少し手を触れると書類がなだれ落ちるようにデスクに積まれている。一連の流れがすっかり癖になっていて、火をつけた後、ふと手を止めた。小

さいけれど、保険会社を経営するジルは社長自ら営業、事務処理と奔走し、万年人手不足で、息をつく暇もなかった。朝から立て続けにクライアントにあっていたジルはやっとオフィスに戻り、昼前に書類を片付けるところだった。

“ そうだ、禁煙するって言ってたんだっただな。 ”

火をつけたばかりのタバコを灰皿に押し付けようとして、

“ うおー。。 ”

とのけぞりつた。腰を抜かすほど驚くとはこのことだ。灰皿の陰には、羽の生えた大きな虫のような影があった。

“ なんだ?? ”

驚きながら目をこらすと、親指ほどの大きさのそれは、小さいながらもきちんと、目鼻口が整い、とてもハンサムな青年だった。すらつとした足を組み、灰皿の縁に腰掛けている。仕立てのよいスーツを着ていて髪はきれいに整えられている。モデルのようだった。人と違うところといえば、本当に小さいということ。それから、体と同じぐらいはある半透明の美しい羽があることだった。ジルをにやにやしながら見上げるとその小さな青年は

“ ほんとに見えるんだ。すげーじゃん ”

とつぶやいた。

“ お。。。しゃべった。 ”

再びのけぞったジルをちやかすように青年はすつと飛びたち、ジルのすぐ目の前に降りた。

“あんたプレジデント???”

“え??まあ、一応、プレジデントだけど。”

“ふーん。案外すぐ見つかったよかった。

“あなたは誰?”

“おれ?妖精。知ってる?妖精って。”

“いや、知っているけど。本当にいると思ってなかったから”

“ふーん。そうだね。普通見えないし。あんたプレジデントだから見えんのかな?いや、多分、テキが撒いた光のせいかな。”

“テキ??光???”

“いやいや、いいよ。こつちのこと。オレはテト。妖精界からきた使者。”

“使者?おれに妖精から使者?”

“そつ。人間に伝えなくちゃいけないことがあってさー。プレジデントっていう人間のリーダーを手分けして回ってんの。”

“プレジデントって。国のリーダーのこと?”

“ そうだよ。皆に言うとは大変だからさー。じゃあ、言うからよく聞いてね

アースが人間の増殖を止めました。だから人間は絶滅します “

“ えっ！！ ”

ジルはあまりのことに判断がつかず固まった。

“ 意味がわかんないよ。プレジデントってもしかして大統領？

僕は、小さな会社の社長だから、そんなこといきなり、言われても、しかも何？？絶滅ってなに？アースってなに？ ”

“ なんだよー。さっきプレジデントっていったじゃん。 ”

“ いや、会社の社長もプレジデントって言うんだよ。大統領はホワイトハウスにいるんだよ。 ”

“ この会社ホワイトハウスなんたらって言ってなかったか？ ”

“ ホワイトハウスインシュランスカンパニー。いやあ。一流を目指すっていう意味でつけたというか。 ”

我ながら大げさな会社の名前をつかたものだとはジルは少し照れくさそうに言った。

“ 紛らわしいな。まあ、いいよ。人間の能力なんて大して変わんないから誰に言ってもおんなじだし。ちゃんと伝えたからな。 ”

そのまま、テトは飛び立とうとする。

“ ちょっとまって。”

必死に手の平をばちばちして捕まえようとするジル

“ なんだよ。潰れたらどうすんだよ”

テトは再びデスクに降りると不機嫌そうにいった。

“ 説明してくれよ。絶滅ってなに？アースってなに？”

“ もう、めんどくさいな。じゃあ、説明してやるから座れよ。それでさ、コーヒー入れて。甘めでミルクたっぷりね。”

ジルは急いでコーヒーを入れると小さなフタにコーヒーを注いで、テトの前に差し出した。

自分に残りのカップを持つと、窓の外に向かって深呼吸を2回すると自分の椅子に腰を下ろした。

“ いいか。”

テトは語りだした。

“ アースっていうのは知ってる？”

“ アースって地球のこと？”

“ そっか、ここから知らないのか。説明大変だなー。。。 ”

テトは深いため息をつくど、観念したかのように話だした。

“あのね、地球っていうのは一つの生き物みたいなもんなんだ。

その心臓をアースって呼んでるわけ。それで、アースが自分の上に住んでる生き物をコントロールしてんだよ。

全部の命をね。そのアースが人間をなくすって決めちゃったんだよ。”

“なんで?”

“なんでってさ。

自分たちに聞けよ。

アースの上に住んでいる全ての命から嫌われてるんだぞ。

アースはずっと大目に見てきたんだよ。自分を傷つけられても、他の命のバランスを壊しても。

でもさ、ここまで嫌われちゃうとな。アースもかばいきれないんだよ。

大体アースのことや命のバランスについて知らないのって人間ぐらいだもんな。

それでもかばってきたのはさ、俺たち妖精のためかな。妖精ってのは、人間の希望が大好物なんだ。

だから人間がいないと、妖精も悲しむ。それがアースは寂しいわけよ。まあ、全部の命のなかで、俺たち妖精だけかな。

人間が必要なのは。あとの生き物は人間嫌いだもんな。ろくなこと
しないしな。”

“妖精にとって必要なんだろ、なんで絶滅なんだよ。”

“うーん。別に妖精はどっちでもいいんだよ。”

“なんでだよー。自分たちだって困るんだろ。”

“そこがさ、人間と大きな違いなんだよな。アースがバランスを取り
戻すなら妖精だって人間だっていなくなっちゃっていいだろ？”

“よくないよ。そんな簡単なことじゃないだろ？”

“なに、死ぬのが怖いのか？”

“怖いよ。当たり前だろ。”

“そこが変わってんだよなあ。人間って。”

“なんでだよ。妖精は怖くないっていうのか？”

“怖くないさ、なんで死ぬのが怖いんだよ。あのな、命つてのは皆
平等に一つずつなの。”

“お金持ちだって貧乏人だってさ、虫けらだって、象だってキリンだ
って皆、一つの命をもらって生まれてくる。そこまではわかる？”

“うん”

“よし。そしたら、死ぬのも1回。
平等なんだよ。”

命が生まれる喜びと、死の喜びをもって俺たちはアースの上に生きてるわけ。

命が生まれたら嬉しいだろ？それと同じように死っていうのも幸せなことなんだよ。”

“なんで死が幸せなんだよ。”

“家に帰れるからに決まっているだろ？

生きているときって楽しいか？

つらいこともいっぱいあるだろ？そういう生きるっていう課程をまっとうすると家に帰れるように死っていうのを平等にもらって生まれてくるんだ。

死っていうのはさ、家に帰れるってことなんだよ。

考えてみなよ。死のない世界を。それだけでぞっとするだろ？

喜びもあるけどさ、特に人間は生きているとどっちかっていえばつらいことが多い。

それがエンドレスで続いてみるよ。

皆気が狂っちゃうさ。

チーターだって死があるってわかるからそれこそ必死になって獲物を追う。

つらいのは今だけだから耐えられる。それで、命をまっとうしたものは死によってやっと家に帰れるんだよ。

そりゃ、よくやってきたなっていうやつもいれば、なんだよ。帰ってきちゃったのかよっていう扱いのやつもいる。

でもさ、家っていうのはそれでも帰ったら嬉しい場所なわけよ。”

“家ってなんなの？”

“家って言うのはソウルがいっぱい集まっている最高にハッピーな場所さ。”

アースから離れた場所にある。再び生まれるかどうかは、アースの支持で偉大な神、

カネがコントロールしているアースのことも勘のいい人間は神と呼んだりしてるな。

でも全体的に理解不足だな。それで、アースが最近、人間は出さないうって決めちゃったんだよな”

“出さないって、どうやって人間は絶滅するんだ？大きな天災でもおきるのか？”

“いや、簡単なことだろ。子供が生まれなくなるんだよ。”

人間は長い目で物事を見るのが苦手だろ。

だから、知らないうちに子供が減っていつて、人間たちが知らないうちに、大人ばかりになって、やがて老人だけになって、

最後の老人が減びたら絶滅ってわけ。次の歳は半分生まれないうようにするって言うってた。

半分、次の年は、またその半分。そうやって遂にはゼロになるんだ。ゼロになるまで数年。

そこで生まれた子供が八十年生きるとして1世紀ぐらいで終わるかな”

“ 一世紀か。 ”

明日、明後日の話じゃないとわかって少し遠い目をするシル

“ ほらな、もうオレ死んでるし関係ないって思っただろ？人間ってそういう生き物なんだよな。だから、そういうことだから。 ”

“ ちょっと待ってくれ。どうして知らせるんだよ。もうどうにもできないんだろ？ ”

“ いや、一応、妖精と人間の関係だからさ。ペレが何も知らないまま絶滅していくのはかわいそうだから教えてやれってさ。

アースの怒りが解ければもしかしたら決定が覆るかもしれないだろ。人間がアースの怒りに気づけばだけどな。

多分無理だろうな。今までだって散々サインはあったんだから。アースだって我慢の限界さ。 ”

“ 僕はどうしたら。 ”

“ ふうん。別になににも。なにか出来る力なんてお前にあるの？ ”

“ いや、ない。でも、聞いちゃった以上、なにかしないと。 ”

“ へえ。まじめなんだな。さすがプレジデントだ ”

“ いや、だから僕はただの会社の社長でプレジデントなんて大層なものじゃないし。 ”

“だからさ、人間の能力なんて大して変わんないからおんなじなんだって。”

“わかったよ。アースの怒りを解く方法ってないのか？”

ジルはなんだかすがるような気持ちになって聞いた。

“うーん。あるけどさ。大変なんだよな。”

“頼む。教えてくれよ”

“ピュアソウルの結晶を集めて玉を作つてさ、アースの心臓に投げ込むんだ。そしたらアースの怒りがやわらいで、世界が静まる”

“ピュアソウルって何？”

“お前、本当に何も知らないんだな。説明に疲れてきたぞ。”

“いや、テト。そうはいうけどさ、頼むよ。君が希望なんだ”

“希望か”

そついうとテトはおいしそうに口をもぐもぐした。

“うん、まあ食べれない味じゃなかった。悪くない。お前の希望、なかなかいい味してんな。じゃあ、教えてやる”

テトは一息ついてから再び話だした

“ピュアソウルっていうのはさ、わかりやすく言うともものすごくきれいな魂を持って生まれてくる人のことさ。

人間ってのはこのピュアソウルが少ない生き物なんだ。100万人に1人ぐらいしかいない。

そのピュアソウルを見つけたさ。それでピュアソウルが死ぬとき、つまり家に帰るときに恐ろしく純度の高い結晶ができるんだ。それが最高の希望になる。”

“聞いたこともない不思議な話だな。”

“そりゃ、そうだろ。人間の目なんて世の中の十分の一ぐらいしか見えてないんだ。世界は見えないものの方が圧倒的に多いんだぞ。”

“そんなもんなのかな。で、ピュアソウルっていうのはどうやってみつけるのさ”

“感じるんだ。意識を集中して。”

“意識を集中??”

ジルは目を閉じて、意識を集中する努力をしてみた。

“おいおい。そんな簡単にできるかよ。第一、こんな人間が作った無機質な建物で感じれるわけないだろ。”

“そうか。わかった。テトに従うよ。僕やってみるから”

簡単に言った自分に少し驚いた。ここまで話を聞くと、ジルは人間全滅の危機感より、目の前にいるハンサムな妖精と出会って世の中

のすべてにわくわくしてきた。

今まで眠っていた少年のような冒険心や、新しい世界への期待が胸を高鳴らせた。

もし、テトの話が本当なら、もっと世界を知りたい、生きている実感が欲しいと思うようになってきたのだ。

会社の雑務を全部ほうりだして、人類を救う為に旅にでるなんて、誰もが経験できることじゃない。

“ふん。しょうがないな。試しに付き合ってやるよ。”

テトはジルに対して抱いた好感を隠すようにそういった。

なかなか素直な人間だ。こういう人間はやっぱり嫌いじゃないんだよな。テトはそう思い始めていた。

“でさ、とりあえずどこ行くの？”

“うーん。そうだな。ペレンとこでもいこつか。あそこ自然がいっぱいあるし、何より火山は大事だろ？”

“ペレってもしかしてハワイ？ペレってほんとにいるの？”

“そうだよ。絶世の美人だぜ。”

“火山が大事って？”

“火山つてのはさ、アースの新陳代謝みたいなもんだからな。あれがドカーンといって新しい大地が産まれるだろ。

それでまた命が増える。そうやって地球は呼吸してんだよ。だからアースの意思を感じるには火山の側がいいんだ。

ペレはその番人っていうか、超一級に美人だからな。アースが側

に置いときたかつたんだろな。あれは命の傑作だ。”

“女神ペレか。まさか本当にいるとはな。”

“ああ、人間の中にも色々感じる事ができるやつがいるからな。伝説はあながちうそじゃないんだ。

でもさ、ペレに好かれないうちに気をつけないと。ペレは一目ぼれしやすいんだ。あの女に愛された男はみんな命を失っている。

“え。。。”

“ふーん。まあ、お前は大丈夫だろ。あいつは彫刻のように完璧な顔が好きなんだ”

“複雑だな。。。”

ジルは早速、従業員を呼び出した。

“およびですか？社長”

“うん。ちょっとこれからしばらく出張行ってくる”

“出張ですか？どちらに？”

“ハワイだ。”

“ハワイ？実家に戻られるんですか？ご家族に緊急事態でも？”

“うん、まあそんなところだ。”

“わかりました。後のことはお任せください。”

“悪いけど頼むね。”

お辞儀をして出て行った従業員の女性はテトが見えないようだった。

“見えないんだな。”

ジルが不思議そうにテトを見る。

“なあ？世界のほとんどは人間に見えない。”

テトはおかしそうにいった。そして

“なんだお前、ハワイ生まれか？”

と聞いた。どうやらテトもハワイから来たらしい。

“ああ、ずっとハワイで育ったんだ。家族もみんなハワイだ。”

“なんだよ。それでペレって本当にいるのとか本気で言ってるのか？”

“だって会ったことないんだ”

“見たことしか信じられないなんて、人間の想像力って本当に貧困だな。”

“妖精ってこんなに憎たらしい口をきく生き物だとは意外だよ。”

“妖精の中でも俺はいじわるなほうなんだ”
テトがふふつと笑った。

意外にもすんなりと会社を出た後、ジルはつくづく思った。

休みなんて取ろうと思ったら簡単なことなんだな。

僕がいないと仕事がまわらないなんて、ほとんどのやつが勘違いなのかもしれない。

リーダーがいなくなれば、替わりのやつがリーダーになる。それが自然界なんだ。

女神ペレ

ハワイ島に降り立つと、真っ青な空に、どこまでも続くごつごつした溶岩が広がっていた。

赤茶色の溶岩のところに白い石が置かれ、メッセージがかかっている。

観光客が残っていたものだ。その白い石がなかったら、まさに不毛地帯のようだ。

草木もほとんど生えてなく、青い空と岩しかない。レンタカーをかつとばすと、心地よいからつとした風が二人を包んだ。

ジルは故郷の空気を味わうように大きく深呼吸をする。

ハワイの匂い。帰ってきた。

ジルは実感した。火山特有の植物は葉も花も細い針のようで、人を寄せ付けない雰囲気がある。

“生まれたての大地に囲まれているとエネルギーを感じるよな”

テトが言った。

“生まれたての大地というより死んでしまったようにみえるなあ。”

幼い頃からなんだか訪れたことがあるハワイ島はハワイアンのジルにとっても不思議な場所だった。

見渡す限り赤茶色の溶岩。何もないようで何かあるような不思議な

場所。

“そうさ、死と生は反対なようで限りなく近いものだからな。人間が考えるように世の中のものとは直線じゃない。

らせん状の輪なんだよ。つまり、スタートとゴールは遠いようで実は隣なんだ。”

“なるほどな。言われてみればそうかもしれない。螺旋状か。”

なんとなく車を走らせていたジルは思い出したように言った。

“ところで、ペレはどこにいるんだ？”

“火山の中だよ”

当然のようにテトがさらっと言った。

“おい。ハワイ島のキラウエア火山は活火山なんだぞ。熱くていけるわけないだろ。”

“そうかな。”

テトはいたずらっぽく笑った。

“オレ妖精だよ。あんまり人間臭い考えでばかり話すなよ。”

そういうとテトは長いまつげの目を閉じて、意識を集中しだした。

ジルは慌てて道路の脇にレンタカーを止めた。しばらくするとあたりの景色がぐにゃんとゆがみ始める。

ジルはめまいを起こしたように平衡感覚がおかしくなる。テトは相変わらず眼を閉じて何かを念じている。

徐々にゆがみは大きくなり、ジルは目を開けているのがつらくなってきた。周りの景色が溶けていく。不思議と心地よいぐるぐる回る感覚が襲い、そのままジルは意識を失った。

ジルは心地の良い眠りの中に居た。ふわふわと体が浮いたように軽い。遠くで何か声が聞こえる。

“おきてくれ”

テトの声でふと目を覚ます。はつとして辺りを見渡すが、しばらく何が起こったのかわからなかった。どうやら場所が移動している。車もなくなっている。辺りはごっこつした岩ばかりで洞窟のようだった。

“あれ、さっきまで車にいたはずなのに。”

“特別な場所に入るにはさ、特別な方法で入り口までトリップするんだ。魂を一瞬肉体から離してさ、分子にまで細かくして、それをもう一度組み立てて。って説明するの面倒だからさ、テレポーテーションでもしたと思ってよ。”

“うん・・・そうする”

“まあ、あんまりするとお前の寿命が減っちゃうから。今回は特別

な。”

“ちょっとまって、今ので何年減ったんだよ？”

ジルが驚いたようにテトに聞いた。

“気にするなよ、2、3年だから”

“2、3年って・・・”

複雑な思いだった。自分の寿命がそもそもわからないのに、2、3年減ったといわれてもぴんときないが、なんとなく惜しい気もする。

世の中はわからないことだらけだな。

自分に起こったことを思い返してジルは思った。頭で考えるより、魂で納得すればそれでいい。

理屈は考えないようにしよう。無理やり現実に戻した。

“さあ、ここからは自分でいかなくちゃ。”

テトに促されて、歩きだした。周りは真っ暗なはずなのに、不思議と道は見えて、どんどん歩ける。

歩いている足元のほんの先だけぼわん、ぼわんと光るようでその光はまるで道案内をしているようだった。

“ペレも待ってるんだ。俺たちを。急ごうぜ。あんまり待たせると機嫌が悪い。”

この前も人間のささげるフラが手抜きだつて、すつごイライラしてたし。”

“ そうなんだ。激しい感情の持ち主だつて僕たちハワイアンが恐れているのは本当なんだな。”

ジルに不安がよぎる。

“ そうだな。ハワイにいる人は意外と勘がいいかなら。やっぱり都会に住んでいるやつと違って、アースの鼓動に近いからじゃないか？人間には見えないはずのものを視たりするんだ。俺も何度か目があつて追いかけられた。”

テトはそう言つてケラケラ笑つた。

“ ペレがいるつてことはここもハワイ島なのか？”

“ ペレはハワイ島に住んでいるに決まつてる。”

テトがそんなことも知らないのか？といった顔で聞いてきたのでジルは少しむっとする。

ジルだつてハワイ出身なのだ。ペレが今でも噴火を続けている、世界でもっとも活発な活火山、ハワイ島キラウエア火山のハレマウマウ火口に住んでいることぐらい知っている。気性の荒いことで有名で、妖艶な美女としての伝説も多い。

ハワイの人々は何かにつけてペレへ捧げ者をし、火山の機嫌をとってきた。

そのペレに会うというのだから不安も大きかった。

何度か訪れたことがあるハワイ島といったって、こんな火山の奥地のような場所は初めてで、実際にジルが知っているハワイ島は表面上のほんのわずかだということをお願い知らされる。

“ 捧げ者がないけれど大丈夫かな？ 豚とか？ フムフムヌクヌクアプアアとか ”

ジルがテトに聞いた。

ハワイの伝説ではペレの愛した神カマプアアが普段は相当な美男子なのだけれど

一端怒って本性を出すと八目の恐ろしい豚だとか、最終的にはフムフムヌクヌクアプアアという皮膚の厚い魚になって海へ逃げたという伝説があつて、

ペレが喜ぶ捧げ者は豚がこの魚だと言われている。

“ その変な伝説って面白いよな。ペレはカマプアアが好きで豚も魚も好きじゃないよ。あの人は美しいものが好きなんだ。 ”

テトはおかしそうに言った。

長い長い洞窟を歩くと、やがて突き当たり、岩のドアがあらわれた。人の力ではびくともしないだろうと想像がつく分厚い一枚岩だった。

“ ノックしろ。 ”

テトが言うので、ジルはドンドンとノックをした。手が痛いだけで、

音はほとんど響かない。

“ 入れ ”

中から女の声がする。

“ 押してみな ”

テトがいうのでぐいっとドアを押すと、ジルの予想に反して岩が動き、ぎーぎーっと開いた。

中はオレンジの光に包まれていてとにかく熱かった。

“ うー。熱い。スーツじゃダメだな。さっき、ニューヨークにいたとき、

カフェにいた青年がかっこよかったから真似してみたんだけど、やっぱりハワイはアロハに限るな ”

テトはそう言って指をぱちんとすると一瞬でテトの姿はアロハ姿に変わった。

“ ずるいな。テト。僕も熱くて死にそうだ。 ”

サウナにいるような熱風がジルの頬をなでる。長くはいられそうになかった。

“ そうか、悪かった。 ”

テトはそう言ってジルの頭の上に飛び、指を同じようにぱちんと鳴らした。

するとジルもグレーのスーツからアロハシャツに短パンに替わった。

“おーっ。すごいなー。”

ジルが関心したように言ったあと、まじまじとアロハシャツを見てこう付け足した。

“でも、あの、アロハはさ、出来れば青じゃなくてグリーン系が。”

ハワイアンだ。アロハにはうるさい。

“意外とこだわるんだ。いいけど。”

テトが面白そうに言ってもう一度やろうとした瞬間。

“なんなのよ。用事があるんじゃないの？”

と中から真っ赤なドレスを着た美女が現れた。

意思の強そうな大きな黒い目が不機嫌そうにこちらを睨んでいる。

テトが言ったとおり、この世のものとは思えない妖艶さに、ジルは息を呑んだ。コレが女神ペレ。

神といわれるだけあって人間を超えた美しさだ。赤とも茶糸ともいえないしなやかな髪が腰までのび、

頭には青々とした葉で編まれた冠をつけていた。長いまつげが色っぽい。吸い込まれそうな黒い瞳の眼光が鋭い。

“人の部屋にきて、ぶつぶつ勝手に話してんじゃないわよ。溶岩かけるわよ”

低い深い声でペレがテトに言った。

“悪いわるい。こいつがアロハの色が気に入らないとか色々いうからさ。”

ペレはぎろつとジルを睨んだ。ジルは身をすくませる。ペレはふと頬を緩めせると

“ほんと、グリーン系のがこの部屋にマッチするわね”
と言った。

“なんだよ。どっちだよ。”

今度はテトがぶつぶつ言いながら、ジルの頭の上でぱちんと指をならした。

其の途端、アロハがグリーンに変わった。

“悪くない。”

ペレとテトが揃ってそういった。ジルはぎこちなく笑った。
女神と初対面にしてはくつろいだ雰囲気だ。ジルは意外にもそう思った。

恐ろしいペレの伝説。どこまでが本当なのだろうか。

“で、何の用？”

“アースが、人間の絶滅を決めたってことをこいつに伝えに言った
らなんとかしたいって”

“あれだけアースに愛されていた人間も、アースの命を縮めてばかりじゃ仕方ないんじゃない。

特別扱いもここまでなのよ。恐竜の二の前って感じね。いなくなっちゃうなら、いい男早く捕まえて楽しまないと。
昔のいい男いたのよね。最近のはなんだかね。”

といいながらペレはなめるようにジルを上から下までみた。

“すみません。”

ジルはなぜか謝ってしまった。

“まあ気にすんな。ペレに愛されて命があつた男は今までいない”

“ひどいこというのね。そういうこと言うから、ペレは怖いとかウサが立つんじゃないの。悪評広めないでよね。”

ペレがだんだんイラだつてきたので、テトが慌てて話を戻す。

“それで、こいつが、人間の絶滅を何とかしたいっていうから、ピュアソウルを探してんだ。”

ペレはピュアソウル自分の側に呼び寄せてるだろ？”

“ピュアソウルなら結構ハワイに呼んだわよ。一人木になっちゃったけど、まだ何人かいるわ。”

“木になっただって？森に生えてるあの木ですか？”

ジルは不思議に思っただけ。

“そう、結構昔。まだ人間がこんなにたくさんいなかったころね。ひどい飢餓が続いて家族が餓死しそうだった一家の主がね、自分の体をパンの木っていう木に変えて、パンの身を食料にして与えたわけ。”

家族はなんとかその実を食べて飢えをしのだ。その男がピュアソウルだったな。ピュアソウルは人間のなかでも希少だからね。世界中でも少ししかないの。ハワイの神々はピュアソウルが好きだからね。

あの駆け引きしない魂が美しいし、魅力的よ。だから自分の側に呼ぶのよ。お気に入りだね。”

“で、そのほかのピュアソウルはどこにいる？”

“うーん。私が昔愛したピュアソウルはむかつてオヒアにしちゃったしな”

“オヒアって？”

“来るとき見なかった？オヒアレファの木。”

“ ああ、あの赤い花が付いた木のことが。”

テトがいった。

“ そうそう、あの赤い花がむかつくオヒアの恋人よ。

せつかく私が一目ぼれして好きって言ったのにアノ男、恋人がいるだ、裏切れないだ。私のことぶったのよ。

誰だと思ってるのよね。女神よ私。

それでむかつて、オヒアの木にしちゃったの。

そしたら、その恋人が泣きまくってさ。私にむかつて、毎日、彼に会わせてくれて、祈るのよ。

それが耳障りで、たまなくなつて。そんなに居たいんなら一緒にいればってレファの花にしてオヒアの木につけたのよ”

その伝説はジルも知っていた。まさか本当の話だとは思ってもみなかった。

“ それって女神ペレの我俣だよな。人の恋路をじゃましてさ。”
テトが言った。

“ 若気のいたりよ、何百年前の話だと思ってるのよ。だからさ、しばらく自粛して、

アースの噴火もしないように調整しているしさ、人間の希望も聞いてあげてるじゃない。文句あるわけ?? 溶岩かけるわよ。”

ペレがだんだんいらだつてきた。まったく火山のように気性のアツプダウンが激しい人だ。

微笑んでいるときも、苛立っているときも妖艶な美しさはかわらなかった。

テトが少し慌てて、

“ わかったよ。そんなにイライラするなよ。他のピュアソウルは知らないわけ？”

“ ふーん。アースが分かりやすいように印つけたからね。

テトが集中すればわかるはずよ。妖精にはわかるように印をつけたってアースが言ってたし。知らなかったのテト？”

“ ふん。ピュアソウルを探そうと思ったのがこれが始めてだから。ちよつと感じてみる。”

テトが試すようにじつと意識を集中させた。そしてふと隣のジルを見た。

“ って、お前ピュアソウルかよ。”

テトがのけぞった。ペレがにやつと笑った。

“ 連れてきてるのに笑っちゃうわよ。”

“ はあ、そうだな。いくらオレがバカだって、妖精なんだ。プレジデント探していて普通の人間を間違えるわけないんだよな。ピュアソウルのエナジーを感じて呼ばれちゃったわけだ。”

“ ぼ、ぼく？ピュアソウルだなんて信じられないな。”

ジルがすっかり驚いて言った。

“なんで？”

“だって、普通の家に育って、普通に大学でて、それほどすごくもない会社に就職して、

ひょんなことからその会社の社長になって、なんていうか、地球の人間の中で希少な人間とはとても思えないんだ。”

“そつか。そうだな。普通だな。”

“なんかの間違いじゃないかな。”

“間違いじゃないだろうな。お前が普通か。

じゃあ、今の状況は普通か？妖精にあってハワイまできて、女神ペレにあって、ピュアソウルのエナジー体を作り人類全滅を防ごうとしている。

そのどこが普通なんだ。”

“いや、それはたまたま。”

“たまたまな。世の中に偶然なんて本当はないんだぞ。まあ、気にするな。どうせ他のピュアソウルを探さなくちゃいけないんだ。”

“なんで、僕じゃダメなのか？”

“お前は最後だ。それまで色々やらなくちゃならないし。ピュアソウルはジルを抜かして7人必要だからな。探しに行こうぜ。”

“ うん。”

“ とりあえずオアフ島に行こう。お前と同じエナジーを感じるやつがいる。”

テトはそういった。

“ まあ、頑張りなさい”

ペレはそう言ってひらひらと手を振ると部屋の中に入っていった。

出会い

オアフ島に着くと、ワイキキは人で賑わっていた。

ハワイ島とはまったく違った都市の側面を持つオアフだが、
ジルが居たニューヨークとはまったく違い、南国特有のゆったりした
雰囲気包まれている。

そよそよと吹く貿易風がやさしい。あつくもなく、寒くもなくまさに
快適な気温のハワイ。

最大の魅力はこの気候だろう。思わずゆったりと時間を経つのを忘
れてしまう。

“あのさ、とりあえずコーヒーな。それにしてもこのスターバックス
スってカフェ。多すぎじゃね？”

テトがそういうので、コーヒー好きな妖精のためにスターバックス
でコーヒーを頼み外の椅子に腰をおろした。

“まずは観察だな。お前と同じエナジのやつ。”

テトがたっぷりミルクと砂糖を入れたコーヒーを飲んだ後、そう
いった。しばらく目をつぶっていたがやたら口をもぐもぐさせてい
る。

“人がいっぱいいると、上手い希望がいっぱいある。”

それにしてもさ。

そつつばやいてテトは回りを見回した。

“まあ、皆のんきなもんだよな。絶滅っていったらさ、その種の動物は結構慌てるけどな。

人間は本当に何もアースの意志を感じ取れないんだな。知らない方がいってこともあるけどな。

これだけ死を怖がっている動物だ。自己防衛機能かもしれないな。これでもうすぐ絶滅するなんて知ったら、絶望でオレなんか即死だな。”

“妖精って絶望で死ぬのかい？”

“あんまり強いとな。絶望が多いと息ができなくなるんだ。だからかな、陽気な希望にみちた南国に妖精が多いのは。

ニューヨークなんて言ったら、それこそ息ができないことが多すぎるからな。アノ町に住んでいる妖精は変わり者だけさ。”

“死を怖がるのは人間だけだっていったよね？”

“そうさ。”

“本当にそうなのかな。”

“ああ、病気になつてもひたすら治そうとする動物が他にいるか？みんな天命に従うだろ。家に帰るって知っているからだよ。生きているときは、子孫を残すことに全力を捧げる。

動物ってのは本当はシンプルなものなんだ。アースの意思で生かさ

れていることを知っている。

でもな、人間だけだ。どんどん勝手に解釈して独自の世界を作る。面白いよ。ほんとうに変わっている。

特別なんだ。その魅力はアースもわかっていて、愛していたよ。ほんとうに、惜しみない愛だったよ。

でもな、ちよつと勝手がすぎたな。他の生き物から大クレームだよ。

アースはいつでも決断できた。でもアースは慈悲深いから、決断がちよつと遅すぎたときがある。

それが恐竜の時だ。あいつらも勝手だったからな。決断が遅かったばばっかりに、アースは重い病気になった。

体温が極端に落ちて、しばらく眠っていた。恐竜どころか、氷の世界になったからな、ほとんど絶滅してしまったよ。

アースを眠りから目覚めさせたのが、火山の女神ペレだ。あの女は極端に体温が高いからな。

唯一氷の世界でも起きていられた。それで、火山活動を活発にさせるようにアースを揺り動かした。

やがて、火山が各地でおき、アースは眠りから覚めた。

アースはさ、自分の決断が遅くてたくさんの命を無駄にしたことを悔やんでいるんだ。今ならまだアースは立て直せる。”

にわかには信じがたいその話をジルは冷静に考えてみた。

“それを聞くと、人間は滅びた方がいいんじゃないかと思ってくるよ”

“そうだな。オレもどちらがいいのかわからないよ。”

“アースってどこにいるの？”

“アースは世界の中心にいるよ。”

“中心って？ニューヨークとか？”

テトはそれを聞いて笑い出した。

“ジル、お前本当に世界の中心がニューヨークだなんて思っていないよな？”

“いや、経済の中心はニューヨークだからそれしか思いつかなくてハワイなのか？”

“アースは地中深く、本当に地球の真ん中にいる。巨大な意思をもったエナジー体だ。

愛の塊のような地中の太陽のような。地球の真ん中にいるってことはさ、どの国から見ても平等に同じ距離にいる”

“意思を持った。”

人間のように体はないけれど意思があるエナジー体。

“それって神か？”

“そうだな。神っていう人間もいる。人の形に置き換えて見る人もいる。

でもとにかくその存在は確かだ。地球にはアースがいる。そしてその存在は愛で満ちていて絶対だ。”

テトは少し敬うようにアースのことを話した。

“アースを感じなくなったのは人間が耳をふさいだからだ。他の動物はアースを常に感じながら生きている。”

人が何も感じとれなくなったのは自然と離れすぎてしまったからなのだろうか。

“使わない機能は退化するように動物は作られている。”

とテトが言った。

退化した機能。古代ハワイアンは自然界全てに神が宿るとして敬ってきた。

彼らはアースを感じていただろうか。

恐らく・・・答えはイエスだろう。人は大切なものを失ってしまったのかもしれない。

“おっ。いたぞ。ピュアソウル。追いかけるぞ。”

テトが急に言った。

“あの車を追え。”

“車を追えって。”

ジルは仕方なく全力で走りだした。車はワイキキの混雑でところどころ止まるものの、ワイキキのはずれまで来ると速度が上がった。

“ はあ、はあ。はあ。もう。。だめだ。見失う。”

“ しっかりしろ。”

テトの声が遠くなる。テトと違ってこっちは走っているんだ。ジルは恨めしそうに飛んでいるテトを見た。

“ おつ。あそこだ。止まったぞ。”

其の声に氣力を振り絞って前を見ると、坂を少し上がった家に追ってきた車が止まっていた。

車から降りてきたのは杖をついた初老の男だった。

ゆっくりゆっくりと車から降り、ゆっくりとポーチの階段を上がった。

“ 話しかける。”

“ な、なんて。”

“ ピュアソウルを探していますって言え。”

“ そんなこと言ってたってわかんないよ”

“ いいから、神の使いつて言え”

ジルは仕方なく声をかけた。

“す、すいません。神の使いできました。”

“お前、バカ正直だな。そんなこと言って誰が信じるんだよ”

テトがジルの耳元でささやいた。ジルはきつと小さな妖精を睨んだ。

初老の男は驚きを隠せない顔でこちらを振り返った。

肩にいるテトに小さな声でジルは言う。

“ほら。クレイジーだと思われただろ。”

しばらくの沈黙。

“あ、あの。。”

ジルが口を開いたとき、テトの方をみますます驚いた顔の男が何かを悟ったかのように

“どうぞ、お入りください。歓迎します。”

といって家に通してくれた。テトが見えるのか。

“ピュアソウルは見えるのかもな。都会にいるやつはほとんど見えなかったけどな。”

テトが言った。都会に暮らしていると色んな能力を失うらしい。

シンプルで片付けられた部屋。男1人暮らしなのだろうか。必要なもの意外は何もない。

ジルは通されたそのリビングで静かにソファーに腰を下ろした。

初老の男は歩くのもやつのようだが、コーヒーを入れて戻ってきた。

驚いたことに、テトにぴったりのサイズのマグカップも添えられている。

そして、当たり前のようにテトの前にそれを置いた。

“み、見えるんですか？妖精が。”

“ん？？見えるよ。”

メネフネとはしばらく一緒に暮らしていたよ。

私が暮らしていたメネフネもコナコーヒーが大好きだった。また会えるとは。懐かしいよ”

男は初めてにつこりと笑った。

“メネフネ??”

“ハワイの人たちは、俺たちのことメネフネって呼ぶんだ。”

話が早いと思ったのか、テトは上機嫌でコーヒーをすすった。

“おじさん、1人か?”

テトの話し方はいつも遠慮がない。

“ああ、ずっと1人だ。どうも人間とソリが会わなくて、いつも妖精だのといたからな。それでこんなに年とってしまった。”

“そうか、しばらく一緒にいていいか?”

“テト、ちゃんと説明しないと失礼だろ。”

ジルがそういった。

“そうか、そうだな。じゃあ、お前頼む。”

テトはすっかりくつろいでいる。希望をいっぱい食べたせいか少し眠くなってきたらしい

“あの、アースはご存知ですか?”

“ああ、アースって地球のことですか?。”

“そうです。その、実は。”

ジルが言いにくそうにしているとテトが横から口を挟んだ。

“あのさ、そのアースが人間の絶滅を決めたんだ。”

それから、アースが人間の絶滅を決めたいきさつを感単に説明した。

初老の男は話を聴き終わると、静かに頷いた。

“そういうことがあってもおかしくない。人は自然に甘えすぎた。”

“そうか、さすが、話が早いな。ピュアソウルは。”

“ピュアソウル？私が？”

“おじさん、死ぬの怖いか？”

“今は、1人で、家族もいないんだ。それほど恐れてはいないよ。全員に来るものだしね。”

“そっか、”

“死期が近いこと知っているのかもな”

テトがジルの耳元でさらっという。

“よし、見届けるまで一緒に居よう”
テトがいった。

“見届けるって死ぬのを待つってこと？”

ジルが相手に聞こえないようにテトに聞く。

“事情はよくわからないけれど、家にいたらいいよ。”

男は二人の会話が聞こえたのか聞こえないのか、ゆったりと言った。

“そ、そんなんでいいんですか。初対面なのに。”

ジルは驚いてしまったが、テトは
“そっか、じゃあしばらくいるね”

と気軽にいった。

こうして、不思議な同居生活が始まった。

リアン

リアンというその男の生活は変わっていた。

車で週に1度、食料を買いに行くほかは他の人間と一切触れない。

一人家にいて、毎朝きっちり6時に起きて8時に寝る。

窓からダイヤモンドヘッドを眺めたり、庭仕事をしたり、ただ読書をしたり。

しかし、そこにある空気はとても暖かく、一緒にいると不思議と心地良かった。

会話を特にするわけでもない。ジルも時計が止まったかのような其の時間を楽しんだ。

思えば、こんなにゆっくりと空を眺めたことは久しぶりだ。

気分の良い夜は、庭にあるハンモックに揺られながら、男がウクレレを奏でた。

ウクレレに合わせて歌うハワイアンソングは甘く切なく、島に溶けていくようだった。

食事の前には手を合わせて今日の食事がある喜びを確かめた。

昔、人はこうやってアースに生かされていることを感謝していたのかもしれない。

大地に生えた植物を中心にした食事は不思議と優しい味がして、心

が安らかになった。

音が何もしない夜は庭に出て星を眺めた。そよそよと吹く風に乗ってかすかにプルメリアの花の香りがする。

テトもしばらく南国の静かな生活を楽しんでいるようだった。ジルは故郷に戻ってきたなと心から思った。

僕は確かにここで生まれここで育ったんだと、僕のいるべき場所はやはりここなのかもしれない。

僕は大地に生かされている。アースの息遣いを感じたような気がした。

ピュアソウルが二人も同じ家にいるとあって、神々が覗きにきたのか、不思議なことが起こる日もあった。

顔をなでられているような風や、ダイヤモンドヘッドの後ろ側に大きな男が見えることもあった。

朝日を見ているとテトとは違う形の小さな妖精がエンゼルトランペットを吹いて帰っていったりもした。

“ 時間がかかるな ”

数日たった日、テトがふとつぶやいた。

リアンとジルは早朝のビーチを散歩しに来ていた。

リアン取って置ききのビーチには人影がない。

真っ白い砂浜、海は朝日をあびて銀色に輝いていた。
波のない穏やかな海だ。

“ 待っているのもあれだからさ、こっちから仕掛けてみるかな。”

ジルはテトの言っていることがよくわからなかった。

“ 仕掛けるってなにを？”

“ 例えばさ。”

リアンが波際で杖をつきながらゆっくり歩いているのを見ながらテトが指をぱちんとならした。

急に強風が吹いた。リアンは体をふらつかせる。
それと同時にリアンの身長のお2倍ほどある高波がリアンの背後に迫った。

“ 危ない！”

ジルが思わず叫んだ。あの足では逃げられない。

リアンは高波に気付いていない。だいたい、いつも穏やかなこの海でこれほど大きな波が起きるなど想像もしないだろう。

“ ダメだ、波に飲まれる”

ジルの慌てぶりとは裏腹にテトは平然とそれを見ている。

高波がしぶきを上げてリアンの背後にせり上がり、リアンの体を飲み込もうとした瞬間。

ぴたつと風がやみ、波がすーっと収まった。

“なんだっ たんだ？”

ジルには意味がわからない。テトが

“あれ？おかしいなあ。”

とつぶやきながら首をかしげた。

“おかしいなあってテトがやったのか？”

“ああ、だってさ、近いうちに死ぬんだから待つてなくてもいいかなと思って”

“なんだよそれ。妖精ってそんなことしていいのかよ”

ジルが怒りを感じて言う。

“緊急事態で時間がないんだ。”

テトがなんでもないことのように言った。

“でも、おかしいな。ちょっと調べよう。”

テトがそう言って眼をつぶつてなにやらぶつぶつ唱えている。

“無理やり命の結晶を作るなんて妖精じゃなくて死神じゃないか。”

ジルは納得がいかないようにテトの周りをつろつろしている。

“まあ、落ち着けよ。”

テトはそういつて、またぶつぶつ唱えている。

“そっか、そういつことか。”

眼を開けるとテトがそういつた。

“時間がなくても待つしかないな。”

テトが残念そうにいつた。

“説明してくれよ。”

ジルがいららしながらそういつた。

“ピュアソウルにはさ、強力なガーディアンが付いているから、無理やりは無理だな。”

“ 守護霊みたいなものかい？ ”

“ 簡単にいうとそうだな。魂の応援団だ。一人ずつ皆にいるけど、ピュアソウルともなると力が強力だ。

こりゃ、自然にいくのを待つしかない。 ”

テトはそう言うのと諦めたように手をふらふら振った。

“ 仕方がないな。これで人間の絶滅が防げなくても。 ”

ジルは複雑な想いでこの美しい妖精を見つめた。

“ いじわるな言い方をするなよ。 ”

“ 今頃気付いたのか？俺は妖精の中じゃ、飛び切りいじわるなんだ。

”

妖精との恋

テトは頻繁にでかけるようになった。

どうやらデートを楽しんでいるらしい。

無理やり結晶を作れないとわかった途端のんきなものとジルは思った。

数日たった夜、月がきれいだったので、ジルはビーチにでた。波の音しかない月に照らされたビーチは幻想的で、神々しかった。

“神が決めたことなら、従うべきなんじゃ。”

ジルはここ数日、自分がどうすべきか悩んでいた。

このまま人類がいなくなってしまう方がいいのではないか。その思いは強くなっていた。

しばらく、ビーチを歩くと人影があった。ビーチに生えたヤシの木に寄りかかり海を見ている

“リアンさん”

声をかけて近寄ったジルは驚いた

“泣いてるんですか？”

“ ああ。
”

初老の男の涙は静かにほほを伝っていた。

ジルに気づいても涙を拭くこともなく海を見ている。

ジルは隣に腰を下ろして、男が話し出すのをじっと待った。

“ 前に君たちは僕に、なにか愛しているものがあるかと聞いたよね
？”

“ はい。ピュアソウルの愛は偉大だと聞きました。
”

“ その答えはイエスだ。
”

リアンが水平線に眼を向けたまま言った。

“ 僕の人生は彼女が全てだった。
”

“ 彼女？？
”

“ そう、30年も前に一緒に暮らしていたメネフネだ。
”

そういつて男は話し出した。

“信じるかい？”

“はあ。何しろ、最近は毎日メネフネといいますから、そういうこともあるかと思います。”

ジルがおかしそうにいった。
そうだ。僕らはメネフネと生活している。こんなおかしいことがあるだろうか。

しかも、そのメネフネは重要な任務そっちのけで、デート三昧。
そして生意気なことばかり言っているとてもハンサムな小さいやつだ。

ジルは改めてテトとの出会いとこの不思議な状況を見返すとおかしくて仕方がなかった。

“30年前、そのメネフネは僕の庭の隅にあつた蜘蛛の巣にひっかかって動けなくなってしまうてね。”

それを助けたのが始まりだった。僕は小さい頃から、人間に見えないものが不思議と見えてね。
友達は気味悪がって近寄らなかった。いつも孤独だったよ。だから友達ができて嬉しかった。

其のメネフネの名前はリリー。とても美しかった。

長い髪を小さな花で結んで。彼女の羽は時々七色に輝くんだ。

リリーは初め僕が妖精を見られることに驚いたけれど、すぐに仲良くなって一緒に暮らすようになった。

リリーは孤独な僕の話相手になってくれた。底抜けに明るい妖精と暮らすのがどんな風だかわかるかい？

そりゃ、楽しいんだ。後ろ向きなことは一切ない。人間の悲しみなんてちっぽけだと思えてくる。

僕は、その小さな美しい妖精と恋に落ちたんだ。

リリーがなぜ僕を愛したのかはわからない。けれど、彼女と僕は本気で恋に落ちてしまった。

僕は妖精のままのリリーでも充分だったけれど、彼女は僕の相手には自分は小さすぎると言い出した。

そして、ある日、

悪魔と取引をしてしまったんだ。

たった、3日だけ、人間の女性にしてあげると。そして、ついにあの夜。

リリーは人間の姿になって僕の前に現れた。

人間を超えた美しさだったよ。

僕らは一瞬を惜しむように愛しあった。そして、3日が過ぎたけれど、リリーは僕のもとから去ろうとしなかった。

僕は悪魔との取引を知らなかったから。このままずっと一緒にいられるのではないかと思ったよ。

けれど4日目。リリーは体の調子がひどく悪そうになった。

僕には何が起こったのかわからなかった。きつと悪魔との取引のせいだ、様子をのぞきにきたほかの妖精が僕の耳元にささやいて逃げた。僕は初めてリリーが悪魔と取引をしたことを知ったんだ。妖精が人間の姿になって現れたのに少しも疑問を持たなかった自分の浅はかさをのろったよ。

そして、其の夜リリーは姿を消した。リリーは其の後、一度も姿を見せない。

僕は毎日探したよ。でもどこにもいなんだ。30年経った今でも、僕はリリーを愛している。

ヤシの陰や、庭の草木。リリーがもしかしたらいるんじゃないかって、探してしまうんだよ。

ぼくはね、リリーのままでよかったんだ。

僕らは欲をかいいたばかりに全てを失ってしまった。”

男はそう言っつて、顔を覆つて泣き出した。

“あまり絶望しないでくれ”

苦しそうな声でテトが舞い降りた。

“ピュアソウルの絶望は答える。”

テトの羽の光が段々弱くなり、呼吸が本当に苦しそうなので、男もあわてて泣きやんだ。

“大丈夫か。テト。”

心配そうな男を見上げて、テトは次第に元気になってきた。

“よし、それでいい。絶望なんて何も生みはしないんだから。”

テトはリアンに言った。

“すまん。年甲斐もなくセンチメンタルになってしまった。

こんな月の夜は色々考えてよくないな。

どれ、少し話しすぎた。ウクレレでも弾くか。”

“いや、ウクレレの前に。ちょっと聞きたいことがある。

君の愛したリリーはセイラの母親じゃないか？”

テトの声に男は目をまるくした。

“なんだよ。テト。聞いていたのか？そのセイラって誰さ。”

“最近、僕がデートしている妖精さ。どうも、彼女、純粹な妖精じゃないようなんだ。

みかけは完璧な妖精だが、うまく隠しているけど、死を恐れている。人間のようだね。”

“人間のようにな？？”

ジルが驚いて声を上げた

“まさか。リリーの子供じゃないのか？”

リアンに生き生きとした希望と同時に不安が浮かび上がった。

妖精と人間の子供

セイラに事情を聞いてくるといつて飛び出したテトを二人の男は手持ちぶさたで待っていた。

やがて数時間がたったとき、テトが淡い緑色の髪をふわっとおろし、髪と同じ色の瞳が美しい妖精を連れてきた。

“セイラだ。”

セイラを見た瞬間、リアンは眼に涙をいっぱい浮かべた。

“初めまして。ずっと探していたんです。私も”

ちょっとはにかんで笑ったセイラを思わず手のひらで包み込む。

“言わなくてもわかる。リリーにそっくりだ。”

そういつてセイラを眺める。

“やっぱりな”

テトは満足げにその光景を眺めた。

“君のお母さんはどうしてる？”

“お母さんは、あのことで体を痛めたけれど、元気にしています。”

妖精ですから。”

セイラはそう言って微笑んだ。テトと同じように羽から光がこぼれ落ちる。

女性らしい柔らかな物腰のセイラを愛しむようにテトが見守っている。

“体を痛めた???”

“そう、悪魔と取引してしまったでしょ?それで。”

“どこが悪いのかな???”

心配そうに男が聞く

“取引をしてから3日間。人間の体を手に入れたあと、もし3日で去らなければ、体の感覚を一つずつ失うと言われていました。あなたの側を離れられなかった母は、それでもずっとあなたと一緒にいようと思っていました。”

4日目の朝、母は聴覚を失いました。耳が聞こえなくなっただんです。

そして5日目の朝、今度は声を失いました。そして、其の日、母は私がおなかにいると気づいた。

これ以上感覚を失うと子供を育てられなくなる。母はそう思ってあなたの側を去る決意をしました。

もし、母とあなたがもう一度あったら、二人とも命を失います。

妖精と人間は恋してはいけないことになっているのです。私の存在が問題なんです。

人間と妖精とのハーフなんて存在してはいけない命。

私は母と妖精として生きる道を選びました。あなたを探していたのはこのことを伝えるためです。

決して母を探してはいけません。二人ともそのまま命を失います。

母は死を恐れてはいません。妖精ですから。

けれど、わたしは母を失いたくはない。

半分人間の私にはどうしても目の前からいなくなる事実を受け入れられないんです。

母はもう一度あなたに会えるとわかったらすぐにでも飛んできてしまう。

私はそれが怖くて怖くて。絶対に会わないで欲しいんです。“

セイラは懇願した。

“妖精が体が悪いなんて聞いたこと無いぞ。”

“テトは言った。”

“そう、全てが特別なんです。悪魔と取引なんて恐ろしいタブーを犯しています。許されないことです。私の存在も。”

“わかったよ。”

リアンは優しくセイラに言った。

“君を悲しませるようなことはしない。僕の愛する娘だ。だけどね、セイラ、僕と君のお母さんは本気で愛し合った。

そして君が生まれた。そのどこがいけない？生まれてくる命にタブーなんてあるものか。

セイラ。胸を張って生きてくれ。妖精としてでも、人間としてでも構わない。命を輝かせてほしい。”

“リアン。私は本当にあなたを探していました。”

セイラは再び男の胸に抱きついた。

“優しい人でよかった。私のお父さん。”

“そうさ、セイラ、君は特別だ。この世の中に1人だ。”

僕は君の特別なところに引かれたのさ。妖精の陽気さの中に、人間の切なさを持つ君に。本当に君は美しいよ。”

テトもそう言っただけを彼女を抱きしめた。

セイラは初めて自分の命を認められたような安心と幸せの中にいた。

恋人と父親。二人の男性がセイラの命を認めてくれた。それが何よりも嬉しく感じた。

私は望まれて生まれてきた命。リアンの言葉がセイラの支えとなった。

妖精のデート

“ セイラ、今夜はどこへ行こうか？ ”

セイラとのデートが楽しくて仕方がないテトは今夜もセイラを迎えに来た。

“ そうね、ダイヤモンドヘッドの天辺で星座を作るっていうのはどう？ ”

“ いいねー。 ”

そういうと二人はくるくる周りながらダイヤモンドヘッドへと向かう。

一直線に飛んだり、くるくると蛇行したり、夜空を楽しむようなテトとセイラ。

キラキラと二人の光の粉がまざりあつて、夜空を彩った。ワイキキでは金曜日恒例の花火が打ちあがった。

“ 見てー。花火 ”

セイラが嬉しそうに振り返って言った。

“ ほんとだ。 ”

テトも振り返ってしばし見とれる。そして二人顔を見合せて、ふふふと笑うとまた飛び出した。

ダイヤモンドヘッドの上につくと、眼下にはネオンが広がっている。こつこつした岩の平らな部分を探して二人腰掛ける。

“きれいなー”

セイラが感嘆の声を上げた。
“

“ははは。きれいなー。”

テトも答える。セイラの淡い緑色の髪が風にそよいでいる。長いまつげが美しい。そのまつ毛がふと下を向いて瞳が翳ったことをテトは見逃さなかった。

“セイラ、君は時々不安を感じるの？”

セイラはテトを見て言った。

“ええ、妖精なのに、時々恐怖で震えるときがあるわ。おかしいわよね？”

セイラは恥ずかしそうに言った。

“周りは妖精ばかりで君の気持ちわからないだろ？”

“そうね、ママでさえ気づいてはくれないわ。”

セイラは人間と妖精の狭間で心が揺れ動いているようだった。陽気な妖精の中、悩みを分かち合えないのはセイラにとってはつらいことのようにだった。

テトは優しく語りかける。

“大丈夫。何にも心配要らないよ。僕が全部守ってあげるから。”

テトははかなげなセイラが愛しくてたまらない。どうして彼女はこんなに切なげに美しいのだろう。

惹かれあう二人の妖精の恋の色で羽からピンクの光が飛び散った。セイラの不安を打ち消すようにテトは元気に言った。

“よし、どんな星座を作ろうか？”

すぐに明るさを取り戻してセイラもキラキラと光の粉をまく。

“そうねー。まずは妖精の形”

セイラはそう言って、星を指差すようにゆびをぴゅーっと動かした。夜空の星はビーズのようにすーっと動いて形を作り始めた

“これが、羽。”

“じゃあ、これがセイラの髪”

“なかなかいいわね”

“その隣は？”

“家族を作りましょ。”

“家族？”

“そう、テトと、私。ママと、リアンも小さくして入れて。”

小さな妖精が4人並んだ。

“こんな風に家族と一緒に居られたらどんなにいいかしら。”

セイラがまたふと寂しそうになる。

“ママはもう永遠に愛する人に会えないんだわ。悪魔と取引をしたばかりに”

“そうだな。生きている限りは会えないね。”

“残酷よね。”

“僕だったら、命を失っても君に会うことを選ぶな。”

“本気で言っているの？”

“もちろん、本気さ。愛ってそういうものだろ？”

セイラが考え深そうに言った。

“ママもそうね。わかっているの。でも私はママを失いたくないだけ。私が、我侭なのかしら??”

テトは愛くるしいセイラをそつと抱き寄せる。

“起こることは自然に起こる。起こらないことは自然に起こらない。今はそんな不安忘れよう。僕という時間をただ楽しめばいい”

テトにそつと言われると、セイラの不安はひと時消えてなくなるの
だった。

リアンの死

セイラは其の後たびたびリアンの家を訪れるようになった。

初めて父にあった喜びと自分の存在を見つめなおすきっかけになったのだろう。前にもまして生き生きと美しく飛び回った。

しかし、リリーは娘の変化に気づいてた。

“恋でもしているのかしら。”

ある日、娘の相手が気になったリリーはうきうきしている娘の後を追うことにした。

ここは。リリーには見覚えのある小道に入っていく、やがて夢になんども見た白いこじんまりした家を見つけた。セイラが慣れた様子でその窓の隙間から入っていく。

“あの家は。もしかして。まだあの人があそこにいるのかしら。”

リリーの心はときめいた。セイラが立派に成長した今、あの人にもう一度会いたい。

リリーの心は再会への期待でいっぱいだった。悪魔との取引のことなどもう頭になかった。あわてて娘の後を追う。同じように窓のほんの隙間をくぐって家に入った。

“ああ、このベッド。あの人と人間として過ごした3日間。”

昨日のことのように蘇る甘い日々。

“この本棚。彼はいつもここから本を取って、私に人間の物語を読んできた。”

すべてが鮮明に思い出される。リリーは懐かしむようにリアンのうちの家具を見て回った。

リリーと過ごした日々から丁寧に手入れされたそれらは、古ぼけてはいるけれどほとんど何も変わらずそのままだった。

そして、ゆつくりと、下に滑り降りたリリーはついに、リアンと楽しそうに話すセイラを目撃した。

“あの人は。ああ、あの人は。リアン。間違いないわ。”

リリーは一瞬の迷いもなくリアンの元へ飛んでいった。肩をくすぐるような感覚を覚えて、リアンが振り返る。

“テトかい？”

リアンは七色に光を変えながら満面の笑みを浮かべているリリーと目があつた。

“リリー。リリーなのか？”

しばらくは声も出ないほどお互い見つめあつた。

“ ああどれほど会いたかっただろう。”

声が出せないリリーも声は静かに笑っている。耳が聞こえなくてもリアンが何を言っているのかわかった。二人は通じ合っていた。

“ リリー。リリー。”

そつと手のひらに入れて抱きしめるリアン。嬉しそうにリアンの手のひらの中でほほをすりよせて喜ぶリリー。

二人の様子をみてセイラが青ざめる。

“ 大変だわ。私の性で、ママがリアンに会ってしまった。悪魔との約束を破ってしまったわ。”

慌てふためいてテトを探すセイラ。

“ テト、テト。どうしよう。どうしよう、ママが行ってしまうわ。”

セイラの異変を感じてテトがセイラの横に舞い降りた。

“ 落ち着けセイラ。”

“どうしよう。ママが死んでしまふ。”

悲痛な声のセイラとは裏腹にリアンとリリーは幸せそうだった。一瞬を惜しむように見つめあい、抱きしめあった。

リリーは悪魔との取引を思い出した。

“もうあまり時間がないわ”

リリーがリアンに訴える。リアンはリリーの様子を見て悟った。恐らく二人とも死ななくてはいけない。それが悪魔の取引なのだ。

“そうだな。二人が大好きだった浜に行こう。そして一緒にその時をまとう。”

リアンはそういってリリーをそつと手のひらで包み込んだまま、浜へ降りていった。

“今度生まれ変わったら片時も離れず一緒にいよう。”

リアンが言った。

“人間に生まれてくれるかな？リリー。それとも、僕が妖精になれたりしてね。神様に頼んでみようね”

リアンがそういって、人差し指でリリーのほほをくすぐった。

リリーはうなずきながら声をたてずにくすくすっと笑った。

これから死を迎える二人とは思えない、幸せいっぱいひと時だった。

“そろそろだな”

リアンはそういつて、リリーを抱えたまま白い砂浜に立つヤシの木の根元に腰をおろした。
銀色に輝く海を見ながらリアンがリリーに優しく話しかける。

“ぼくらが大好きだった海だね”

リリーはこくんとうなずいて嬉しそうに声を立てずに笑った。

やがて、日の光に溢れていた浜辺がさーっと黒い雲で覆われて一瞬真っ暗になった。

黒い影が二人をぐるぐる包み込むと天へ舞い上がった。

後から追いつたセイラが悲鳴を上げる。おろおろするばかりで何もできない。

“ママが連れてかれちゃうわ。”

セイラの悲鳴を聞いて横にいたテトがセイラを押さえる。

“セイラ、もうどうにもできない。悪魔との取引は消せないんだ。”

テトが慰めるようにいった。

“ ああ、ママが。ママが死んでしまっわ。”

二人は幸せそうに横たわったまま黒い影が消えるとともに息を引き取った。

やがて二人の口からすーっと白い煙が抜け出て青い空に吸い込まれた。

テトはそれをみてほほを緩めた。よかった魂は天に戻った。

セイラはしばらく立ち尽くしていた。黒い影が消えたので、テトはリアンのもとに舞い降りた。

そして、テトはリアンの胸元に手をかざすと静かに祈った。

リアンの胸元が一瞬ぴかっと光ったあと胸から一筋の光が天へと伸び、リアンの胸元に

恐ろしくピュアな透明の小さな結晶が浮かびあがった。

“ ピュアソウルの結晶。”

テトがつばやいて手のひらに収める。テトも初めて手にするその結晶は小さいけれど恐ろしくパワフルだった。

“ セイラ、セイラ、こっちにおいで”

テトが泣きじゃくりしゃがみこむセイラを包むように抱きしめた。
柔らかな淡い緑の髪が風にのってテトの鼻をくすぐる。

泣いていてもセイラは美しかった。けれど、この絶望は妖精にはないものだった。

セイラは紛れもなく半分人間だ。

テトの体はセイラの絶望でどんどん重くなる。テトはセイラの悲しみようを少し不思議な気持ちで見つめていた。

絶望で重くなった体を引きずりながらセイラを支えて体を起こしながらやさしく話しかけた。

“ 可愛いそうなセイラ。でも、またきつと会える。 ”

“ テト、そんなこと今はとても信じられない。 ”

しゃくりあげながら、セイラは答えた。

“ セイラ、僕の顔を見て ”

両手でセイラのほほを包むように顔を向き合わせると、テトはそつと言った。

“ 本当だよ。セイラ。僕を信じて。君とママの縁はそんな薄っぺらなものじゃない。絶対にまた会えるよ。それにね。 ”

といって、テトはそつと横たわる二人の方を向いた。

“見てごらん。セイラ。君のママの幸せそうな顔。”

セイラは涙でかすむ目をこらして、二人の姿を見た。寄り添うように横たわっている自分の母親と

、巨大な初老の男。確かにその顔は幸せそうだった。

“セイラ。僕だつて君にもう一度会つたためなら悪魔とだつて取引するさ。そんな人にめぐり合えるなんて奇跡なんだよ”

テトは明るく慰めた。

“絶えられないわ。ママの笑顔ももう見られない。

うちに帰ってもママのハグはない。テト、わかるでしょ？

恋人とママとはぜんぜん違うの。ママはいつだって私を守ってくれた。

私はママにまだ何もしてあげてない。ママは声だせないし、耳も聞こえないのに私を育ててくれたのよ。

私がすべてみたいのに、いつも私を思い、助けてくれた。その大切な私にさよならも言わず、

ママは愛した男の姿を見たたん飛んでいってしまったのよ。まるで私なんていないかのように私を素通りしてね。

パパの姿を見たたん、急に私は価値がない存在のようになってしまったのよ。”

テトは言い聞かせるようにセイラに言った。

“セイラ。君のママが君を大切に思っていることと、愛する人がい

るっていうことはまったく関係ないんだよ。

ずっと会いたかった人が目の前いたんだ。ママが思わず駆け寄ったってそんなに責められないだろ？”

“嫌よ。もう一度、ママに会いたい。”

セイラは赤ちゃんに戻ったかのようにテトを困らせると泣き崩れてしまった。

太陽がまた急にその光を弱めたかと思うと、再びやってきた黒い雲がそっと二人を包み込みそのままもちあげた。

二人を包み込んだ黒い雲は回転するように二人を取り巻き、二人の姿を隠してしまうと、ブラックホールのようにあたりの空気ともども吸い込み始めた。

“ああ、ママが。ママが行ってしまう”

悲痛なセイラの叫び声とともに、黒い雲はシューンと音を立てて吸い込むスピードを増し、そして消えた。

あたりは何事もなかったかのようにまた日の光が浜辺を照らした。

“ママは。ママは連れて行かれたわ。どこにいったの”

テトはすぐに答えられなかった。魂はリアンとともに天に戻った。けれど肉体の方は悪魔が持ち去ったのだ。どういう風に利用するかは悪魔の取引条件にあったのだろうか。

魂がぬけてたりりとリアンの肉体はただの抜け殻。彼らに苦しみはない。けれど今のセイラにそれがわかるだろうか。

“ リリーは妖精だ。リアンを見たら他の悲しみのことなんて絶対思いつきもしない。妖精は目の前の幸せに夢中になるんだ。”

セイラは泣いたまま顔を上げない。テトはセイラの絶望に押しつぶされて息も絶え絶えだ。

“ OK・セイラ。わかったよ。カネの水をとってきてあげる。”

この世の終わりのように泣きじゃくるセイラを抱えながら、テトは堪忍したかのように言った。

“ カネの水ですって！”

セイラが驚いたようにテトを見上げた。

“ そうだ、巨人が守る洞窟にあるカネの泉。その清水を飲めばママは生き返る。それでいいかい？”

“ 本当にあの伝説の水が手に入るの？”

“ 入るさ。期待していて。だからもう泣かないんだよ。”

セイラの緑の瞳に希望が宿った。羽が光を取り戻す。立ち直りの速さもまた半分妖精の証か。

まったく不思議な少女だとテトは思った。今泣いたと思ったら、もう笑っている。

人間の弱さと妖精の陽気さをあわせ持つ世界で一人の妖精と人間のハーフ。テトは、セイラが魅力的に思えてならない。

“ ありがとう。テト ”

胸に飛び込んできた愛しい少女の髪をなでながらテトは覚悟を決めた。

ピュアソウルの結晶を早々に集めて、カネの水を取りにいった、悪魔からリリーの肉体を取り戻し、セイラのもとへ戻る。

よし、急がないと。セイラの中に湧き出た希望で体を持ち直す。

アースも最終決断だったんだ。

テトは一度決めたら振り返らない。

世界は過去も、未来もない、一瞬に力を注ぎ、一瞬が重なってできている。

起きてもないことを心配して何になるだろう。今。今に力を注げば未来も作られることをテトは本能で知っている。

だから過去をひきずったりしない。やることが決まったことでテトはいつもの調子を取り戻した。

と、そういえば、もう一人のピュアソウルはどうしたんだっけ？

セイラの父親のもとに居候していたあいつだ。

テトはすっかり忘れていたジルをやっと思いだした。

旅だち

セイラを送り届けてリアンのうちに帰るとエプロンをして、鍋を片手にキッチンに立つを見つけた。

“なにしているんだ？ ジル”

テトが声をかけると嬉しそうにジルは振り返った。

“やあ、遅かったねー。色々世話になっちゃったから、ディナーをご馳走しようとおもってさ。”

そういうと、

“こっちきてきて、”

とテトをダイニングに招きいれ

“じゃじゃーん”

とクロスととった。そこには食べ切れんばかりのご馳走が並んでいた。

“我が家特製のフリフリチキンとバターライス。コブサラダ。おいしそうだろ？ リアン喜ぶかな。ところでリアンは？？”

まったくのんきなやつだ。テトは説明するのが面倒になっていった。

“まあ、いいさ。とりあえず僕らだけで食べようぜ。”

“でも、リアンに作ったんだけど。”

“いいんだ。いいんだ。”

腑に落ちていないジルに苦笑いしながらテトはご馳走をほおばった。

まあ、いいかと思ったのか、テトと並んで嬉しそうにご馳走を食べるジルをみながら、

“こいつは本当にピュアソウルなのか？もっと気高い生き物じゃないのか”

とテトは自問自答した。

ジルは自分が料理に専念している間に起こった出来事を一通りテトから聞き終わると、ふうつと長く息を吐いた。

“なんて色々起こった日なんだろう。その全てに僕は蚊帳の外だったわけか。”

ジルは少しいじわるな質問をテトにしてみたくなった。

“これは君が待ち望んでいた死だろ？どんな気分だよ。”

テトはジルの質問になんの感情もいれずに普通に答えた。

“ そうだな。 ピュアソウルの安らかな死はなかなかいいもんだっ
よ。

リアンの死に祝福を！長い旅を終えて家に帰るんだ。めでたいだろ
？”

ジルにはそんな風に人の死を割り切ることはとてもできないと思っ
た。

“ 僕はそんな風に思えないよ。 人の死はなんであれ悲しい。 ”

テトはそんなジルを少し不思議そうに見つめた。

人間のピュアソウルってこんな思考レベルだったか？テトの頭に疑
問が再び浮かぶ。

ジルはそれからふと思ったようにこういった。

“ 僕って本当にピュアソウルで、役に立つんだろうか？ ”

こつちが聞きたい台詞だとテトは思った。

“ 今のところは出番なしだな。 きっとこれからだろ ”

励ますようにテトは明るくいった。

“ そうなのかな。 なんとなくか、今ひとつ全然実感が無いというか、
人間が大変なことになっている実感もまったく無いし。 いろんなこ

とが起きて僕も一つも見えてないし、なんなんだろうな僕の役目は”
ぶつぶつぶやくジル。素直なやつだとテトは思った。

“とにかく、今日はゆっくり休んでさ、これから大冒険だからな。
まだたった一つだ。”

テトはそういうと自分もするりとベットに体をいれ、あっというまに眠りについた。
羽をやすめたテトは眠りながらにしても寝息とともにあでやかな光を放つ。煙のように現れては消える光の満ち引きはオーロラのように、
で、

“まったく妖精は美しい生き物だなあ”

ジルはうっとりとその様子を見つめ、そして電気を消すと自分も眠りについた。

次の日の早朝、名残惜しげに手を振るセイラをテトはもう一度しっかりと抱きしめた。

一度旅立つとテトは振り返らない。二人は旅立った。次のピュアソウルへ。

“あのさ、テト。そろそろこの服飽きたんだけど替えて。”

ジルのんきに言う。

“色々うるさいやつだな。今度は何色がいいんだ？”

“ そうだな。 ちょっと渋めのブルーで草花が入ったアロハにしてよ。ビンテージっぽいやつ ”

“ はいはい。 ”

テトはそういつて指をぱちつとならした。

“ うーん、かっこいいね。 すっごい高そうなアロハだ。 ”
ジルは満足そうにいった。

“ さてと、次のピュアソウルはっと。 おっと。 緊急信号だ。 こっちが先だな急げ。 ”

テトが急に慌てたので、ジルはアクセルを全開にした。
リアンが乗っていた黄色いワゴンは古いのかアクセルをいっぱいにしてもエンジンがうなるだけであまりスピードがでなかった。

“ リアンの車勝手に乗って平気かな ”

“ リアンは死んだんだぜ？ ”

テトが面倒くさそうに答える。

“ でもさ、死んだとしてもその人の財産だから。 ”

ぶつぶつ言うジルをさえぎるようにテトが言った。

“ 人類を救う為に妖精と旅しているヤツが常識で考えるな ”

ぴしゃっと言われたのでジルは黙った。それもそうだな。

“あのさ、テト、もっとなんか瞬間移動とかできないの？妖精って？この間ペレの所行ったとき使ったみたいなやつ。”

唸り声を上げるばかりのエンジンに嫌気がさしてジルが言った。

ビーチの砂のような色の住宅が立ち並ぶ道を抜けてH1と呼ばれるハイウェイに乗ったものの、

一向にスピードは上がりず周りの車に追い抜かれてばかりだ。

“あんなのいっぱい使ったらお前の寿命もうないぞ。仕方ないのさ。人間は原始的な物体しよってるだろ？俺だけ先にいったってなあ。人間の移動手段に付き合ってるんだから、あああー。間に合わなくなったら大変だろ。急げ”

テトが急かすのでハンドルに力が入る。

“ついでにさ、ジル。どうせ死期が迫っているピュアソウルのもとに行くんだからさ、リアンの時みたいに、色々説明しなくてもいいな。やり方を少し変えよう。もつと自然に近寄って話せばいいな。時期が来るのを待つしかないんだし。”

テトが行った。ジルはそれもそうだと思った。

あなたの死を待つて結晶を作りますなんて説明受け入れられるはずがない。

リアンみたいな人が最初でよかったな。神の使いなんてかなり怪しいじゃないか。

ついた先は小児病棟のある病院だった。

丁寧に手入れされた芝の庭を一目散につっきる。周りの普通の人間たちにはテトが見えないらしく、

息を切らして走るジルを不思議そうに眼で追っている。

テトはある病室へと迷いなく一目散へ飛んでいく。ジルは必死で追いかけた。

神の使い

“ふう、間に合った。”

と飛び込んだテトは、

“止める！！”

といって、少年のチューブに手をかけた母親の前に立ちはだかった。

“えっ。”

といったまま、しばし呆然となるその母親は、すっかりやつれ、くたくたに疲れてしまっていた。

ベッドにはさまざまな器具をつけた10歳位の男の子が横たわっている。

“私ついに頭がどうかしちゃったんだわ。妖精が見えるなんて。私もすぐあなたたちの世界へ行きますから。。。 ”

きらきらと光りながら美しい羽を持つテトを目の前にして

ぶつぶつとつぶやく母親にテトははつきりといった。

“しっかりしろ。これはまだ、この世で現実だ。”

母親は大きく目を見開いて、うろろろし始めた。後から息をきらして追いついた

ジルは落ち着きましようと思いをかけて母親を椅子に座らせ、そばにあった水を手渡した。

母親はぼーっと差し出された水を一口飲んだ。

すっかり冷静になるまでテトもジルもしばらく見守った。

“なぜ、自分の息子の命を奪うんだ。”

テトは言った。

“この子はもうだめなんです。”

すでに重い病気で脳死状態。産まれてからずっと入退院を繰り返して、散々苦しんだんです。

それでもなお、こんなチューブに繋がれて、これ以上はもう。。。”

そういつて泣き出した母親。

ジルは、母親に同情しつつも、ただ命だけを永らえる最新医療に疑問をもった。

口から小さな腕から無数のチューブが少年の体から伸び、ぴーぴーと電子音を立てる機械に繋がっている。これで幸せといえるのだろうか。

“そうだな。もう生きているとはいえない。けれど、人の命を人間

が奪うことは許されてないんだ。どんな理由にしても絶対にはいけない。”

とテトは言った。つい数日前、リアンの命を奪おうとしたテトの言葉とは思えないじゃないか。ジルは思った。

ジルは、テトに言った。

“けれど、テト。この子はもう充分戦った。もう楽にしてあげても”

こういう命こそ、待ってないで早く楽にするべきじゃないのか？ジルにはそう思えた。

“だからさ、それは人間レベルで判断することじゃないんだ。

わかるだろ。決まりなんだ。

決まりつてのは守らなくちゃいけない。彼が自分で決めて、神がすることさ。人間の領域じゃない。人間がしちゃいけないんだ。”

“彼ってこの子のことかい？この子を選べるのか？”

“もちろん、選べる。思い通りにすべてが行くわけじゃないが、ほとんどのことについて人は自分で選ぶ権利を与えられているんだよ。自分の考えた結果が現実起こる。

上手く意識をコントロールできないから、思い通りに行かないよう

に思うだけで、実際は自分で選んでいるだ。

この子のように、幼くして病に倒れる子供は魂のレベルがほとんど人間を超えている。

通常の人間の痛みを忘れないようにあえてこういう運命を選んで産まれてきたりするんだよ。

この子の場合にはまさにそれだ。天使が人間に降りてきたピュアソウルだ。気高いね。短い人生の中で溢れるほどの愛を回りに振りまいたはずさ。”

テトの言葉に母親が顔を覆って泣き出した。

“ ああ。。本当に、天使のような子でした。

エンジェル

ジェイクを身ごもったのはリサがすでに子供を諦め始めていた四十歳手前だった。

結婚して八年も子供が授からなければ、希望はだんだんと絶望へとなる。

苦しんだこともあったが、ずっと、このまま夫婦二人の生き方もあるのかもしれないと力が抜けた数日後の妊娠発覚だった。

リサの喜びようといったら。大切に大切に愛しむように胎児を育てた。

以前は眼をそらしがちだった小さな子供ずれの家族にも微笑を返せるようになった。

どんどん自分が癒され、優しくなっていくのがわかった。

母になる準備を終えた十カ月後、ジェイクは元気に産まれてきた。瞳がダークブラウンで黒髪のハンサムな赤ん坊だった。

“ ああ、あなたのマミーよ。産まれてきてくれてありがとう ”

貿易風が優しくほほをなでる昼下がり、病室のベッドで感動の対面に感激の涙を流した。

だから、ジェイクが産まれて数カ月後、生まれながらに心臓の疾患があることが検診でわかったときは頭をなぐられたようなショックがリサを襲った。

“ごめんなさい。ジェイク。丈夫に生んであげられなくて、ごめんなさい”

リサはただ無邪気に笑うわが子になんともそうやってあやまった。

“できることなら私の心臓をあげるのに”

自分の命より大切な存在がこの世にあるなんて、考えもしなかったリサはわが子の存在の大きさに圧倒された。

この子を救えるなら自分は喜んで命を差し出すと神様に祈った。

ジェイクは体が小さかったが、普通の子と変わらぬ生活をしていた。時にはビーチで水遊びをしたり、緑豊かな公園を散歩したりもした。それが3歳をすぎたあたりから病状が悪化してきた。体の成長に心臓が耐えられなくなってきたのだ。

少し走ると軽い発作がでるようになった。2度ほど大きな手術をした。

両親は2つの仕事をかけもちしながら治療費を工面していた。

感謝祭の日、ジェイクは感謝祭のご馳走を食べながらリサに言った。

“マミー、ぼくはね、クリスマスに元気な心臓をもらうんだ”

ジェイクがいった言葉にリサは

“そう、サンタさんきつとくれるわね”

といいながら目頭を押さえた。

“ ハワイは雪が降らないじゃない、マミー。サンタさんは何に乗ってくるのかな？ ”

“ サンタさんは波にのってくるわ。サーフボードでね。 ”

リサは茶目っ気たっぷりに言う。

“ へえ、サンタさんってサーフィンできるんだ。すごいねー。 ”

“ そうよ、魔法が使えるんだもの ”

“ トナカイとさ、ソリもサーフボードに載せてくるのかな？ プレゼントびしょびしょになっちゃうよね ”

リサは笑いながらいった。

“ 言ったでしょ。魔法なのよ。だから濡れないの。 ”

“ そっか、マジックなんだね。サンタさんに会いたいなあ。ああ、でも寝てないと心臓交換できないよねー。 ”

“ そうね。さあ、ジェイク、マミーが作ったターキーもつと食べて。 ”

リサは明るく言いながら、小さなジェイクの願いをサンタさんが本当にやってきて叶えてくれたらどんなにすばらしいだろうと願った。

ジェイクは自分のために働きずめの両親をみてこんなこともいった。

“マミー、僕の性で大変だよね。ごめんね。ぼくの心臓がちゃんとしていれば、マミーこんなに疲れなくて済んだのにね。”

そんなジェイクといるだけでリサは心がきれいになって清々しい気持ちになるのだった。

“いいのよ、ジェイク。私あなたのマミーでいることが幸せで仕方ないの。”

マミー、あなたに会えるの何年も待っていたのよ。一緒にいられてこんなに嬉しいことはないわ。”

ジェイクは病気を持っていてもいつも前向きで明るかった。人のことばかり気にかけている愛に満ちた子供だった。

ある年の学校のスポーツデーの日、
フィールドの片隅で、ジェイクは激しい運動ができないので見学することにした。

ジェイクが座りながらみんなの支度を見ていると、すでに太りすぎて運動が嫌いなマイケルがジェイクに近づいてきて言った。

“いいな、ジェイクは走らなくてすむじゃない。僕、やりたくないんだ”

マイケルは本当に走りたくないみたいだった。ジェイクは友達が多かった。

優しくて何か話を聞いてくれるジェイクはみんなの相談相手として尊敬を集めていた。

マイケルもそんなジェイクに愚痴を聞いて欲しくてやってきたのだ。

“本当にうらやましいよジェイク。”

隣にどかと座ってため息をつくマイケルにジェイクは言った。

“マイケル、ぼくはさ、毎晩神様に祈っているんだよ。走っても平気な体になりますようにって。”

マイケルはさ、僕が毎日欲しがっているとっても素敵なものをもっ持っているんだ。

僕の望みをもっ叶えてもらってる。すごいことじゃない？”

“ふーん、走れるってそんなにいいことなのかな？ぼく走るの嫌いだから。”

“嫌いでもさ、走れるってことはすごいことだよ。それだけで宝物さ。”

“そっか、そういうもんかな。”

しばらくフィールドを走る友達を眺めていたマイケルがふと言った。

“そうだな。なんだか僕、走れるってことがとってもいいことな気がしてきたよ”

ジェイクは素直な友達に嬉しくなって言った。

“マイケル、遅くてもぼく応援しているから。楽しんで。”

ジェイクに言われてマイケルも笑顔になった。

“ オッケー。ジェイク。僕走ってくるねー。遅いけどね ”

“ ははは。遅くてもいいんだ。風を楽しんで。ジャストエンジョイ！ ”

ジェイクが明るく声をかける。

マイケルは本当にとどかかと走っていった。

その日、うちに帰ってからジェイクはリサに言った。

“ みんな普通に健康だとどれだけありがたいことかわからないのかな。 ”

僕なんて健康さえ手に入れば他に何もいらないぐらいなのに。

僕は小さなことでも人一倍嬉しいからラッキーなのかもな。

毎日、朝マミーに会えるだけで時々泣きなくなるほど嬉しいんだ。

今日も無事に会えたって。 ”

“ ああ、ジェイク。あなたに毎日会えて、マミーもどれだけ嬉しいか ”

りさはジェイクを抱きしめた。小さな幸せに溢れた暖かいひと時だった。

ジェイクは母親思いの優しい子に育っていった。

学校に行くと、学校の庭に咲いていたといっちはプルメリアの花を持ち帰ったり、

“マミー、僕が持つてあげるよ。”

と小さな手を差し出して重い荷物を持つてくれようとした。

急なスコールに降られると

“マミーがぬれちゃう”

といって、大きな葉っぱをとってきてリサにかざしてくれたりもした。

毎日、ジェイクと過ごす喜びでリサは自分の心が洗われるのを感じていた。平穏な日々は長く続かなかった。

ジェイクが9歳になろうとしていたとき、大きな発作がジェイクを襲い、そのまま昏睡状態になってしまった。

意識が戻らないまま、祈るように過ごした日々はもうすぐ1年になるうとしていた。

心身ともにリサは限界に近づいていた。

もう、楽になろう、ジェイクと一緒に私も行こう。

そう思ってチューブに手を伸ばした瞬間、

テトが入ってきたのだった。

天使が天に帰る日

“ ジェイクは私の生きがい、私にたくさんのお愛をくれたんです。

だからなぜ、神様はこの子にこんな不運をと恨んだことも一度や二度じゃありません。”

“ 恨んじやだめだよ。この子があなたを選んで産まれてきてくれたことに感謝しなくちゃ。

すばらしい幸運だったのだから。

ピュアソウルの子供をもてるなんて、ものすごくラッキーなことさ。

いいかい。人間の死を人間が決めることは許されていないんだ。覚えておいて。どんなときも。”

そういうと、テトは天に向かって祈り始めた。

“ そうか。この子はね、どうしてこの世にまだ残っていると思う？

自分が死んだあと、あなたが後を追って命を絶ってはいけけないと。

そのメッセージにあなたが気づくまではいけないと残ってくれていくんだよ。

痛みに耐えながらね。

早く楽にしたいならあなたが気づかなくてはいけけない。

彼は一度死ぬけれど、魂は天に戻るよ。

そして、また産まれる。

人はこの世の死を恐れすぎる。命は繰り返す。永遠にね。

そして、ピュアソウルを目指す。

そのあとは人間を超える。

そういう風にできているんだよ。

すべては神のもとにね。

こころを開放してごらん。この子のメッセージが聞こえるはずさ。
”

テトはそういうと、母親の胸をそつとなでた。
テトの光がずっと母親の胸に入って消えた。

“ほら、手をかざしてごらん”

ちいさなおでこのあたりに母親がそつと手をかざす。

“ああ。ジェイク。聞こえるわ。夢にまでみたあなたの声。
あなたの笑い声。あなた、ママと会えて幸せだった？”

そして、母親ははららと涙を流した。

“そう、わたしもよ、ジェイク、

アイラビューー。

わたしの子供に生まれてくれてありがとう。わかった。

わかった。ママ、死んだりしないわ。

あなたが消えないとわかったから、

そう、ママを見ていてくれるの？

ありがとう。ジェイク。もういいのよ。ママは大丈夫。”

そういうと、母親は最後にしっかりとジェイクを抱きしめた。

“一端、さよならね。ジェイク。ありがとう。”

つきものが落ちたように穏やかな顔になった母親の肩をジルはしっかりと抱き寄せた。

ジェイクの体がぴくつと動くと、ぴっぴつと電子音を立てていた機会がぴーと長い音をたてた。

リサもジルも神聖なものを見るように少し離れて見守る。

ジェイクはいった。体から抜け出た魂はやつと痛みから解放され、天に帰ったんだ。

ジェイクの体から真っ白に輝く光の玉がすーっとでてきた。

目の高さまで上るとぴかっと一瞬目のくらむような光を放ち一筋の光が高速で天にむかって昇っていく。

“ジェイク。みていてね。ジェイク。マミーがんばるから。”

その光をみながらリサは生き抜く誓いを立てた。

ジェイクの胸元には一筋のかげりもない、恐ろしく透明な水晶のようないさな玉ができていた。

これがピュアソウルの結晶だ。

純度の高い愛の結晶。

テトはそういって、少年の胸元から持ち上げるとジルに渡した。

人として産まれてきた小さな天使のピュアソウル。

それはジルの手の上で痛いほど純粋なパワーを放っていた。

自分に少しでも邪心があつたなら、触れたものを溶かしてしまうようなパワーだった。

ジルは完全にもてあましていった。

“テト、僕はこれを持っていて大丈夫かな？なんだか怖いんだけど。”

“恐れることはないさ”

その様子を見ていたテトはいった。

“きちんと持っているじゃないか”

テトは少年のピュアソウルを不思議そうにながめているジルを見ながらこう思っていた。

ピュアソウルを普通に持てるってことはやっぱりこいつ、ピュアソウルなのか。
信じがたいな。

ピュアソウルは少しでも邪心があるものには触れることすらできない。

純度の高いソウルはそれだけ強いエネルギーを持つ。

とても普通の人間が近寄れるものではないのだ。

それを証拠に少年の母親は涙を流しながらベッドで気を失ってしまっている。

テトはすこし暗示をかけた。テトはリサが気を失っている間にマナ、生命の力を充電してあげる。

リサは憔悴しきっていた。これで次目覚めたとき、多少は体が楽なはずだ。

ピーという電子音もすでに聞こえない。病院の関係者すら一人も部屋に入っていない。

ピュアソウルの結晶は不純の多い人間には強すぎるのだ。

人は苦しいはずのこの世で長生きすることを望む。けれど往々にして魂のエリートは早く旅立つ。

この世の役割を早く終え、自分の課題を早くクリアして帰っていく。この子のように子供のうちに帰ってしまう子はまさに天使の生まれ変わり。

短い人生だが恐ろしく影響力を残し、周りの家族の魂を清めて帰っていく。

今は悲しみにくれるこの母親も天使に選ばれた魂。乗り越えられる力を秘めた強い魂をもっているのだ。

人はその力量に応じて課題を決めて産まれてくる。

だから乗り越えられないことは初めから起きない。悲しみも、苦しみもすべては自分の魂を磨くためにやってくる。

磨く。小さな傷をたくさん作って輝かせる行為。傷がなければ魂は永遠に光らない。

人生で一番恐ろしいことは何も起きないことなのだ。

“この母親はこの子がいなくても大丈夫だろうか？”

ジルが心配そうに言った。

“誰かがいないと生きられないなんて依存でしかない。

孤独を恐れなければ孤独になることもない。

人は一人では生きていけないけれど、それはそれぞれがきちんと独立した上で助け合うということだ。

まずは自分だ。誰かに依存している限り、本当に幸せにはなれないんだ。

離れていても魂に結びつきは変わらない。この人も子供から自立しなくてはいけない。”

テトが諭すように言った。

自立と依存。

誰もが心のよりどころを求め、見つけるとそれに頼りすぎてしまう。

“執着してはいけないんだ。

人へも物へも。執着を捨てると本当に大切なものが見えてくる。

そして心は自由になる。

離れていても大切なものは側にあることに気づく。

ジェイクはただ息をしていればいいわけじゃない。

ジェイクの死を受け入れればジェイクの魂は自由になってより母親の側に居られるんだ。”

“そういうものなのだろうか。”

ジルは幼い少年が死んだという痛みを引きずりながら言った。

生に執着するのは生きている動物なら皆することのようにも思える。

“ 本当は自由な魂を自分で壁を作って檻に入れている。

人間って不思議だ。苦しみですら自分で作り出すんだ。それは趣味と言ってもいい。”

“ 趣味？”

“ 苦しまないと魂が成長できないと思い込んでいるとしたら間違いだ。

物事はとらえよう。心はありようだ。

楽しんでいたって進化はできる。それなら笑いながら生きていた方がいいだろ”

悩みや不安のない妖精という生き物をつくづく羨ましいとジルは思った。

テトはいつだって楽しげで幸せそうだ。

自分が死ぬときでさえ、テトは微笑んでいるのではないだろうか。やっと家へ帰れると。

そつと病室をでて車に乗り込むときジルはぽつりと言った。

“ テト、この世は不思議なことばかりだよ”

“ ははは。。。 はじめから全てを知ろうなんて傲慢なんだ。

知らないことは必要になったとき、絶妙なタイミングでわかるようにできている。

もつと見えないものに敬意を払わなくては。人の眼に見えるものなんて世の中のほんの少しにすぎないのだから”

精悍な顔立ちのテトは手のひらに乗るほど小さいのに、
ジルにはとても大きくみえるのだった。

さて、次はマウイだ。テトが言った。

サーフィンの為に

“ ジェイクの時は、緊急事態だったから、特に説明がいらなかったな。

普通に近づくときはどこういう感じでいったらいいかな。”

テトが始めてジルを頼ったような言い方をしたのでジルは少しうれしくなる。

世界を悟ったような妖精よりも人間の扱い方は僕の方が上手い。

“ 何事も経験を次に生かさないと。”

意外とまじめなテトがジルにはなんだかおかしかった。

“ 飛行機で行こうか。”

“ だからさ、瞬間移動もう一度しようよ。”

ジルが言った。

“ お前そんなに寿命を縮めたいのか？”

“ いや、だってさ、寿命が縮んだ実感もないし。本当なのかな。害がないようなきがするし。便利だし。”

ジルが移動を面倒だと思いう気持ちもわかるが、肉体を持つ人間になんども使って良い訳がない方法だった。

“うるさい。俺は飛行機にのりたいんだ。”

“……そうなの？飛行機が好きなの？”

“ああ。”

不機嫌そうにテトが言う。

“そうなんだ。それなら乗ってもいいけど。”

ジルが面白そうに言った。

飛行機に乗っている間も、ジルはテトに

“ほら家があんなに小さく見えるよ。”

とか、

“テト、飛行機に乗れてよかったね”

と子供のように扱うのでテトはふてくされていた。

まったく、普段から空を飛んでいる妖精が飛行機に乗りたいたいわけないだろ。

心の中で悪態を付く。気づけよ。鈍感なんだから。

オアフ島とマウイ島は飛行機であつと間だ。

都会的なワイキキやダウンタウンを持つオアフ島と違い、のんびりしたマウイはメインランドから来る余暇を楽しむ観光客に

は大変な人気の島だ。

この冬の時期はザトウクジラが6000頭もアラスカからやってきて、雄大な姿を見せてくれる。

カフルイ空港に着くとすぐレンタカーを借りてハナハイウェイをかつ飛ばす。

テトに案内されてついたのは海を眼下に望む小高い丘にたった小屋と言った感じの質素な家だった。

すでに壁の木は海風にやられ所々白いペンキがはげて朽ちている。眠ればいいんだとこの小屋の主人に言われている気がした。

“この人はサーフィンするために生まれてきたピュアソウルだ。”

“それだけの目的で生まれてくる人もいるのかい？”

“生まれて来る目的はさまざまさ。このソウルは本当にサーフィンが好きだったみたいだな。”

強風に煽られながら、見知らぬ家を訪れる不安にノックを躊躇するジル。

“ノックしろ。そして神の使いつて言え。”

まったく、経験を次に生かして自然にするんじゃないのか。ジルはテトに関心した自分を浅はかだったと反省した。妖精があれこれ計画し計算して何かを言うわけないか。

“あのさ、そんなこと言って、またクレイジーだと思われるだろ。”

テトは真実を伝えるだけだとかまだぶつぶつ言っている。

“ 僕がなんとか上手く言ってみるよ。”

ジルはそういった。

“ あなたがサーフィンしている所を取材に来たとかいってみるか”
ジルは海風で煽られている古びた木製のドアをノックした。

“ 誰もいないみたいだ”

ジルが拍子抜けして言う。

“ もうすぐ帰って来るだろ。ここで待っていよう。”
テトが言うので車の中で待つことにする。

“ ああ、待つならコーヒー買ってくればよかったな。”
テトが人間の親父のようなことを言うので思わず笑ってしまう。

“ 妖精も疲れたりするの？”

“ あんまり、しない。”

テトが言った。

“ 眠くなる時はあるけどね。”

“ 退屈はするの？”

“ 退屈？しない。世界の全てが美しいのに何が退屈することがある？
海を見ているだけで、風を感じているだけで日の光を浴びているだけで楽しくてしかたない。”

テトはそう言った。ジルも待つことを楽しむことにした。

海を眺める。青い海。強い風を感じる。
腕を広げたら飛べそうなくらい強い。

日の光を感じる。ハワイの日ざしは強くそして優しい。

そんなことをしていたら、ここにこうしていられることがとてもありがたい気持ちになってきた。

“隙をみて心を洗うんだ。色んなことに感謝して、有難うって呟くと心をクリーニングできる。”

自分の心のありようでもそこは天国になる。”

テトは楽しそうに言った。

“天国とか地獄って本当にあるの？”

“あるよ。心のありようだ。人の場合、心がすさんで、誰かを恨んだり、憎んだり、攻撃的になっている心が地獄。”

戦争なんてしているときは心が地獄になっている人がうじゃうじゃいて、絶望が多すぎて妖精がたくさん死んだ。

だんだん時代が進んで、螺旋状に魂のレベルが上がってきているから、妖精も少しずつ増えた。

人の心が穏やかで愛に満ちて感謝に溢れている状態が天国。

人生のうちでどの状態が長かったかでその人の魂のレベルが決まる。

魂は一つ残らず皆上を目指している。
そういう風にできているんだ。”

“魂のレベルが全体的に上がっているのだとしたらどうしてアースは人間の絶滅を決めたの？”

“タイミングかな。”

“タイミング？”

“そう、アースにしてきた人間の仕打ちは時間を経て表に出る。
例えばたった今、一つの森を焼き払ったら、その影響が色んなところに
出るのは50年後とかだろ？”

先人たちのミスを今、責任取らされているっていう感じだろうな。

でもまあ、仕方ない。未熟だった自分の魂がしたこともかもしれない。
人間は何回も生まれ変わっているのだから。

過去の人間の行いが今、火山が爆発するように吹き出て、アースが
悲鳴をあげたって思えばいい。

絶えられないから出した苦渋の決断だと思うよ。”

“人はアースにそれほど酷いことをしたのかな？”

“そうだな。まあ、やりたい放題だったからな。”

妖精はくすくす笑った。

“ひどい問題児だ。”

J a w s

“ 僕になんかよう？ ”

小屋の側に止められた車を覗くようにその男はあらわれた。
ウェットスーツをきてサーフボードを抱えてびしょぬれのままこちらを見ている。

ジルはあわてて外に出た。 肩に乗ったテトをみて男は目を丸くする。

“ 気の性じゃなければメネフネが見えるんだけど。 ”

目をくるくるさせてメネフネを見ている。

“ テトっていうんだ。 見えるんだね。 ”

テトが見えるならサーフィンの取材なんて通用しないか。 とジルは思った。

“ 初めてみた。 ”

感激したように笑った男はまだ30歳前後だろうか。
がっしりと鍛えられたからだに褐色の肌。
くしゃくしゃになった金色の髪。 グレーかがった魅力的な目。

少年のようにくったくなく笑う。

ピュアソウル。

テトに教えられなくても男の純粹さが伝わるような笑い方だった。

“ ナイスツミーツユー。僕はダン。”

“ ハーイ。僕はジル。こっちは妖精のテト。君を待っていたんだ。”

“ OK。とりあえず、シャワーを浴びてくるから、家で待っていて
コーヒーを入れるよ。”

“ コーヒーだって！”

テトが嬉しそうに叫んだ。

“ メネフネってコーヒーが好きなのか？”

おかしそくにダンが言う。

“ ああ、コナコーヒーならパーフェクトだ。”

“ OK。コナコーヒーを入れるから待っていて。”

テトは本当に嬉しそうにくると飛んだ。テトが飛ぶたびに光が
舞い散る。

“ きれいだなあ。”

テッドはテトをまぶしそうに見ながら言った。

ダンの部屋の中はいたってシンプルで生活に必要なもの意外は一切

なかった。

壁にはたくさんの気象情報や、天気図。偉大なサーファーたちの写真や、大波の写真がぺたぺた張ってある。

色々な書き込みをしたカレンダーは12月14日の部分だけ大きく赤いペンで囲ってありJAWSと書いてあった。

“ジョーズ。”

ジルが呟く。もしかしてダンはジョーズに乗るのか。

ハワイアンならみんなが知っている化け物のように大きな波、

通称ジョーズ。

プロのサーファーでも命を落とす危険な波だ。

人間が陸から見る事が出来る世界で最も大きな波が立つポイントがマウイにあるのは知っていたが、

ジョーズを実際に乗りに行くサーファーに会ったのは初めてだった。

パイナップル畑が広がるのどかな田舎道を抜けた海岸の崖の下にジョーズのポイントがある。

最低でも15・2フィートの北のうねりが入らないとブレイクしない。

とてつもなく大きな波なのでパドリングでのテイクオフは不可能、ジェットスキーに引っ張られながら波に乗るのだ。

もちろんマウイでも超エキスパートだけがジョーズに挑戦出来る。

ダンはその一人らしい。こんな小屋に一人で住んでいるところを見ると生活のすべてがジョーズを待つためにあるのではないだろうか。シャワーからあがってくるとダンは上半身裸のままサーフパンツを履いてコーヒーを入れてくれた。

キッチンに立つダンの上半身は完璧に鍛えられていて、左の腕にはフィッシュフックのタトゥーが入っている。

フックの数だけ幸せをひっかけるといわれている幸運のシンボルマークだ。

褐色に焼けた肌を見ている限り、純粋な白人ではなく色々な国の血がミックスされた混血なのだろう。

白人とアジアとヨーロッパ、メキシコ。色々な血が混ざったダンのような青年はそれぞれの良さだけをミックスしたように魅力的な人が多い。

“うーん。いい香りだ。久しぶりのコーヒーだ。”

テトが出されたコーヒーに器用にミルクと砂糖をたっぷり入れるとおいしそうに飲んだ。

“つかりたいくらいだ。”

テトがしみじみ言うので、ジルとダンは笑った。

“それでさ、”

ダン は 身 を 乗 り 出 す よ う に 手 を 膝 に 置 く と ゆ っ く り と 言 っ た。

“ 僕 に 何 か 用 な の ？ ”

ダン が 聞 い た 。 用 事 が な く て も 構 わ な い と い っ た 雰 囲 気 な の で ど こ
ま で 説 明 す る か 一 瞬 戸 惑 う 。

“ テ ト が さ 、 君 の サ ー フ ィ ン を 見 た い っ て い う か ら 。 ”

“ メ ネ フ ネ が ？ 僕 の サ ー フ ィ ン を ？ ”

お か し そ う に ダ ン が 笑 っ た 。

急 に 話 題 に 出 さ れ て コ ー ヒ ー を お い し そ う に 飲 ん で い た テ ト が 迷 惑
そ う に ジ ル を 見 る 。

話 を あ わ せ る と 目 で ジ ル が 合 図 す る 。

“ そ う だ 。 ダ ン の サ ー フ ィ ン は 妖 精 の 中 で も 有 名 だ か ら 。 ”

初 め て つ い た よ う な 下 手 な ウ ソ を テ ト が 言 っ た 。

“ 有 名 ？ 妖 精 に 有 名 な の ？ ”

信 じ ら れ な い と ダ ン は 驚 い た 。 信 じ ら れ な い 信 じ て い る と ジ ル は 驚
い た 。

“ ま あ 、 い い さ 。 だ か ら ジ ョ ー ズ の 前 に 来 た ん だ ろ ？ ”

ダンがカレンダーをさす。

“前にもジョーズに乗ったことが？”

ジルが聞いた。

“3年前に一度だけ。あの日数本のジョーズに乗った。忘れられない興奮なんだ。神と一体になったような。自然と対話しているような一つになった感じ。無心で波を駆け下りていると神を感じる。”

ダンが思い出すように恍惚の表情を浮かべた。

“どうしてももう一度乗りたい。そのチャンスが来るんだ。”

“明後日だな。”

ジルが言った。

“ああ、一週間前からジョーズの予測は付くんだ。でも外れることもあるけど、メネフネが見に来たぐらいだから、きっとジョーズはブレイクするんだな。”

ダンは嬉しそうに言った。

“こんな小屋でよければ明後日のジョーズまで泊まっていけよ”

ダンは気軽に言った。

“妖精のお客さんなんてめったにないし。”

そういつてウインクした。そしてダンには気象情報を聞くためにラジオのヘッドフォンをつけた。

“よし、いいぞ。きっと巨大な波がジョーズにブレイクする”
ダンは興奮していた。

“その波で死ぬんだ。”

テトがジルの耳元でささやいた。一瞬でジルに緊張が走る。心臓がばくばく音を立てる。

“止めたほうがいいんじゃない。”

“おいおい。お前に命をコントロールする権利はないだろ？俺たちはピュアソウルの結晶を集めて来ているんだぞ。死を止めたら一生結晶は手に入らないじゃないか。”

“でも。”

死を知っているのに告げないことが心苦しくてたまらなくなったジルがテトに訴える。

“ジル、君がそれを知っていることで苦しむのは本末転倒だ。どちらが先でもピュアソウルが自分で決めて生まれてきて帰っていく。君が口を出すことじゃない。”

テトはぴしゃりと言ったので、ジルはそれ以上何も言わなかった。

翌朝、色々考えすぎてすっかり目がさえて眠れなかったジルは日の出と共にベッドから抜け出た。

ダンはずでに起きて、双眼鏡で波を見ている。

“ 今度も海に入るのか？ ”

“ ああ、少しだけ、後は明日に備える。

モーターボートの調子確かめて、撮影隊とスケジュールの確認をしないと。”

ダンに興奮を抑えきれないようだ。

“ もし、もしもだよ。ダン ”

“ なに？ ”

“ ジョーズで命を落とすとしたらどうなの？ ”

ジルが恐る恐る聞く。自分の中だけに抑えられなくなっていた人の死を前もって知っているなんてやはり恐ろしいことだった。

“ マイプレジャー。”

ダンがすぐに答えた。

“ 本望だ。海で死ぬなら僕は後悔しない。僕はね、生まれてきた目的を知っている。

これさ、サーフィン。

これをするために神様をお願いして生まれてきたんだと思うよ。”

ダンはそう言ってハングルーズを胸の前に作るとサーフボードのメンテナンスを始めた。

“そうか、本望か。”

アクション

ダンにはジョーズに見せられる3年前まで、ワイキキで消防士の仕事をしていた。

消防士と言っても火事よりもライフセーバーのような仕事の方が多く、ワイキキの黄色いファイアートラックはサーフボードを常備している。

たくさんの海を知らない観光客は時にハワイの海への敬意を忘れて海に入り、波に流されたり、リーフでざつくりと足を切ったり、毎日色々な事故が起きるのでとても忙しい仕事だった。

ハワイの波は引きが強く、初心者のサーファーでは手に負えないような場所も多い。

ローカルが注意しても聞かず、どんどん沖に流されてしまって、水死体があがるのも実は日常茶飯事だ。

観光の島ハワイは観光に都合の悪い事実をあまり公にしないけれど、南国で浮かれて海を甘く見ると大変なことになる。

波が立つ場所は底が砂ではなく岩場になっているので波にまかれると簡単に足を切ってしまう。

ざつくり足を切って戻れなくなったサーファーを救出したことも数え切れない。

その日ダンはオフだった。オフの日は知り合いのショップを手伝っ

てサーフィンレッスンをして収入を得ていた。
ダンはいつだって海にいたかったので幸せな仕事だった。

簡単なストレッチと説明を終えて、パドリングの仕方とボートの立ち方を砂浜でレッスンする。

その日は、15歳ぐらいの少年と太った40歳ぐらいの男が二人。動きが機敏な少年はともかく、ぶよぶよとした肉が海水パンツからはみ出ている白人の男二人は先が思いやられた。

真剣に説明を聞く少年と違って二人で時々私語をして笑いあうなど真剣さもない。

“あんまり無理をしないで、海に入ったら僕の指示を聞いてくださいね。”

最後に二人に言うと、わかっているよとぶっきらぼうに言った。

もう一人ダンの友人がアシスタントして生徒のボードを後ろから押すために一緒に海に入る。

2人で3人を見る。それほど危険なレッスンではなかった。

ワイキキの海はその日、それほどの混雑ではなく波のサイズも程よい、

サーフィンレッスン日和だった。ダンは少し油断していたのかもしれない。

波乗りには暗黙のルールがある。波のキャッチは早い者勝ち、先に波をとらえた人がいたら波を譲らなくてはいけない。

同時に何人も同じ波に乗ると危険だからだ。

少年は運動神経がよく後ろからボードを押してやると2回目ですつとたって波を掴んだ。

“ イエーイ！いいぞ。グッドジョブ！”

ダンと友人が後ろから声をかける。少年はサーフィンを楽しんでいた。

これをきっかけにサーファーが一人増えたらいいな。

ダンは思った。サーフィンは最高のスポーツだ。

一方白人の男たちの方は散々たるものだった。パドリングも水の表面を数回かくだけで体重が重い為に前にちつとも進まない。

波に押されるままにひっくり帰って海水を飲み込んで帰ってくる。

“ こりゃ、だめかもな”

ダンは友人と目配せをする。

“ 一時間半たつぷり海水を飲んで帰るパターンだ。”

友人が皮肉たつぷりに言ったのが運悪く一人の男に聞こえてしまったらしい。

“ お前らの教え方が悪いんだ。大体待っている時間が長すぎてなかなかトライできないじゃないか。”

男は怒りだした。

“ 仕方がないだろ。ちつとも言つとおりにできてないじゃないか。”

男の言い方にかつとなつた友人が言い返す。

“ やめろ。けんかするな。”

ダンが言ったが、海の男は気が荒い。友人は聞かなかった。

“ 悔しかったら一本ぐらい波に乗ってみろ。”

言い放った言葉に激情した男は少年が乗っている波を横切るようにパドリングし始めた。

“ 危ない。”

少年が男をよける為に進路を無理やり変えた。

数十メートル先にはワイキキのビーチを仕切るように人工的に作られた岩の壁がある。

“ ゲッドダウン。波から降りろ。”

友人とテッドが少年の背後から叫んだが聞こえない。少年は一度乗った波を逃したくないようだった。

“ くそ。”

ダンが猛烈なパドリングで少年を追いかけた。

ダンはあるみるうちに波を掻き分けて前方の少年に追いついて行く。

“ ぶつかるぞ、降りろ。サーフボードから降りろ。”

後ろから声をかける。少年は

“なんだって？”と振り返るだけで降りようとしなない。

“間に合わない。”

ダンには自分のリーシュコードをはずすと少年のサーフボードに飛び乗ると少年を海に突き飛ばした。

バシャーン。

ダンの体が波によって岩にたたきつけられた。

“オーマイガー。”

あたりで悲鳴が上がる。海水がダンの血で染まった。

ダンは薄れ行く意識の中、波に巻き込まれ下へ下へと体は引つ張られていく。

なすがまま。波に巻かれたら自分の無力さを感じるだけ、何にもできないんだ。自然の前に人間は無力だ。

“ダン、ダン”

友人によって波から引きづり出されて浜へ上げられる。応急処置を手早くしながら、友人は言い続けた。

“ゴメン、ダン、ゴメン。”

“いいんだ。気にするな。”

ダンは弱った意識でハングルーズを作るとにこつと笑った。結局、額と足、お腹もリーフに傷つけられて、数十針を縫う怪我だった。

“散々だったなダン。”

次々病院に見舞いにきたファイヤーマン仲間やサーファー仲間が声をかけていく。

全治1ヶ月。軽症だった方だと仲間たちは励ました。

“こんな傷すぐ治るさ。”

ダンは明るく言った。

“いや、怪我だけじゃない。

今週末、お前が待ち焦がれたジョーズがやってくる。でもその体じゃ乗れないだろ。”

ダンは友人の一人が言った言葉が忘れられなかった。

がつくりした。

傷よりもチャンスを逃したことが悔しい。

“ジョーズ？ジョーズが来るのか。くそっ。”

ハワイにいてもジョーズに乗れるチャンスはそれほど多くない。
しかも仕事を持っていればジョーズが来るときにタイミングよくマ
ウイに渡れるチャンスも多くない。

プロサーファーたちはいろんなことを犠牲にしてジョーズを待つて
いる。

ダンは既に3年、ジョーズに乗れる機会を逃していた。
3年前、神様のご褒美のように訪れた機会を掴んでたまたま一週間
滞在したマウイ旅行でジョーズに乗った。そ
のときの気持ちよさと興奮が忘れられなかった。

“せっかく週末、ホリデーをはさんで絶好の機会だったのにな。で
も次があるさ。”

ダンの傷は順調に治ったが、ジョーズのシーズンは過ぎていた。
ジョーズのシーズンは11月から3月。チャンスはそう多くない。

“俺はロマンを取る。”

ダンは怪我が治ると友人たちにそう宣言をして仕事を辞めた。

“おい、本気かよ。何の金にもならないんだぞ。”

“後悔したくないんだ。”

ダンはそういつて、ジョーズのシーズンが始まる冬、

マウイに移り住んだ。トランクにはほんの少しの荷物と貯金を全部。
いままで命を救った人たちから定期的に送られてくるクリスマスカードやお礼の手紙。

それをダンは仕事の誇りとして勲章のように大切に箱にしまって、
この小屋に移ってきたのだ。

伝説のサーファー

ダンが海へ行ってしまったのです。帰ることがなくて部屋に戻ると
テトが木の箱の中をあけて熱心に何かを見ている。

“なに勝手に見てるんだよ。”

ジルが声をかけた。

“見るよ、ダンが命を救った人からの手紙だ。
ダンは一助のためだけに生きてきたピュアソウルだ。
最後まで、好きな海で、好きなこととして死んでも誰も責めないだ
ろ。”

ジルがテトから手紙を受け取る。

ディアー、僕のヒーロー

ハイ。ダン

君に命を助けてもらったマイクです。覚えていますか？

僕が沖に流されて浮き輪に必死につかまって泣いていると後ろから
すーっと

サーフボードにのったダンが現れて、ひょいって僕をサーフボード
に乗せると

当たり前のようにすいーって動き出したんだ。

水をいっぱい飲んで気持ち悪かったし寒かったけど、ダンが大丈夫

だよって言うてくれて、僕は不思議と安心したよ。

浜に着くとゆっくり休んでから帰るんだよってマミーと僕にハングルーズして笑顔で

サーフボードを抱えて去って言うっちゃって、マミーがかるうじて名前を聞いていたからなんとか探して手紙を書いています。

一言お礼が言いたかったんだ。

ダンは僕のヒーローさ。

僕も将来ファイヤーマンになりたいよ。

サーフボードを積んだ黄色いトラックに乗って困っている人を助けるんだ。

本当に有難う。

ダンへ

あなたに危ないところを助けられたクリスです。

足を切って、海水が見る見る血だらけになって、私は失神寸前でした。

気づいたら、あなたに引き上げられて、浜に寝かされ、足には包帯を巻かれていました。

娘と二人、やっとお金を貯めて行ったハワイ旅行であんなことになって、

あそこで命を失っていたら、娘はどうなっていたかと思うと恐ろし

くくなりません。

私はシングルマザーです。あの子には私しかないのです。今、娘と暖かい暖炉の前で笑っていられるのも全てあなたのおかげです。

お礼をしたいのですが、と言ったら、あなたは当たり前のことをしただけだからといってにつこり笑いました。

あのハワイアンがする手のサイン。ハングルーズといったかしら。それをしてにつこり笑ったあなたの顔が忘れられません。本当にありがとうございます。

またきつとハワイへ行つてあなたを探し出し、命の恩人にディナーをおごらせてくださいね。

もちろん、あなたの家族も一緒に。ありがとうございます。

“これ全部助けた人からの手紙か？”

ジルが手紙の束を見ながら関心したようにいった。

“本当にヒーローだな。医者より命を救っているんじゃないか？”

テトが笑った。

“ジョーズか。そんなに乗りたいのかな。”

遠い目をしてジルが言った。彼を死なせたくなかった。

“ テト、ダンはサーフィンをするために生まれてきたっていったよな？どうして分かるんだ？ ”

テッドの死に納得がいかないジルがテトに訪ねる。

“ ふーん。大昔からサーファーなんだ。

エディ・アイカウというサーファーを知っているか？

結構有名だったみたいだけど。 ”

“ エディー！ ”

尊敬をこめた声でジルが答えた。

“ エディーなら誰もが知っているさ、ハワイの英雄だ。 ”

“ それが彼だ。

何回もある前世の一つだ。

彼が生まれ変わってダンになってる。 ”

テトが言ったのでジルはびっくりした。

“あの伝説のサーファーがダンだっていうのか？”

“ああ、だからジョーズに乗りたいたんだろ。”

エディーはジョーズにまた乗りたかったのかな。”

運命

エディー・アイカウ。

マウイのカフルイに産まれた彼はホノルルで人望のあついライフガードだった。

ワイメアベイで40フィートの波に挑んだビックウェーバーとしても有名だった。

彼はカメハメハ王朝の神官の家系に生まれ、小さい頃から母の教えに習い、サーフィンに熱中し、オアフ島のノースショアでビッグウェーヴ・サーフィンが流行る頃、ビッグウェーヴ・サーファアの頂点に立った。

彼はその後ノースショアのライフガードにスカウトされ、数多くの人々の命も救った。ダンの人生とリンクする。

サーフィン競技にも積極的に取り組み、デューク・カハナモクに次ぐ先住ハワイ人系プロサーファアの先駆けとなった。

1978年、航海力ヌー「ホクレア」に乗り込みタヒチまでの航海に参加する。

ホクレア号は運悪く嵐に見舞われてしまう。

4メートルの高波がホクレア号の横腹を叩きつけホクレア号は転覆遭難する。

船はモロカイ海峡で遭難し、ラナイ島までゆうに20キロはある地

点だった。

全員死に直面したその状況で、彼は救助を求め、1人、そうすることが当たり前のようにサーフボードに乗り、パドリングで荒れ狂う海に漕ぎ出した。

その後、消息を絶つ。

彼以外の遭難者は翌日偶然通りかかった大型船に救助され、皆一命を取り留めたが、その1週間後、彼のロングボードだけが見つかり、

そこには深く深くサメの歯型が残っていた。彼の英雄的な行動と悲劇的な最後はハワイの伝説となり、死後、ハワイの英雄になった。

その生まれ変わりがダンだということのか？

“また海で死ぬのか。”

ジルが苦しげにいった。

“そうだな。波の神が彼を迎えに来る。それが決まりのようなソウルだな。”

“ハワイはまた一人英雄を失うのか。”

“大丈夫。また会える。役割があるんだ。だから生まれ変わりの周期が激しい。”

テトが言ったが、ジルは全てを理解できなかった。愛くるしいダンの笑顔が頭をよぎる。

“若すぎないか？”

“そうだな。魂のエリートは意外に若く死ぬ。”

テトはこともなげに言った。

ジルは無性に悲しかった。たいした説明もなく初対面のジルを歓待し家に泊めてくれた。

くると表情を変えて笑うダンの少年のような笑顔が浮かぶ。

たくさんの人が彼を愛しているだろう。

容易に想像が付くナイスガイだ。誰もが彼と友達になりたいと思うだろう。

そんな男だった。

波の神ナルオラ

ジョーズが来る朝、ダンは興奮気味で目を覚ました。

丁寧にボードのワックスを塗りメンテナンスをする。

大波に備えてボードには錘をつけた。

マリンボートを操縦するジャスティンに連絡をいれる。
撮影隊の準備も万端だ。

“ジョーズに大波がブレイクしたぞ”

早朝からサーファーたちに情報が駆け巡る。

海は世界中から集まったプロサーファーたちで混雑していた。

“風が強くうねりが安定してない。危険だな”

ダンは波をみてすぐに簡単なライドにはならないと判断した。

よし、いくぞ。

ダンが海に入る。マリンボートに引っ張られるようにポイントへ。

海になれたダンでも恐怖を感じるほどの大波が向こうから押し寄せ

てくる。

何度見ても怖い。

ものすごいエネルギーだ。マリンボートに乗ってジョーズチャレンジ。

成功！

波の壁を白いしぶきを上げてボードが滑り降りる。自然と対話し、神に近づく無心の時間。

“ああ、この感覚を僕は待っていたんだ。”

ダンは幸せだった。

崖の上からテトとジルがそれを見守った。

“命知らずとはこの事だな。”

ジルは巨大な波に圧倒されて言った。

ダンのライディングは目を見張るようだった。あれほど巨大な波を恐怖心無しで笑みさえ浮かべながらテイクオフしたダンにサーファ―から歓声が上がった。

“彼は只者じゃないぞ”

他のプロサーファーたちが目を見張る。

“ どのサーファーだ？ ”

“ オアフの消防士？ 無名なのか？ ウソだろ。 ”

“ 世界一級の腕じゃないか ”

瞬く間に丘にいるサーファーのなかでダンのことが話題になった。

次々とブレイクする大波。ダンは次々とチャレンジ成功させ、一気にサーファーと撮影隊の主役になった、
7本、8本、ダンのライディングに皆釘付けとなる。

“ まるで、エディーのようじゃないか。 ”

白髪のパワイアンサーファーが呟いた。彼は懐かしむようにダンのライディングを見守る。

“ エディーのようだ。 ”

“ ほんとうだ、まるでエディーのようだ。 ”

口々に皆がそつつぶやく。

9本目だった。以前にも増して今日最大のビックウェーブ。

ジョーズという名前にふさわしい波の壁がダンの背後に迫る。

“この波だ。”

テトが呟いた。

ジルに緊張が走る。

“ナルオラだ。”

“ナルオラが見えるぞ。”

ダンのライディングに釘付けだった観衆たちが叫んだ。

波の神、ナルオラ。

“ナルオラだ。ジョーズの向こうにナルオラが見える”

ポリネシアンの顔立ちの精悍な男の顔が波の壁に浮かび上がる。

ダンが波を掴んだ背後だった。

ダンは波の壁を滑り降りながら声を聞いた。

体の力みはない、ライディングはいたって順調だった。

楽しい。ダンは心から波乗りを楽しんでいた。

そんな中、聞こえた太く響く男の声。神だ。ダンはずぐにわかった。その声がダンに呼びかける。

“ダン、いったん家へ帰るのだ。迎えに来た。”

ナルオラ。ハワイアンが畏怖と尊敬の念を持つ波の神ナルオラ。僕は前にもこの声に呼ばれたことがる。ダンが遠い記憶に思いをさせたその瞬間。

テイクオフ寸前波に巻かれた。ぐるぐると巻かれ、水圧に意識が遠のく。

“ダン、迎えに来た、家に帰るのだ。”

ナルオラの声が響く。ナルオラ。波の神。そうだやはり、僕は前にも彼にあつた気がする。

やっぱりこんな風に波に巻かれて、嵐の夜だった。波にはなんども巻かれたことがあつたのにそのときも不思議と苦しくはなくて。ダンの意識が遠のく。

“神がじきじきに迎えに来た。”

崖の上から見守っていたテトが呟いた。

“だめだ。ダンが波に飲まれた”

丘にいたサーファーたちが叫んだ。浜に緊張が走る。

ダンは波に飲まれながら、心は不思議と穏やかで苦しくはなかった。

“ダン、迎えに来た。一緒に帰ろう。”

ナルオラの声にこたえる。

“僕はここで死ぬのですか。”

“一端死ぬ。お前には役目がある。だから迎えに来た。ただ身をゆだねていればいい”

優しい声だった。

“OK。ジョーズにも乗れた。あなたに従います”

ダンはそう答えた。そして微笑んだ。

胸の辺りでハングルーズを作った。

本能が知っている。神には逆らえないのだと。ダンの体は海の底に引き込まれた。

丘に引き上げられたダンの横には真つ二つに折れたサーフボードが置かれた。

サーフボードが折れるほどの波の衝撃だったのに、彼の顔には傷一

つなく、体も無傷に近かった。

悲しみにくれた人々が彼を取り囲んだ。

“また偉大なサーファーが死んだ。”

彼らは口々に言った。

“彼のライドはエディーのようだった。”

“僕らはまた英雄を失った。”

沖からあがったプロサーファーたちや撮影クルーもぐるりとダンを取り囲み畏敬の念をこめて頭をたれる。

テトはそつと彼の胸に舞い降りると何かを祈った。

すーっと光が天に伸びて、純度の高いピュアソウルの結晶が胸元に浮かびあがった。

数人のサーファーにはテトが見えたらしい。

“天使が迎えにきた”

と涙を流した。少し後ろでその様子を見ていたジルも涙が止まらなかった。

神に愛されたソウル

オアフ島に戻ってからもジルはふさぎこんでいた。
ダンの死が思ったより応えている。

落ち込んでいるジルにテトは言った。

“そんなに落ち込むな。役割があつてダンは一端帰っただけだ。”

“そんな風に簡単に考えられないんだ。”

ジルは苦しそだった。

“こんなこと普通は人間に説明しないんだけどな。”

テトはそう前置きして話し始めた。

“アースから魂の循環の一部を任されている神がいるんだ。
神々の中で頂点に立つカネ。”

アースを支えている偉大な神だよ。カネはタイミングよく必要なソウルを生まれ変わらせる。

ナルオラはカネの指示でダンを迎えに来ている。

つまりさ、ダンは今から30年後、一番体力がある若々しい体を

持ってやるべき役割があったんだ。”

“ どのような意味。”

“ まれなことだけど。ダンとはあと1週間もすれば新しい命で帰ってくる”

テトは楽しそうに言った。

“ 神々に愛されたピュアソウルは役割が色々あつて忙しいんだ。”

ジルは半信半疑でテトの言葉を聞いた。ジルの疑いを見抜いたようにテトが言った。

“ 妖精がうそをつくとも思っているのか？”

そうだな。テトは絶対にうそはつかないだろう。ダンについた下手なウソを思い出していった。

“ いや、信じるよテト。”

ジルはそう言った。そうだ、信じよう。きっとダンはまだ生まれてくる。

そのころ、ノースショアのダンの実家ではダンの姉のレイナが悲しみに沈んでいた。

弟の死から1週間。誰もがダンの死を悼んで悲しみの中にいた。

レイナの幼い息子マイクもダンが大好きだった。
ダンはよくノースシヨアにいくとマイクを連れて海にいき、
実家の愛犬チコをロングボードの前にのせ、マイクを肩車して波に
乗った。

ダンは絶対に転ばなかったのでマイクはそれが大好きで、
大きくなったら偉大な叔父のようにビーチボーイになろうと憧れて
いた。

“ダン、あなたがいなくてどれほど悲しいかわかる？”

弟の写真を見ながらレイナが呟く。

“帰ってきて。ダン。私たちがどれほど悲しいか。”

ぼろぼろと涙をこぼす。悲嘆にくれて写真を抱きしめてベッドにひ
れ伏してレイナは泣いた。

涙に咽ぶレイナを急に吐き気が襲った。

“何かしら。”

慌てて、洗面所に駆け込むレイナ。

“もしかして。”

レイナは自分のお腹に手をやる。

赤ちゃん。

そこへ2歳のマイクが入ってきた。
洗面所の鏡の前で口を手で押さえているマミーを見つけて嬉しそうに近寄ってきた。

そして小さな指でレイナのお腹を指差すと言った。

“マミーのお腹にダンがいる”

“ああ。”

レイナは全てを理解してマイクを抱きしめると泣いた。
涙でぐちゃぐちゃになったレイナの顔をマイクが不思議そうにそっとなでる。

“マミー、悲しいの？”

“いいえ、マイク。マミー嬉しいのよ。ダン、ダンが戻ってきたのね。”

カフナ

“さあ、次だ。うーんとマノアだな”

テトが張り切って言う。ピュアソウルを念じて探し出すのにも大分慣れたようだ。

“なんでも経験を積むと上手くなるな。”

テトは実感したように言った。

“きっとピュアソウルの結晶を集める速度もどんどんあがるぞ。もう4つめだ”

短期間に人の死が3回。ジルの心は沈んでいた。

オアフ島に戻ってきてから時折考え込むようなジルを励ますようにテトが言った。

ピュアソウルのはずなのに、アップダウンが激しいな。ジルは本当にピュアソウルなのか？

間違えるはずないよな。テトが確かめるようにジルを見る。

“でも、その前にコーヒー飲もうぜ”

テトが言ったのでジルはスターバックスを探す。

“本当にスターバックスはどこにでもあるな”

テトが関心したようにいった。

“妖精ってみんなコーヒーが好きなのか？”

ジルが言った。

“みんな、みんなってさ、俺が好きなんだよ。お前ら人間も皆コーヒー好きか？それぞれだろ？みんなさままだ。”

テトはジルの質問におかしそうに答えた。

“普通の人には本当に妖精って見えないんだね。”

店内の人々は誰もテトに気づいてない。

“そうだな。ピュアソウルの側にでもないと思えないのかもな。見える見えないは俺たちにもよくわからないんだ。俺たちの状態にもよるのかも。”

見つかりたくないっていう意識の時は大抵見えないみたいだし、こうやって積極的に人間に関わろうとしているときは見え易くなっているらしい”

砂糖とミルクたっぷりのコーヒーを堪能すると車をそのまま山に向けて走らせる。

坂道をどんどん登っていくと山が迫ってくる。雨が多いマノアは虹

の山。

濃いグリーンが目に見え鮮やかだ。いつも少し雲がかかっていて、ビーチサイドとはまた違った魅力を放っている。

何より空気がおいしい。閑静な住宅街はハワイの島をいたわるような優しい白いうちが多く、ゆったりと景色に馴染んでいる。

自然を敬い、気を使って立てたような家々の庭は色とりどりの花々で飾られていた。マノアの山に手が届きそうな場所に目的の家はあった。

“代々続くカフナの一族だ”

テトは言った。

カフナとは司祭やドクターや霊能者を兼ね備えた能力を持つ人のこと。

体を触っただけで悪い場所がわかったり、ロミロミというマッサージを通して体のメンテナンスをしたりする医者のような役割を担ってきた。

マナを操るカフナは常にハワイアンの尊敬を集めてきた伝統の一族だ。

“カフナか。いかにもピュアソウルって感じだな。”

“ああ、この人は本物のカフナだ。そうだな。人間としては十分に生きている”

テトのその言葉を聴いてジルは少しホッとした。理屈では分かっているけど若い魂が旅立つのは忍びない。

“カフナなら余計な説明は入らず僕らを家に入れてくれるかな？リ

アンの様に。”

“ 多分平気だろ。半分人間を卒業しているような人だ。”

とテトが言った。

“ 人間を卒業すると何になるんだ？”

“ さまざまだよ。人間に神と呼ばれるようなエネルギー体になる人もいる。悪魔と戦う天使になる人もいる。”

“ 人間が天使になるのか？”

“ 中にはそういう人もいるな。そういえばさ、人間が想像する天使って妖精っぽいよな”

テトはおかしそうに言った。

“ だいたい、赤ちゃんに羽が生えているだろ？”

“ そうだな。僕の中でもそんなイメージかなあ。”
ジルが言った。

“ 妖精の眼から見るとさ、天使は結構ごっついんだ。”

テトが本当におかしそうにいった。

“ 人間のボディーガードみたいなもんだからな。悪魔と戦うんだ。結構ごっついよ。”

テトは天使の姿を思い出したらしくまた笑った。

“あんな赤ちゃんでさ、悪魔と戦えないだろ？”

マッチョな天使？ジルは想像できなくて苦しむ。

“人間の思い込みってなんで伝染するのかな？

人間のほとんどは天使が赤ちゃんに羽が生えていると思っているもんなあ。なんてかな。本当はごつい男だったりするぞ”

とテトが言った。天使がごつい男。ジルは軽いカルチャーショックを受ける。

常識って簡単に覆るんだな。

扉を開けて中に入ると白髪を後ろに一つで束ねている深いしわの老人がロッキングチェアに座っていた。

訪問者に気づいて静かに微笑んでいる。

どうやらテトも見えるらしい。驚いた様子もなくすつと突然の訪問者を受け入れるあたりが器の大きさを思わせる。

“アロハ。”

ジルがそつと声をかけるが答えない。

“耳が聞こえないんだ。”

テトが言った。

“僕は話せるけどね。”

テトは言った。

“あの人の声が聞こえるの？”

“そうだな、声が聞こえる。頭のなかで直接話すんだ。もともと神々とながりの深い人だからね、特殊なんだけどコミュニケーションが取れる”

テトと老人カフナの静かな会話が始まった。

その会話が聞こえないジルは何をしていいのか分からずラナイのステップに腰をおろした。

しばらくするとテトがジルの側に飛んできた

“カフナの名前はカイ。僕らが来ることも自分が死ぬことも知っていたよ。満月の夜に自分は死ぬんだと言っている。”

“明日だ。明日がフルムーンだ。”

“そうか、明日だな。今日はここにいようか？カイは歓迎するから一緒にいろって言っている”

“ああ、偉大なカフナと僕も一緒に過ごしたい。”

ジルはそういった。人が死ぬことに少し疲れてきていた。

短期間に3人の命を見取った。カイは死期に近い性か、いつもなかとても静かでほとんど動かずにロッキングチェアに腰掛けている。

“それにしてもほぼ完璧なピュアソウルだ。徳の量が半端じゃない。”

カイを見つめながらテトが言った。

“徳の量??”

“そうさ、人に喜んでもらうことをやると眼には見えない”徳“つていうのが溜まっていくんだ。”

魂が唯一来世まで持ち越せる財産みたいなものかな。この人は長い人生の中で数え切れないほどの人を助けてきた。損得抜きでね。だから徳の量が半端じゃない。人間の大好きなお金でいったらミリオネアだな”

とテトがいった。

“徳のミリオネアか。。すごい人なんだなあ。どうして耳が聞こえないんだろ”

“8歳の時、高熱にかかって聴力を失ったらしい。でもそのかわり眼がとてもよくて人には見えないものやマナが見えるからいいんだと言っている。”

“なるほど。一つ失って一つ得たからいいんですね”

とカイに言うと

カイはジルに向かって静かにうなずいた。

孤独と愛

聴力を失ってからカイはいつも一人だった。

能力を授かりカフナとして生きることを選んだが、人と違うということは時にとても孤独なのだ。

けれど、カイは孤独を恐れてはいなかった。

静かに孤独に身をゆだねるとそれは不安ではなく安らぎにさえなるのだ。

人々はカイの特殊な能力を求めて必要なときだけ癒しを求めにきた。カイはどんな要望にも誠心誠意応じた。

カイのヒーリング方法は生まれつきカフナとして備わっている特殊な能力もあったが、

ハワイに昔から伝わるヒーリングメソッド、ホ・オポノポノを用いた独特のものだった。

患者は特に何をされたという実感がないので、誤解を受けることもあった。

“カイのところへ行ってヒーリングしてもらったのに、母の病気は治らなかった。あいつはいんちきだ”

と心無いことを言いまわる人もいた。

ホ・オポノポノというハワイ伝統のヒーリング方法をカイは良く使った。

ホ・オポノポノは現実起きる全ての事柄は自分の中に原因がある
と考える。

カイは患者をヒーリングするのではなく、患者の悩みを聞き、
この問題を持ち込まれたということはこの患者の痛みの原因が自分
の内部にあると考える。

潜在意識の記憶が引き起こした問題だからと。

そのため、ひたすら自分を清める。

自分をゼロの状態に戻すことで、神格からの愛が充電され、全ての
事柄が良くなるのだ。

ハワイアンマジックと呼ばれるこのメソッドは偉大なカフナに伝承
されてきたハワイの秘法だ。

カイはできる限りのことをしたが、命を操れる神ではなかった。

けれどもどこまでできてどこまでができないのかカイにもはっきりと
説明することは難しかった。

眼には見えないだけに余計誤解を産む。

カイはひっそりと生きることを選んだ。目立てばたたかれるのがわ
かったからだ。

与えることは惜しまないが、奪われることを恐れた。

そして、ひたすら自分を清めることで世界を清めようとしてきた。

孤独な人生ではあったがいつも優しいものに包まれているような感
覚があったので不思議とカイはさびしくはなかった。

そんなカイも長い人生でたった一度、恋をした。

褐色の肌に凜とした涼しげな眼を持つサラだ。

彼女はなぜかいつも同じ箇所、足の指が痛むので一度カフナであるカイに診てもらおうとやってきたのだった。

“私の悪いところわかりますか？”

カイはいつものように何も言わず手をかざす。
右足に悪いものがたまっているのが分かった。

ゆつくりとチャクラをあけてエネルギーを通すと滞っていた血液が再びまわりだす。
そして、痛みの原因であるカイ自身の内部に対してホ・オポノポノをして清めていく。

ホ・オポノポノのキーワードはI love you。ひたすらI love youと自分の潜在意識に呼びかけて自分の状態をゼロにする。

I love you。ありがとう。許してください。ごめんなさい。

この4つの言葉をひたすら唱える。

やがて、カイの心はまっさらなゼロの状態になり、神格から愛が充電し始める。

ゼロの状態になると靈感はさえ、どうすればいいのかを伝えてもら

えるのだ。

サラの足は3・4回、カイの元を訪ねるとすっかりよくなっていた。

“ありがとうございます。カイ。あなたに言われたとおり、水を飲んだだけで、

本当に痛みがなくなったわ。あなたって本当にすごいね。”

サラの喜ぶ顔をみてカイも幸せになった。

サラはカイのもとに来る理由がなくなってしまったけれど、なんだからカイが気になってしかたがなかった。

“あんなに優しさに包まれたような人がいるなんて”

カイもサラが気になっていた。カイは毎日、手紙を書いた。

サラ、

僕は今日、おいしいチキンを食べたよ。

君は何を食べた？

今日も星がきれいな夜だね。

カイ。

サラ、

今日は隣のおばあちゃんがヒーリングのお礼にポキをおいていったよ。

おいしかった。

なんだか僕はいつも食べ物を書いてるね。

カイ

カフナという不思議な職業のわりにいつも食べ物の話が書いてあるのがサラにはおかしくて、

カイとはすぐに仲良くなった。二人の交流はいつも手紙だった。

カイ

カイがいつも食べ物のお話をするから、

私、カイの手紙を見るとおながが減るようになってしまったわ。今度おいしいものもって行くわね

サラ

サラ

君の好きなものってなんだろう？

僕の好物はね。よく熟れたマンゴーとアボカドのサンドウィッチ。僕が好きなものを書いたからってそれをくれってことじゃないよ。

カイ

カイ

オッケー。マンゴーもっていくわ。リクエストには答えなくちゃ。

サラ

若い二人が恋に落ちるのにそれほど時間はいらなかった。

二人はツインソウルのように仲のよい夫婦となった。
そしてサラによく似た瞳を持つ娘を授かった。二人はナタリーと名づけた。

ナタリーはすくすくと成長し、

カイはカフナとしてどんどん能力を高めていた。

代々のカフナがそうであるように、歳を重ねるごとにカイの行いは尊敬を集めた。

カイのことをけなす人は次第にいなくなっていくた。

ハワイの有力者もカイのもとに助言を求めにきた。

カイは政治的なことには一切関わらず、人々の小さな悩みにも心を砕く本物のカフナとなった。

人を癒し、徳を積むことでまた新たなエナジーを得る。

カイは人を癒すたび自分も元気になるのを感じていた。

充分幸せに、そして充分に生きた。

数年前、サラは先に天に召された。

次は自分の番だな。

カイはふとそれが近いことに気づいた。

いつなんだろう。瞑想していると頭の中にふとビジョンが見えて、
今度の満月だとわかった。

そして、満月の前日、メネフネが家にやってきた。明日なんだ。力
イは確信した。

最愛の娘

ナタリーを呼ぼう。

カイは決めた。お別れに愛する娘を。

ワイキキで駆け出しの歌手として働いているナタリーは週に何度かは父親の元を訪ねたが、今日はその日ではなかった。

カイはナタリーの側で逝きたかった。カイは強く思うことで小さなことは実現できた。

マノアの山がすっかり闇に包まれたナタリーがやってきた。耳が聞こえない父親への合図はハンドライトをちかちかと点滅させると決まっていた。

車の中からライトを点滅させながら細い山道を運転してナタリーがやってきた。

カイは嬉しそうにロッキングチェアをゆすった。

“ダディーわたしよー。アロハ。なんとなく呼ばれた気がしたの”

ナタリーが入ってきた。

“あら、お客様ねー。だから呼んだの？こんばんは。始めまして。”

ジルに丁寧に挨拶をする。なんてきれいな声だろう。ジルはアロハと答えながらそう思った。

“あつ。メネフネ。なんてきれいなのかしら。私はじめてみたわ。”

眼を丸くしながらテトを眺めるナタリー

“テトが見えるんですか？”

ジルが穏やかに聞いた。驚きはしなかった。カフナの娘なのだから。

“うん、普通にアロハ着てる。おもしろーい。羽もあるのね。きれいなねー。”

テトもナタリーに挨拶をする。

“アロハー、ナタリー。”

“まあ、名前を知っているの？光栄だね。メネフネと話せるなんて感激よ”

ナタリーははしゃいでいる。

“君のパパと話したから。”

“ダディーと話せるの？すごいわ。”

ははは。二人とも楽しそうだ。

いい夜だった。ジルはそのまま静かな時が続けばいいのと思った。カイも死なず、ナタリーも泣かない。皆が笑っている静かな夜が続けばいいのに。人の死に少し疲れていたのだ。

“それで、パパの声はどんな声？声が聞こえる？”

“声か、そうだな、少しハスキーだけど魅力的な声だよ”

“やっぱり、私の声がハスキーなのはパパの遺伝ね。”

ナタリーが嬉しそうにいった。

ナタリーの声は本当にすばらしかった。少し切なくて、ハスキーだけれど伸びやか。

“君の歌はすばらしいだろうな。”

“まあ、ハワイにいて私の歌を聴いたことがないなんて、あなた本当にハワイアン？”

ナタリーにからかわれてジルは少し気まずくなった。

“どうして今まで聴いたことがなかったのかな。失礼だったね。ごめんよ。”

“なーんて、うそよ。気にしないで。まだ駆け出しだもの。”

ナタリーが明るくいった。

ダディーなにか食べる？

ナタリーが手話をつかってカイに話しかける。

そうだな。月がきれいだから外でバーベキューでもしようか？

カイがそう言ったらしい。

気をつけていれば、ジルにもカイの声が聞こえそうだった。そんな錯覚をさせるぐらいカイは自然だった。

“ オツケー。すぐにしたくするわ。”

ハワイの人は本当にバーベキューが好きだ。

庭に出るカイの家のほかにもバーベキューを楽しんでいる家が何件かあって、おいしそうな匂いが漂っていた。

パンの木の大きな木の根元にグリルを置いて、ナタリーは手際よく準備をする。

今夜の月もきれいだった。ほぼまん丸の明るい月だ。

月明かりが明るいので、庭は思ったより暗くはなく、ライトがなくても足りるほどだった。

明日はフルムーンだ。

バーベキューで手馴れた様子で肉を焼いたりしながら、ビールを片手にナタリーが歌った。

“ ハーナレイ。ハナレイムーン”

切なく響く月夜の歌。

“君は大スターになるよ。”

ジルはお世辞抜きでそう思った。冷えたビールがおいしい。

“ほんとうに？嬉しいわ。自分を信じれば叶うってダディーもいつもいうの。”

お前はきっと歌で皆を癒す為に生まれてきたんだねって。うちは代々ヒーリングの一族だから。”

“そうだね。きっと歌でヒーリングするために生まれたんだ。”

ジルは確信したように言った。優しい夜だった。

カイは自分でバーベキューを言ったわりにほとんどロッキングチェアから動かず、食も進まなかった。

“もう、ダディーが言ったのにあんまり食べないのねー”

ナタリーは文句とは裏腹に楽しそうに笑った。

よく笑う娘だ。笑い声は人を幸せにする。

悲しくても無理にでも笑っていれば幸せになる。

本当の幸せは後からついてくる。そう信じて生きているような笑い方だった。

最後の夜

カイの最後の仕事は、今から数年前、
ハワイの精神病院でカウンセラーを頼まれたことだった。
病院のスタッフたちも患者たちにはほとほと手を焼いていて、
すぐに辞めてしまっし、患者たちの暴言や暴力もひどく、病院は
さんだ状態だった。

カイは赴任すると、職員のミーティングに出るわけでもなく、
患者と直接あつて手当てをするわけでもない。しばらくぶらぶらと
過ごした。

何もしないこのカフナを初めはみな不思議そうに眺めていたが、
カイがいつも楽しそうなので、
すぐに人気者になった。耳が聞こえないカイとは手話や
、筆談がメインだったが、すさんだ病院の光のようにカイはいつも
朗らかで楽しそうだった。

やがて患者たちにも不思議なことが起きはじめた。

暴力的だった患者は次第に穏やかになり、スタッフの勤務態度も熱
心になった。

詰まっただけの病院の水道パイプやトラブル続いた電気系
統もほとんど問題を起こさなくなった。

“あのカフナは何をしたんだろう”

病院関係者は首をかしげたが、激的な変化に歓喜した。

カイは、赴任してからずっとホ・オポノポノで病院や患者、施設の全てを清め続けた。

カイは自分自身を清めることで患者の心へも影響を及ぼす。

キーワードはLove。

この不思議なヒーリング方法の効果はてき面だった。

軽度の患者たちは次々に退院していった。

重度の精神障害を持った暴力的な患者は足かせをはずされ、自由時間を楽しむまでになっていた。

スタッフは余剰になるほど集まり、病院は見違えるような活気を取り戻した。

スタッフたちはこのヒーリングに、ただただ驚いた。

“まさにハワイアンマジック。カイは奇跡を起こした”

口々にそう褒め称えた。病院が清められ、もう大丈夫だと感じたカイはそつと身を引くようにカウンセラーを辞任した。

魔法使いのようにもてはやされ、有名になりすぎることを避けたかったのだ。

カイはいつでもひっそりと平和に生きることを願った。

耳が聞こえないカフナカイにとって静寂は心が安心する場所だったからだ。スタッフには手紙を残した。

親愛なる私の友人たちへ

私が去ったあとも、ぜひ、ホ・オポノポノを続けてください。

問題はすべて自分自身の中にあります。

I l o v e y o uと唱え続けてください。

自分自身の記憶をゼロにして、神格からの愛を受け取ってください。いつも、自分をクリーンにして愛で満たしていればすべての問題は解決されます。

スタッフたちは今も口癖のようにI l o v e y o uと唱えている。

いよいよ満月の日、カイはベッドから起きれなくなった。

“ダデー、急にこんなに弱ってしまって、どうしたのかしら。”

心配そうなナタリーにテトなんでもないことのようにテトはいった。

“カイは満月の夜旅立つよ。”

妖精はの明るさは時に無神経だ。

“満月って今日じゃない！”ナタリーが驚いていた。

“ダディーが言ったの？カフナは自分の死もわかるっていうの？残酷だわ。”

ナタリーが涙ぐみながら言った。

“そうかな。準備ができて幸せだろ。君にも会えるし、カイは充分に生きた。人間で80年生きたら充分だろ？”

“充分ってことないわ。私はできるだけ長生きしてもらいたいもの”
ナタリーが必死で訴える。

“あんまりよくばらないことだ。引き際つても大切だよ。
特にカイはピュアソウルだ。引き際は心得ているよ。君に迷惑がからないように、そして静かに。”

“ああ、なんてこと。迷惑だなんて、迷惑をかけられても私はダディーが生きていた方がいいのに。”

ナタリーはしくしく泣き出した。

愛しい人を引き止めたい。ジルはナタリーの気持ちがよくわかった。けれど、カイが本物のカフナなら、きっと今日旅立つのは間違いないことなのだろう。

やっぱりこうなるんだな。ジルは少しがっかりした。
あのまま楽しい時が続けばいいと願ったのに。ナタリーは結局泣いている。

それにしても、満月に見守られた静かな夜。カフナの旅立ちにぴっ

たりじゃないか。

テトはなぜナタリーが泣いているのかよくわからないようだった。

“ 幸せな死を喜ぶってこと人間には無理なのか？ ”

ジルに聞いた。

“ 目の前からいなくなることに耐えられないんだ。 ”

“ そうか、そういえばセイラもそういつていたな。

人間ていうのは恐ろしく短い時間の感覚しかないのかもな。

待つっていうことができないんだ。 また会えることも信じられない
みたいだし ”

“ なかなかそう思えないな。 ”

ジルは人にはそれは無理だと思った。

“ ナタリー、きつとダディーは君の笑顔が好きだよ。 ”

ジルはそつとナタリーに言った。

“ さびしいわ、ジル。 ダディーを失ってしまう日が本当に来るなんて。 ”

ナタリーは泣いた。 それでも少し泣くとナタリーは決意したように
カイに寄り添い、
セレナーデを歌いながら微笑んで見せた。

カイも時々、娘の髪を優しくなでて微笑んだ。痛みも恐怖も感じていないような聖者の微笑みだった。

少しずつ弱っていく呼吸の中でカイはテトを手招きすると何かを伝えた。

“そうか、どうしたらいいかな。”

テトが少し考えていた。

“なんていったの？”

ナタリーがテトに聞く。

“最後に一つだけ我俣を聞いてくれって。君の声が聞きたいんだって。”

“まあ、私の声を。。”

ナタリーが声を詰まらせる。

“一つだけ方法があるな。”

“何十年も聞こえなかった耳を一瞬だけ復活させる方法が。”

テトがいった。

最後の願い

“でもな、痛いんだよなあ。生きている間に聞かないとダメなのかな？”

テトがカイに確認する。

“今聞きたいのか。仕方ないな。本当に我侘だな。仕方ない、やるか。”

テトがぶつぶつ言いながらそういうと、カイの眼が輝いた。

ナタリーの声が聞きたい。愛しいわが子の声。

どれだけ聞きたいと思っただろう。

君の笑い声。君の泣き声。僕を呼ぶ声。色んなことを話したかった。

カイがテトに訴えた。

“わかったよ。カイ。”

決心したようにテトがいった。

“ジル、僕の羽の一部をきりとってカイの右耳に入れて”

“羽を切り取る???痛くはないのかい?”

“ 痛いにきまっているだろ ”

怒った様にテトは言った。

“ 君は指を切られて痛くないのか？
くだらないことを聞かないで早くやれよ ”

テトは本気で怒っているようだ。
光がくるくるまわっている。

ジルは痛みを我慢しているテトをなるべく傷つけないように羽の一部を小さく切り取った。

“ ふう、さあ、早く右耳に入れて ”

痛みに耐えるようなテトの声に急かされてカイの耳に羽を押し込む。
テトは痛みに耐えて少し震えている。

テトの羽を耳に入れると、カイが涙を流し始めた。

自分の耳を指差して、聞こえる。聞こえる。聞こえる。という合図を必死にしている

“ ダディー聞こえるの？私の声が？ ”

ナタリーが涙声で言う。

ああ、なんて素敵な声。

サラの声に似ているのかな。僕はなんて幸せなんだ。

愛しい娘の声が聞こえるなんて。ナタリー、あの曲を歌って。

虹の歌を。

僕が子供の頃聞いて唯一覚えている歌なんだ。

テトになのかナタリーになのかわからないが必死にカイが訴える。

“ナタリー、虹の歌を歌ってさ。”

テトが言う。

“虹の歌。ああ、あの曲ね。”

立ち上がったナタリーが静かに歌いだす。

“S o m e w h e r e o v e r t h e r a i n b o w . . . ”

こんな歌詞だった。

虹の向こうのどこか空高く、子守唄で聞いた国がある。

虹の向こうの空は青く、信じた夢は現実となる

いつか星に願う、目覚めると僕は雲を見下ろし、

全ての悩みはレモンの雫となって

屋根の上へ溶け落ちていく
僕はそこへ行くんだ。

虹の向こうのどこか遠くへ
青い鳥は飛ぶ

虹を超える鳥たち、

僕もそこへ飛んでいくよ。

優しい歌声が月夜に響く。

ああ、虹の歌。

僕が唯一覚えていた虹の歌。

ナタリー、子供の頃、いったよね。

君は虹のふもとに何があるか見たいといって、

マノアにかかる虹のふもとまで何度もいったね。

今度虹を見たら僕を思い出して。きっと虹のふもとはダディーが
いるから。

ナタリー愛しているよ。ずっと見守っているからね。だんだんカイ
の意識が遠のいていく

“ S o m e w h e r e o v e r t h e r a i n b o w ”

“ この歌の通りだ。カイはそこへいくよ ”

テトが家を懐かしむようにそうだったので、ジルは静かな死を祝福
できる気がした。

そんなに素敵な場所に帰れるなら、80年生きて帰れるなら、最愛
の娘に看取られ、

その声を聞きながら静かに旅立てるならこの死は祝福すべきかもしれない。

ジルの心も穏やかになった。立て続けに死に遭遇して疲れた心も癒されたようだった。

ナタリーの歌声とともに、カイはナタリーに静かに微笑むとずっと息を引き取った。

ナタリーは静かに涙を流しながらけれど歌をやめなかった。

テトがカイの胸元にずっと手をかざす。

すーっと一筋の光がカイの胸から天へ伸びて吸い込まれた。

“ダディー。ダディー。どうだった私の声。聞こえた？虹を見たらダディーを思うわ。”

マノアは虹がたくさんかかるからダディーにたくさん会えるわね。

”

歌い終えてナタリーがカイに話しかける。

静かな死だった。

偉大なカフナにふさわしい美しい死。

苦しまず、静かに旅立った。

ジルの眼にも清らかな涙がこぼれた。

僕もこうやって人生を終えられたら幸せかもしれない。

悲しいけれど、満ち足りた死。

こんな死もあるんだな。カイの優しい表情をみているとそんな風に

思えた。

幸せな死を喜べないのか？ テトが言った言葉を頭の中で繰り返す。

こんな風に死ねたら確かに幸せかもしれない。ジルは心からそう思った。

カイの胸にまた純度の高いピュアソウルの結晶が光った。

ふと夜空を見上げるとマノアの山に夜なのに虹がかかっている。

テトの羽の光に似た7色の淡い光。闇夜に幻想的に浮かび上がっている。

“ああ、虹よ。ナイトレインボー。ダディーだわ”

ナタリーが感嘆の声を上げる。

“ナイトレインボー。”

ハワイには夜でも虹がかかる瞬間がある。

けれどそれを見られることはほとんどない。

虹を見たら神様の祝福と考えるハワイアンの中でもナイトレインボーを見たものは少ない。

“ダディー。ありがとう。ダディー。虹を見たらダディーを思っ
”

ナタリーはもう一度そういった。

“雨が降るのが待ち遠しいわ。きっと虹がかかってダディーに会えるわね”

ナタリーの優しい声がいつまでもジルの心に響いた。

優しいフルムーンの夜。老人の人生が終わった夜。けれどこの清らしさはなんだろう。

清らかに生きた人は死さえも美しい。

“カイ、僕はしばらく飛べそうにないよ”

情けない声でテトが言った。

“ああ、わかっているよ。ピュアソウルが言った我儕の一つぐらい聞いてやるさ”

カイと話しているようだった。

“テト大丈夫かい？そんなに痛いのか？”

ジルがテトに話しかける。

“まったく、人間ってやつは待つのが苦手だよな。

体を抜けたらいくらだってナタリーの声が聞こえるのにさ、まあ、いいさ。今がこの瞬間が大切なときもある。”

傷ついた羽を気にしながらテトが言った。

“君は本当に優しい妖精だな。”

“人間の基準でなんでもいうなよ。僕は妖精の中じゃ冷たい方なんだ”

テトがふてくされたように言ったのでジルはおかしかった。

“テト、ぼくはカイの死を祝えるような気持ちができるよ。”

テトは不思議そうにジルを見た。

“さつき、人には無理だつていったばかりじゃなかったか？
そんなにすぐに気分が変わるものなのか？”

まあいいさ、真実に気づいたらそこから幸せが始まる。
人間ってのは何回生まれ変わっても色々忘れちゃうからな。進歩が遅いよな。

お前の魂は色々知っているのに、気づくまで時間がかかるんだ。一つずつ思い出すしかない。”

魂は真実を知っている。なぜ色んなことを忘れて生まれてくるんだろう。

“能力の問題だ。仕方ないさ、訓練するしかないんだ。”

“テトは神様のようなだ”

“なんで妖精が神なんだ、お前意味わかんないな。”

テトはおかしそうに笑った。

“ そうですね、服また替えてくれる？飽きちゃったんだ。”

“ まったく”

テトは呆れたように笑って指をぱちんと鳴らした。

今度のアロハはベージュにシダの柄のビンテージ柄だった。

“ 色んなレパートリーがあるんだな。”

“ ああ、アロハシャツ辞典とかいったかな？そこから順番に真似ている。”

テトが言ったのが、なんだかおかしかった。

“ 本を真似ているのか？”

“ 本、記憶が悪い人間が生み出した傑作だ。あれは便利だな。誰でもめくれば誰かの記憶を覗けるんだから。”

妖精が関心したように言った。

“ 本当に人間って記憶が悪いのかもなあ。僕も少しは生まれて来る前のこと覚えていたかった。”

“ まあ、ふとした瞬間に思い出すかもな。魂は忘れてないんだから。思い出すかどうかの問題だ”

気づき

何かがおかしい。

ここ数週間感じだした疑問を確かめるように病院のカルテ室を訪れたジェニーは今月に入ってからカルテを見返してそう呟いた。

ハワイで一番大きな産婦人科の施設を持つこの病院で看護師として働いて5年。

ジェニーは数多くの赤ちゃんの出産に立ち会ってきた。

産婦人科はいつ陣痛が始まるかわからない妊婦を大勢抱え、スケジュールが変動的でハードワークだ。

あまりお金にもならない仕事の為か、医師の数も充分でなく、看護師の役割は多かった。

実際、ジェニーたち看護師がほとんど世話をして、最後だけ医師が立ち会うという出産が通例だった。

異変に気づいたのが医師より看護婦が先立っただとしてもおかしくはない。

“一体どうしたのかしら。”

カルテ室からでたジェニーにはあることが頭から離れなかった。

“ 今月に入って、流産の数が昨年比の2倍。死産の数が3倍。何かおかしいわ。”

医師たちは偶然としか思っていないようだったがジェニーにはとても重要なことに思えてならない。

産婦人科の医局長が通りかかったので、呼び止めて聞いてみる。

“ 先生、今月の流産と、死産の数異常だと思いませんか？
先々月に比べても右上がりが増えていきます。これは偶然だとは思えないんですが。”

医局長はこの道30年のベテランだった。

“ ジェニー、たまたまだよ。妊婦の数が減るとデータ上の割合は跳ね上がる

。妊婦が減っているからそう思うだけだよ”

“ そうでしょうか。”

ジェニーは腑に落ちない様子だ。そもそも妊婦の減少もおかしくはないだろうか。医局長は言った。

“ みんな自分の人生を勝手に生きたいと思っている。子供は邪魔だとも思っているのかなあ。”

ジョークとも思えないその言葉にジェニーの顔が曇った。

その様子を見ていたテトがジルのもとに戻って言う。

“驚いたな、アースの決定に気づいた人間がいたよ。”

どうやって接触しようか。

とテトとジルは悩んだ。この病院は大きすぎるし、ジェニーは病院では忙しすぎて、近寄れない。

仕事が終わるまで待つことにする。

テトはジェニーの働き振りを観察することにした。

小さな妖精は光を消せばほとんど気づかれず人間の側にいることができる。

カーテンの隅っこに、時には戸棚の上に、ジェニーにまわり付きながらテトは感じた。

“確かにピュアソウル。マザーテレサのような献身ぶりだ。”

ジェニーのもとには大勢の患者が来ていた。検診というよりジェニー会いに来たという様子の妊婦たちにいつも取り囲まれている。

“ジェニー、さわってみて、動いたのよ今。”

嬉しそうに駆け寄るもの。

“ジェニー、体重が増えすぎちゃって、でも食欲がとまらないの”

など、子供を授かって幸せな悩みと裏腹に、不妊治療に来ている女性たちも多い。

“ジェニー、子供ができない私たちにとって、たくさんの妊婦さんと同じ待合室はつらすぎるわ。”

そうもらした若い女性の肩を抱くとジェニーは優しく言う。

“そうよね。わかるわ。でもあれがあなたの未来の姿よ。

私もあなれるって信じるの。強く、強く信じると願いは叶うのよ。まだ若いんだもの。きっと赤ちゃんが授かるわ。”

ジェニーに声をかけられた女性は涙ぐんだ。

次々とやってくる妊婦さんを手際よく診察台に導き、先生のフォローをしながら、暇をみては患者さんに声をかけ、相談に耳を傾ける。まさに息つく暇もない忙しさだ。

食事を取る暇もないのか、デスクにおいてあった、サンドウィッチは食べかけのまま袋に入れてある。

“それにしても、人間の出産は大騒ぎだな。”

テトはおかしそうにいった。

ジェニーの仕事が終わるまで特にすることがなかった、ジルはすっかり待ちくたびれていた。

車のなかでうとうとしているとテトが飛び込んできた。

“ジル、ジェニーが出てくる。話しかけてみよう。”

ジルははっとして慌てて車からでてジェニーを追った。

“エクスキューズミー。”

ジェニーが振り返って目を丸くしている。

“まあ、メネフネ。”

ジルの肩先で光を放ちながら飛ぶテトに釘付けとなる。

あたりが暗い性でテトの羽から出される7色の光がくるくると美しくかった。

“僕が見えるかい？”

テトが楽しそうに言った。

“私、疲れているのかしら。妖精と話しているなんて。”

ジェニーがぐらつとしたようだったので、ジルが慌てて側にあったベンチに座らせた。

“僕たちあなたに会いにきました。神様の使いです。”

マザーテレサに似た面差しを持つジェニーにうそは通用しないとテトは判断した。

テトが丁寧な言葉を使って説明したので、ジルは面食らう。

“レディーだから始めは少し気を使っただけだ。”

とテトが言い訳がましくいった。実際はじめだけですぐ遠慮のない言葉に戻った。

“ ジェニー、昼間言っただろう。なんかおかしいって。”

“ ええ、聞いていたの？”

“ ああ、君が初めてだよ。アースの決定に気づいた人間。”

テトが誇っていいというようなふうにウェインクした。

“ アースの決定？”

“ そう、最近決まったんだ。人間の絶滅が。”

あっけに取られて言葉を失うジェニー。

“ テト、なんでもストレートに言い過ぎるんだよ。”

ジルがたしなめる。

“ こういうことをくねくね曲げて言っとなんかいいことでもあるのか？

話がややこしくなるだろ。”

“ でもさ、ショックは和らぐんだ。

衝撃を和らげる為にクッションをおくことも必要だ。”

ジルは言葉足らずの妖精のために変わりに説明をしだした。

“ 絶滅といつても、天変地異や、巨大な核ミサイルが落ちてくるわけじゃないんです。

つまり、ジェニーが気づいたように、人間の赤ちゃんが減っていくということです。

そして最終的に誰も産まれなくなって人間は絶滅するということでは”

“ まあ。”

言葉を失って何かを考えるジェニー。

“ そうですか。アースというのは神ですか？”

テトを見ながらジェニーが訪ねる。

“ そうだな、神だと思ってくれていい。”

“ そうですか。本当に最近おかしいのです。

現代人の流産は多くなってきたてはいますが、3人に1人の割合は異常です。

妊婦さんの数も30%ほど減少しました。

死産にいたっては現代の最新医療の進化で本当に少なくなっていたというのに、

今月だけで3件も起きています。異常な数値です。”

ジェニーは悲しげに言った。流産が発覚したときの患者の悲しみようが眼に浮かぶ。

顔を覆って泣き出すもの。夫の胸に崩れ落ちるもの。冷静に唇を噛締めるもの。

生まれてくるはずだった赤ちゃんの心臓が止まったという事実、若い夫婦は打ちのめされた。

“赤ちゃんが生まれてこなくなるなんて、絶望的だわ。”

絶望という言葉に反応してテトがビクンと震えた。ジルが慌てて続きを説明する。

“でも方法があるんです。ピュアソウルを探し出して、結晶を作ればアースは決定を覆してくれるはずだとテトが言うので。”

“ピュアソウル?”

初めてきいたというジェニーにテトが言った。

“君だ。”

“私が??”

“そう、だから少し側にいさせてもらっていいかな?”

ジルが優しく言った。さすがに君が死ぬときにできる結晶が欲しいとはテトも言わなかった。

“なんだかわからないけど、私がお役にたてることならなんでも。”

ジェニーは快く応じてくれた。

“これから家に帰るのかい？”

ジルが聞くと

“いいえ、これから子供たちに会いに行くのよ”

とジェニーは嬉しそうに言った。

“子供がいるのか。”

とジルは悲しそうに言った。母親を失ったら悲しむな。

子供たち

着いた先は小さな教会だった。

“ここに親を失った子達の施設があつてね。

私、毎晩ここに子供たちに会いに来るの。まだ皆小さいから、母親が必要なのよ。”

ジェニーがそういつて、扉を開ける。中から元氣の良い声で子供たちが飛び出してきた。

“ジェニー。ジェニー。来てくれたの？”

ジェニーにまわりつく子供たちはまだほんの5・6歳で、どの子もジェニーが来た喜びで眼がキラキラしている。

“今日はお客様を連れてきたのよー。”

ジェニーが楽しげに言った。

“だれー。だれー？サンタさん??”

ジルとテトが恥ずかしそうに顔を出した。

“うわーメネフネ。”

子供たち全員が叫んだので、テトは

“まじかよ”

と呟いた。全員見えるのかよ。まいったな。テトはそう言っているようだった。

一人の子供がテトを捕まえようとこっちに向かってくる。

“メネフネ、メネフネ。”

手をぱちん、ぱちんと鳴らしながらテトを追いかける。

“うわー、潰されちゃうよ。”

情けない声をだして飛び回るテト。

そのたびに7色の光がキラキラと舞い散る。

吹き抜けの天井から流れ落ちるテトの光が子供たちの頭上に降り注いだ。

“うわー、きれいだなあ。”

一人の子供が立ち止まってその光に手を伸ばした。

走り回っていた子供たちも立ち止まり上を見上げて、うつとりする

“きれいだなあ。”

本当にきれいだった。テトから舞い落ちた光の粉がキラキラキラと宙に舞い踊っている。

7色に光る光の粉はゆっくりと下に舞い落ちて消えた。

“さあ、お客様って言ったでしょ？追いかけたりしたら失礼なのよ。”

ジェニーが優しく子供たちを諭す。

“ごめんね。メネフネちゃん。もういじめたりしないから。”

くるとカールした髪がかわいい女の子が言った。

“ふう。子供に追いかけてられて潰されるのはまっぴらだ”

テトがジルのもとに戻ってきて汗をぬぐった。

ジェニーは手早く8人分の子供たちの夕食を作った。

パンに、野菜を煮たスープ。贅沢とはいえない食事だったが子供たちはジェニーのご飯が大好きなようで歓声を上げた。

“ジェニーが作るご飯は本当においしいんだ。”

“きつとなんか特別なスパイスが入っているのかも”

“そうだな。”

テトが言った。

“ジェニーが作るご飯はマナがいっぱい入っている。”

スープを確認しながら言ったので、子供たちは

“ やっぱりなー。 やっぱりだー ”

と口々に言って笑った。

本当においしいスープだった。ジルもテトもすっかり幸せな気分になった。

と、そこに大きな花束を抱えた老人が入ってきた。
白髪を後ろになでつけ、身なりの良い老人はジェニーを見ると顔をほころばせた。

“ ハーイ、子供たち ”

“ ハーイ、アंकウルジェイ。 ”

子供たちが口を揃えた。

“ ハーイ、マイディア。 ”

ジェニーに近づくとそっと手をとって口付けをし、あついハグをする。

花束を渡しながら
ジェニーに言った。

“ これを君に。 ”

“ まあ、ありがとございます。アंकウルジェイ。 ”

ジェニーは顔をほころばせた。

けれど心の中でこう思う。

こんな大きな花束を買ってくるなら、子供たちにパンとミルクをくれればいいのに。

“今日はお客様かい？”

ジェイはジルを見るとそう言った。

“ええ、病院の関係のお客様が子供たちの様子をみたいとおっしゃって。”

“そうですか、僕はジェイ、始めまして。”

ジェイはジルにそういつて握手を求めた。テトは見えないらしい。

ジェニーはその様子を興味深げに見ている。

“ジェニー、今日は、君の顔が見たくてよかっただけだからこれで失礼するよ。”

僕はいつだって本気だから、いい返事を待っているね。”

“わかりました。”

“アンクルジェイ。メネフネちゃんにはSay helloしないの？”

くりくりした眼の少年が無邪気に聞く。

“はは、メネフネだって？子供の想像力には関心するね”

アングルジェイは少し面倒くさそうに軽く少年をあしらった。

ジェニー意外には興味がない様子だった。

ジェニーが出口まで見送る。老人は待たせておいたリムジンの後部座席に乗り込むと走りさった。

“ はあ。
”

とジェニーはため息をつきながら花束を見つめた。

迷い

この教会の財政難は深刻で、8人の子供たちの世話も限界を迎えていた。

心ある人たちの誠意の寄付でなりたっていたこの施設も、経済状況の悪化で寄付が激減し、子供たちの生活に暗い影を落とした。ジェニーのようなボランティアだけでは支えきれなくなっていた。

アングルジェイと呼ばれるこの老人は毎年多大な寄付をしてくれる一人で、

ハワイが好景気だったころ、不動産売買で一生贅沢しても使いきれないぐらいの大金を手にしたミリオネアだった。

多くのお金持ちがそうであったように、本当に信頼できる家族が作れず、

お金目当てで近寄ってきた前妻は結婚後わずか1年で正体を現し、離婚裁判でもめにもめて以後、

すっかり懲りてしまったジェイはその後結婚を敬遠し、自由気ままに生きてきた。

けれど、70を過ぎて、孤独が身にしみるようになっていた。気づけば心許せる友人もいない。

ビジネス上のつきあいで擦り寄ってくる人たちは数多くいるが、プライベートの時間を一緒に過ごしたいと心から思えるパートナーが欲しかった。

どうせ長くはないのだ。最後の時と一緒に過ごしてくれる女性に全てを譲ろう。

ジェイはこの孤独からとにかく逃れたかった。

毎晩のように飲みに出歩いて派手にお金を使っても、家に帰ってふと一人になるときに襲ってくる孤独に耐えられなかった。

愛している人に側にいてもらいたい。僕の最後を看取ってくれる人を探そう。ジェイは本気でそう考えた。

ハワイで観光バスが出るほど豪邸が並ぶカハラ地区。

緑の木々に囲まれ、ダイヤモンドヘッドに程近いこの道沿いには立派な門構えの豪邸が立ち並んでいる。

ジェイが今回眼をつけた物件はそれほど大きくはないが、海に面した側のよく手入れされた住みやすい邸宅だった。

高く売れそうだ。ジェイは直感的にそう思った。

“ミスター、スミス。もう少し高く買ってはいただけないでしょうか？”

必死にすがりつくカハラの豪邸のもと主をジェイは冷たく見つめた。

“これ以上は出せない。嫌なら断ってもいい。”

“そんなこと言わずに。このうちはミスタースミスが支払う10倍のお金を払って手に入れた家です。”

事業が失敗したとはいえ、私の大事な資産がこんなに安値では会社の借り入れも返せません。家族がこれからどうしたらいいか。”

“それならば、他の業者を当たればいい。けれど、ミスタージェフアーソン。”

あなたが希望する日時へ入金できるのは私だけだと思いますよ。”

ジェイのやり方は辛らつだった。

お金に困った相手の足元をつついて物件を買い叩き高く売り抜ける。不動産売買はそれが鉄則だとジェイは信じていた。

そこに感傷など無駄なだけだ。

ビジネスで生き残れなかったものは負け犬だ。

即金で物件を買い取るやり方は乱暴だが、お金に困って不動産を売りに出すオーナーたちに支持を受けるのも事実だった。

将来の利益より目の前のカネに人の心は動く。ジェイは札束で人の頬をなでるようなビジネススタイルで資産を築いてきた。

“ 所詮、金で買えないものはないのか。 ”

事業が成功するとともに広がる虚しさ。

自分の冷めた信念を誰かに否定してもらいたくて突っ走ってきたのかもしれない。

けれど、ジェイの本音とは裏腹に、予想を裏切らず、皆金で動き、金にひざまずいた。

世の中は金じゃない。そうジェイも信じたかった。けれど、それを証明するような事柄は一つも起こらなかった。

金があるから、ジェイのもとには人が集まり、金があるからパーティーの中心にいる。

金があるから政治へも影響力をもち、金に眼がくらんだ美女たちがジェイを取り囲んだ。

いい女も、家も、車も、友人も全てが僕の金を目指して集まってくる。まるで真つ暗な夜、光を求めて集まる虫けらのように。

金の匂いに群がってくるんだ。ジェイは金を武器にしながら、どこかそんな連中を軽蔑していた。

初めて本当の恋をしたと思って結婚した妻が、結婚した途端、本性を現し、ジェイの資産を吸い取ることだけを生きがいに行っているよ

うな姿を見てから、
その思いはどんどん強くなっていった。孤独だった。孤独はジェイの心を蝕んでいった。

ジェイはそんな時、つきあいで寄付をしているこの小さな教会に招かれた。
そこで初めてジェニーに出会った。瞳の美しさに吸い込まれそうだった。

“ アンクルジェイ。始めましてジェニーです。あなたの多大な寄付に私はいつも感謝しています。”

ジェニーは控えめにそういうとすつと奥に入って、あれこれと子供たちの世話をしたり、
パーティーの支度を手伝ったりしていた。化粧化もありなく、すらつと伸びた手足が印象的な美人だった。ジェイは一目で気に入った。

ジェイはその後、厚化粧をした金持ちのご夫人やフォアグラを食べ過ぎたようなでっぷりと脂ぎった不動産王仲間に取り囲まれ、ジェニーと録に話もできないことに苛立った。

ジェニーの美しい瞳が忘れられないジェイはその後、ジェニーが夕食の支度にたびたびこの施設を訪れていることを知り、通いつめるようになっていた。
そして、ジェニーの人柄にますます強く恋こがれるようになっていった。

一方のジェニーはジェイの経済的な支援に感謝はするものの、

親子以上に歳が離れたジェイは親切なお金持ちの一人でしかなく、だんだんとエスカレートする求愛に辟易していた。

誘いにのってこないジェニーにいらだったジェイはついに最終手段を使った。

ジェニーが自分と結婚してくれることを条件にこの施設に財産を投じ、

子供たちが成長するまで支援し続けるとジェニーに詰め寄ったのだ。教会の神父は救世主のようにジェニーにすがり、

なんとかこの結婚を承諾してくれと頼み込んできた。ジェニーの心は揺れていた。神父はこうも言った。

“ジェニー、一時の辛抱さ。ジェイはもう70歳。そう長くはない。君はまだ若い、少しの間我慢すれば、この施設は安泰。君も莫大な遺産を手にしてずっと楽しく暮らせるんだ。こんなにいい話があるかい？”

神父も必死だったのだ。

子供たちを路頭に迷わせるわけにはいかない。全てはジェニーの決断にゆだねられていた。

ジェニーはジェイになんの感情も沸かなかった。特に好きなわけでも特にきらいなわけでもない。

けれど、自分が手に入れたいものがあつたとして、交換条件を出すようなやり方は好ましいとは思わなかった。

“それで私を妻にして、虚しさが増すだけではないでしょうか？”

ジェニーはジェイにストレートにこう訪ねた。

“私はあなたを愛してはいません。それでも構わないと？

あなたの欲しいものはそれで手に入りますか？心の寂しさは埋まりますか？”

ジェニーはジェイに真摯に話しかける。

“君が僕を愛してくれないかもしれないのは分かっている。

けれど、私は、心のきれいな人と少しでも長く一緒にいたいと思う。心穏やかな日々にはただ側にいて付き合ってくれたらそれでいい。多くは望まないよ。”

ジェイはそういった。ジェイはジェニーの瞳に自愛に満ちたデューバを見ていたのかもしれない。

ひたすらに心の安息が欲しかった。

さびしすぎないだろうか。ジェニーは何もかもを得てきたような恵まれた身なりのこの老人に心を痛めた。

そんな愛の形で人生を終えるのがこの人の望みだったのだろうか。私にそれができるだろうか。

この人の側にいて、この人の心を癒し、穏やかな日々と一緒に過ごす。

“ほとんど介護よね。”

ジェニーは事情をテトとジルに説明した後、そうぽつりとつぶやいた。

“私は結婚までボランティアなのかしら。”

ジェニーはそういつて少し寂しそうに笑った。

“君はどうするつもりなの？”

ジルは聞いた。いろんなことが少しずつ間違っているような気がする。

結婚を条件に施設を救うことも、それがいちボランティアのジェニーに向けられていることも。必死に頼みにくる神父も。

“テト、魂は生まれ変わるのよね？それならば、今回はこんな人生もありなのかしら？”

ジェニーがテトに聞く。

“魂は生まれ変わるけれど、今回の人生は。と言って手を抜いていいわけがない。

今回は今回だ。世界は今が全てだ。今が未来を作るし、少し古くなつた今が過去だ。

そんな風に現世を投げやりにしていい理由は何もないよ。”

“私はどうしたらいいのかしら。”

ジェニーは悩んでいた。

“心ままに。後悔しない決断を自分自身で選ぶことだね。”

テトはそういった。

“たいしたアドバイスにならないな。”

ジルはつぶやいた。

決意

“ テト、彼女はどうするだろう？ ”

“ そうだな、結婚を選ぶかもな ”

教会の外にでてからテトが言った。

“ 何かに奉仕したくて産まれて来たピュアソウルだ。 ”

“ 自分を犠牲にして結婚を選ぶのか？ ”

“ いや、彼女は犠牲とは考えないだろう。誰かに奉仕できることが彼女の喜びだ。

喜びを感じる理由は人それぞれだからな。それに考えてみる。ジェイが老人だから悩むのか？俺たちが近づいたってことは。 ”

“ そうか、ジェニーの方が早く死ぬんだな。 ”

“ 若い人は死に無頓着だが、他人事の話ではない。

むしろジェニーの方が死の隣にいる。いつだって、適当に過ごしていい時間はないよな。

いつ家に帰るか自分は忘れているんだから。 ”

テトが面白そうにいった。

“ ジェニーは何かを感じているかもしれないな。なにしろ、始めてアースの決定に気づいた人間だし ”

“自分が長くないってことかい？”

“そうだな。予感みたいなものかな。長くないなら教会の役にたつて死ぬのもいいだろう？”

とにかく見守ろうとテトが言った。

次の日、教会の施設に行くと、ジェニーが晴れやかな顔でそこにいた。

ジェイが年甲斐もなく緊張した面持ちでジェニーの前にいる。

“ジェイ、私あなたと結婚します。”

ジェイは喜びに顔をほころばせた。そして、ふと頭に過去、ジェイの側にいた人たちの顔が浮かぶ。

所詮、ジェニーも金で動くのか。やっと女神をみつけたと思ったが、ジェニーもまた私の資産が目当てか

。喜びと同時に浮かぶ軽い絶望。けれどジェイはもう慣れっこだった。今回は眼をつぶろう。

“有難う。ジェニー、有難う。”

ジェイは絶望を隠すように言った。僕はそれほど長くはない。だまされたとしてもまあ、いいだろう。

どこか投げやりな気持ちがジェイの頭によぎる。もう孤独には耐えられない。

ジェニーはそんなジェイを微笑んで見つめた。ジェイの心の中が透けて見えるような女神のような優しい微笑みだった。

かわいそうな人。

自愛に満ちたジェニーの微笑がそう言っているようだった。

ジェイがジェニーの心変わりを心配したのか、結婚式は大急ぎで執り行われた。

“私はシンプルな結婚式でいいの。この教会で子供たちに祝福されてお嫁に行くわ。”

ジェニーの希望もあって、ジェイは不服そうだったが、ごく身近な人を招いた小さな結婚式が執り行われた。

神父は救世主ジェニーのために最善をつくした。

子供たちは細かい事情がわからないまま、ジェニーのウェディングドレス姿に歓喜した。

祭壇の前に並んだ二人は新婦とその父親よりも歳が離れている。

それでもジェイは微笑ましいほどに緊張し、その姿はジェニーに愛らしくうつつた。

女神のような微笑を持つ新婦は神々しい美しさだった。慎ましい花嫁にジェイは少し期待する。

ジェニーは本当に僕の資産目当てではないのではないか？そんな気持ちにすぐに否定する。

まだわからない。前の妻は本性を出すまでに1年かかった。

“清らしい花嫁だな”

ジルは心から思った。なにかをふっきったようだ。

祝福の声に包まれながら二人が腕を組んでゆつくりと教会を出る。

テトにすれ違い様、ジェニーはそつといった。

“テト、私はあとどれくらい生きられるのかしら？あまりジェイを悲しませたくないの。”

猫は死期を悟るとずっと人前から姿を消すというのがジェニーもそういう能力があるのだろうか。

そばで聞いていたジルが驚きで眼を見開いた。

“そうだな。僕にもはつきりとはわからないけど、ジェニー、自分の心に耳を澄ませば君ならわかるんじゃないかい”

テトは優しく答える。

“そうね。1週間ぐらいかしらね。”

不思議とジェニーは悲しそうではなかった。すでに悟ったような柔らかな表情をしている。

“ウェディングドレスも着られて、幸せよ。”

ジェニーの言葉にうそはないようだった。

シャンパンを飲みすぎたジェイを支えるようにジェニーとジェイはリムジンに乗り込みジェイの豪邸へと帰っていった。

“一週間か。じゃあ、一週間後にジェイの家に行こうぜ。”

テトが言う。

“ 本当なのか？ ”

“ ジェニーが感じるんだ。多分間違いないだろうな。一週間か、セ
イラに会って来ようかな。 ”

テトが思いがけずできた休暇に想いを馳せている。

のんきなもんだな。七色に輝きながら楽しそうに恋人とのデートを
想像するテトをみながらジルは複雑な思いでいた。

安らかな日々

穏やかな日々だった。ジェニーは仕事を休んでいた。

“もう、ナースは辞めてもいいんじゃないか？”

ジェイが言った。自分を待っているであろう妊婦たちの顔が次々と浮かんだ。
けれど思い直す。そうだ、時間がない。私には時間があまりないのよ。

不思議と焦りはなかった。とにかく今はこの人を。
この人の孤独をなんとかしたい。ジェイはこの結婚の決意を思い出していた。

“そうね。考えておくわ。”

ジェニーが優しく言う。何事も頭から反対しない穏やかな性格のジェニーと一緒にいるだけでジェイは癒された。
愛されているんじゃないかと錯覚するくらいジェニーはジェイに優しくかった。

ジェニーはどんなことにも感謝と喜びを表現した。
一緒にいてこんなに気持ちがいい女性は初めてだ。ジェイは心が優しく満たされていくのを感じた。
二人きりの時間を邪魔するようにたびたびジェイの秘書が家を訪れた。

“社長、例の件ですが、先方がなんとか考え直してくれとつこくて。”

ほとほと参ったようにジェイの秘書が分厚い手帳を抱えながらやってきた。

“オレがノーといったらノーだ。あの件は手を引かない。どんな手を使ってでもあの物件は手に入れる。

金のなる木だ。徹底的に価格をたたいて、現金を目の前に積んでやれ。”

ビジネスの話をしているジェイをジェニーは少し悲しげに見つめた。

“担当者は誰だ？”

“この担当はジミーです。”

“ジミーか。失敗したらくびだと伝える。成功報酬は弾んでやる。”

ジェイは社員にも常にハイリスクハイリターンの精神を求めたくびをかけて仕事に取り組めば、社員は必死になった。

そうやって結果を出したらどんとボーナスを弾んでやる。

社員も所詮金だ。

金を積んでやれば人は動く。

ジェイの考え方はある意味正しいのかもしれない。

けれどジェニーはジェイの虚しさや寂しさを作り出している原因に気付いて欲しいと願っていた。

“ジェイ、お金の話はもういいわ。あなたはもう充分持っているし。”

ジェニーがジェイの髪をなでながら優しく言う。自分には時間がない。

この人の心を少しでも癒してあげたい。ジェニーは仕事を一週間休むよう提案した。

“ お金とビジネスの話をおあなたの頭から一度消したいの。 ”

新妻の初々しい願いをジェイは聞き入れた。仕事のことを少し忘れてジェニーと過ごしてみよう。

ジェイは秘書に細かく指示を出した後、携帯電話の電源を切った。

“ ジェニー、今日は何を食べようか？ ”

毎日些細な会話が楽しかった。

“ そうね、一流シェフにはかなわないけれど、私が作るってのはどうかしら？ ”

“ パーフェクトだ。 ”

ジェイが言う。

“ あなたも一緒に作るのよ。 ”

“ えっ？ ”

ジェイは面食らったように言う。

ここ数十年、専門のシェフに食事を任せるか行きつけのホテルに行くぐらいで自分では作ったことがなかった。

“一緒にやれば楽しいわ。”

ジェニーの言葉一つずつがジェイには新鮮だった。

ジェニーは決して贅沢を望まなかった。

一夜にして大富豪の妻となったのに、ジェイには不思議なことだった。

結婚指輪にダイヤモンドをねだるわけでもない。せつかく仕事を休むのだ。新婚旅行に豪華客船での世界一周を考えていたジェイは

“キャンセルして。一緒にお家にいたいのに”

といったジェニーの言葉に耳を疑った。

“本当の友人でないなら、パーティーも遠慮するわ。

あなたの顔を潰すつもりはないのだけれど、あなたとお家でゆっくりしたいの。何もいらないわ。”

そんなことを言った女性は初めてだった。

ジェイの側にくると女性は必ず何かを欲しがった。宝石のときもあれば、豪華な食事の時もある。

高級ブティックでの買い物の時もあれば、贅をつくした旅行の時もある。

女性たちは何かを欲しがるものだという常識がジェニーによって覆された。

ジェニーに促されるように照れくさそうに一緒にキッチンに立つ。慣れない手つきでにんじんの皮をむくジェイを楽しそうにジェニーが見ている。

シェフたちも普段笑顔の少ないボスの楽しそうな姿に興味深々だ。

“あの方も、あんな風に笑うんだな。”

シェフの一人がしみじみと言った。

“僕らが何十年修行したってさ、愛する人の手料理にはかなわないのさ。”

決して上手とはいえないごろごろしたニンジンが入ったポトフの味は最高だった。

“こんなおいしいポトフは初めてだよ。”

ジェイは関心したように言った。

“自分で作るとおいしいでしょ？特別なスパイスが入るからよ。”

“特別なスパイス？”

“マナよ。マナがたつぷりと入るの。”

マナか。これがマナの味か。ジェイは子供の頃、母親が作ったスープがあれほどおいしかった理由を知った。

“家庭料理にはマナが入るからおいしいんだな。”

極上のシャンパンよりも、世界の三大珍味よりも、チャンピオン牛のステーキよりも僕は死ぬ前にこのポトフを食べたいと思う。

ジェイが言った賛辞にジェニーは頬を赤らめる。

“そんなに大げさに喜んでもらうとなんだか悪いわ。”

そんなジェニーがジェイにはかわいくてたまらなかった。僕は人生の最後に女神を手に入れた。

ジェニーは本物だ。僕が人生をかけて欲しかったものをジェニーは持っている。

1日追うごとにジェイの疑いはジェニーへの信頼と変わっていった。

そんなジェイをジェニーは少し悲しげに見つめた。

清め

そんな生活が一週間続いたある日、ジェニーはついにベッドから起きあがれなくなった。

ついにその日が来たとジェニーは悟った。体が鉛のように重い。

“ごめんなさい。ジェイ。今日は調子が悪いわ。”

“大丈夫かい？ジェニー。今日はベッドにいたほうがいい。

シエフになにか作らせよう。きっと環境が急に変わったから疲れたんだ。”

ジェイは優しく言った。

“新鮮な空気を入れるよ。”

ジェイがいつて窓を開けると、虫のようなキラキラした親指ほどの物体が飛び込んできた。

“な、なんだ。”

ジェイが驚いて眼を見開く。

“テト。”

ジェニーがつぶやいた。

“テト？ああ、なんてこった。妖精なのか？”

ジェイが驚いたまま口をぽかんと開けている。

“ おお。すごい進歩だな。ジェニーと一緒にいて、清められたか。僕がみえるなんて。”

テトが楽しそうに言った。

“ テト。今日がその日なの？”

“ さあ、君が一週間後っていったから、僕は来た。それだけ。きつと君のほうがよく知っている。”

“ な、なんなんだ。まったく。今日がなんだっていうんだ。”

訳がわからないことに少し苛立ちながらジェイが部屋をうろつろつる。

“ ジェイ、落ち着いて、ジェイ。話があるのよ。”

ベッドの側に寄ってきたジェイにジェニーが優しく話しかける。

“ ジェイ、私にはね、少し特別な能力があつて。わかるの。”

“ なにが、なにがわかるっていうんだ？君は具合が悪いんだ。今日は休んでいた方がいい。”

“ ジェイ。私は多分、今日死ぬわ。”

“ な、なんだって？ ”

“ 私にはわかるの。多分今日よ。 ”

“ おお、なんてことだ。僕は信じない。

君はまだ若い。昨日まで元気だったじゃないか。たとえば、急に妖精がきたって僕は信じない。

妖精がきたら死ぬなんて、まるで死神じゃないか。 ”

ジェイはすっかり取り乱し、テトを追いかけまわしだした。

“ そんなきれいな姿をして、お前は死神か。ジェニーを渡しはしないぞ。 ”

鬼の形相でテトを追いかける。

“ 勘弁してくれよ。ジェニーなんとか言ってくれ。 ”

テトは動きの緩慢なジェイの動きを交わしながらジェニーに言った。

“ ジェイ、違うのよ。私が今日かもしれないと言ったから、テトが来たの。順番が逆なのよ。 ”

ジェイが肩を落として、ジェニーの側に戻ってくる。

“ 君は死ぬ時期を知っていたといったよな。 ”

“ ええ、予感よ。 ”

“僕をだましたのか。死ぬとわかっていて、1週間我慢すれば教会が救えると、そうわかっていて結婚したのか。”

“ジェイ。ごめんなさい。でもね、死ぬとわかっていたからあなたと結婚したわけじゃないわ。

信じて、この1週間の穏やかな日々を思い出して。何かを無理やり手に入れようとすれば必ず自分に返って来るわ。

けれど、信じて。私は望んであなたといたということを。”

ジェニーの声は次第にかすれていく。ジェイの手を握り、髪をなでる。

“あなたの孤独がいえますように”

そう最後にいうと女神のような頬笑みをジェイに送った。そしてすーっと眠るように息を引き取った。

“ああ、僕の女神。ジェニー、ジェニー。”

ジェイが取り乱す。

“ジェニー、ジェニー。僕の宝物。僕をだましたのか？死ぬとわかっていて僕を利用したのか？”

ジェイの嘆きようをなだめるようにテトが言った。

“ジェイ、聞いてなかったのか？ジェニーは望んで君といることを選んだ。貴重な死までの1週間。

愛する子供たちや生まれ育った家にいることを選ばずに君に全ての時間をあげた。

そのジェニーを疑うのか？

心が洗われたのを感じなかったか？見えなかった妖精が見えるほど清められた魂で君は疑うのか？

彼女を信じないでこの世の何を信じられるというんだ？”

テトがジェイを落ち着けるように優しく諭す。

“ジェニーが最後をかけて過ごした時間を否定するのか。”

涙にくれたジェイが肩を落としながら静かになった。

“いいや。”

ジェイは目を閉じてジェニーといった時間を嚙締めるようにいった。

“決して否定しない。この一週間は本物だった。

この一週間ほど心が癒された時間はなかった。僕はついに女神を手に入れたと思ったよ。”

テトは静かにうなずいて、ジェニーの胸元に舞い降りると祈った。

ジェニーの胸からすーっと白い光が天に伸び、純度の高い清らかな結晶が胸元に転がった。

“ジェイ、気づいたか？本物は人の心を動かす。ジェニーに会えたことに感謝しろ。”

君はジェニーに選ばれたことを誇りに思えばいい。”

“僕は、僕の人生はジェニーに誇れるほど清らかじゃなかった。ジェニーにあつて、何が大切なのかを思い知ったよ。本物の愛に心を打たれた。”

何もなくても一緒にいるだけでこんなに心が安らかになったことはない

。僕は、ジェニーを無理やり手に入れたというのに、神はそんな僕を罰したのだろうか。

無理やり手に入れた宝は無理やり奪われてしまった。”

ジェイは悲嘆にくれた。

“物事には原因と結果がある。自分の行いは必ず自分に帰ってくる。

けれど、これは呪いではない。

人生はいつだって気づいた瞬間からやり直せる。

君はこれからジェニーに誇れるように生きればいい。ジェニーも喜ぶよ。

そして、君が人生を全うして生き抜いた後、また会えばいい。楽しみは後にとっておけ。”

テトは言った。

癒し

“ アンクルジェイ。また来てくれたの？ ”

子供たちの顔が輝く。

ジェニーが死んでから、ジェイは私財を投じて教会の中の施設の増強を決めた。

毎日のように子供たちへのプレゼントを持っては教会を訪れる。すっかり穏やかになったアンクルジェイに子供たちはなついた。

“ ほつら、絵本を読んであげるよ。アンクルジェイのところに集まっておいで。 ”

子供たちが歓声をあげて、ジェイのもとに集まる。

“ ねえ、アンクルジェイ。ジェニーはどこに行ってしまったの？ ”

一番幼いエイミーがジェイの膝の上に上りながら聞く。

“ ジェニーはね、天使になったんだ。眼には見えないけどいつも側にいるよ。 ”

“ アンクルジェイ、ジェニーに会えなくて悲しい？ ”

エイミーが心配そうに言った。

“ そうだね。少し悲しいよ。僕はジェニーを本当に愛していたからね。”

“ I know! アンクルジェイはジェニーが本当に好きだったよね。”

子供たちが自信たっぷりに言う。

“ でもさ、ジェニーと会えてラッキーだったよね。”

エイミーが言った。

“ だって、ジェニーに会えない人もいっぱいいるでしょ?”

“ そうだね。”

ジェイは幼いエイミーの言葉に心を打たれる。

“ 本当に出会えただけで奇跡だよ。僕は最高にラッキーだったよ。最後の一週間、ジェニーを独り占めしたんだからね。”

“ いいなあ。ジェニーといたかったなあ。”

子供たちが口々に言う。

“ ジェニーといるとき、とっても安心するんだ。”

“また会いたいなあ。”

僕もだ。ジェイは心から思った。

けれど子供たちとジェニーの話をすると幸せな気持ちになった。

“僕の知らないジェニーをもっと教えて。ジェニーといつもどんなことしていたの？”

一つずつ、子供たちの声に耳を澄ます。

ふとジェニーの笑い声が聞こえた気がした。

“ジェニー、僕はこの歳になって生まれ変わった気分なんだ。”

ジェイは心の中で呼びかける。

“これでいいんだよな。ジェニー。”

ふふふとジェニーが微笑んだ顔が脳裏に蘇る。

“僕ももうすぐそっちへ行くよ。そしたらまた一緒にポトフを作ろう。”

この次は同じ歳に生まれるように神様をお願いしよう。そしたら君と長い時間ともに生きれるからね。”

ジェイはたくさんの子供たちの笑顔を見ながら思った。僕はもう孤独じゃない。

大往生

“ 次も大往生だな。 97歳のおじいちゃんだ。 ”

よかった。 ジルは思った。 カフナに続いて静かな死を見守れるだろう。

“ ハワイカイのほうだ。 ミリタリーのタウンハウスに住んでいる。 ”

たくさんの似たようなうちが並ぶタウンハウスは軍関係者が住む家賃の援助が出ている特権住宅だ。

“ ミリタリーの人だったのかな？ ”

“ ああ、 日系2世だ。 同じ日本人と戦った兵士だった。 ”

テトが言った。 ジルはハワイで育ったので、 大まかな歴史は把握していた。

ハワイにはたくさんの日本人がいる。 1世2世の苦労はハワイの歴史に刻まれている。

彼らによって持ち込まれた文化や功績は数知れない。

南国の夢のような生活を目指して遠い海を渡ってきた日系1世の多くは沖縄出身者だった。

彼らの生活は過酷を極めた。 鞭を持った白人の下1日10時間以上の肉体労働、

出身の国別に分けられ名前ではなく番号で管理される生活は奴隷のようだったという。

日本人の中でも沖縄出身者は同じ日本人にも下に見られ苦労したという。悲しい歴史。

1世の子供である2世は祖国と生まれ育った国との間で始まった戦争に翻弄される。

真珠湾攻撃の際、ハワイの人工の約40%は日本人だった。日本は何を思つてこの島を攻撃したのだろうか。

一度でもこの美しい島を見ていたら、焼き払おうと考えただろうか。

たくさんの日系人がこの攻撃のあと収容所へ送られた。

それでも彼らの多くはアメリカに忠誠を示すため、アメリカ兵士として自分の祖国と戦った。

白人兵士からの差別と戦い、祖国の日本人と戦った。彼らの苦しい立場は後々の日系人にも語りつがれている。

繰り返される悲しい歴史。戦争。

彼らは日本のみならずフランス、イタリアでも最前線で戦った。数多くの手柄を立てて帰国したが、

最前線で格闘したこの部隊は多くの戦死者と負傷者を出した。

彼らの勲章は7つの大統領感謝状、6000を超える個人勲章。

2つの部隊で獲得したその数はどの部隊よりも多かった。当時の大統領ハリートルマンは彼らを讃えてこういった。

“君たちは敵軍との戦いに勝っただけではない。偏見との戦いにも勝ったのだ。”

日系2世の功績によりハワイでの日本人の地位は格段に向上し、今の平和なハワイを日本人が快適に訪れることができるのも彼らのおかげだ。

“ G o f o r B r a k e ”

当って砕ける。彼らのスローガンだった。常に腹をくくって生きてきた人たちだ。

“ 人を殺したピュアソウルだ。 ”

けれど、テトが言ったので、ジルは体が硬直した。戦争で得た勲章は名誉かそれとも人殺しの証か。

“ 人も少しずつ進化して戦争が減ってきているけれどね、もつとも低俗な風習の一つだ。同種なのに殺しあう動物は人間と虫けら位かな。

母親の腹を食い破って出てくるマムシの類と一緒にだ。けれど個々のソウルに罪はないんだ。

彼も殺したくて戦争に参加したわけじゃない。そういうのは殺人にはカウントされないよ。彼個人が背負う責任じゃないからだ。 ”

テトが言った。テトがそうだったので、ジルの心は少し軽くなった。戦争に借り出された上に、人殺しと責められてはあんまりだ。けれど、戦後生まれのジルには所詮、戦争は遠い過去だった。

“ 人間って集まると時々恐ろしく負のエネルギーを高めるんだ。

それが一方に憎しみとして向けられると戦争が始まるらしい。個人レベルではそれほど低いソウルじゃないんだけれど、

心がすすんできて、負のエネルギーがどんどんたまる瞬間がある。

心が地獄の状態だな。誰の性でもないその感情を誰かにぶつけないと収集できなくなる瞬間が。

そうすると変な理屈をつけて誰かを攻撃し始めるんだ。小さければ個人の殺人。

大きくなると一つになって戦争に向かう。その渦に色んなソウルが巻き込まれる。

竜巻みたいなもんだ。ピュアソウルですら逃れられない。ただ受け流すってことができないんだ。負のエネルギーはただ受け流せば消えるのに。”

テトが言った。

過去

キヨシ金城。沖縄出身の97歳。

ハワイカワイに静かに暮らす彼は大家族のようだった。

ベッドから起き上がれないキヨシのもとにひっきりなしに人が出入りしている。

“グランパ。お水が欲しい？”

“グランパ、どこか痛い？”

“グランパ。今日は何が食べたい？”

かわるがわるキヨシのベッドを訪れては何か聞いたり話かけて出て行く。

ある者は日本語で、あるものは英語でキヨシに話しかけては出たり入ったりしている。

キヨシの周りには子供大人も常に3、4人いて、どうやら家族以外近所の人もちよくちよく来るらしい。

しばらく外から様子を見ていたジルはテトに言った。

“なんだかたくさんの人に囲まれたピュアソウルだね。”

“そうだな。戦後、この人はハワイの日系人のために全てを捧げて生きてきた。

おかげでハワイの日本人は大分快適になったはずだ。同じ人間なのに住んでいるエリアだけでなんで区切るのか人間って不思議だな”

“妖精にはないのか？”

“ないね。世界中、妖精は妖精だ。それ以外に何があるっていうんだ？”

テトは国という認識が理解できないようだった。

“言葉も文化も違うからな。”

“そんな些細な事気にする方がおかしい。

人間は一緒だ。目が二つ。鼻が1つ。口が一つ。2本足で歩いて羽はないから飛べない。

光らない。

身長も似たりよったりだ。大まかに分けると、

犬や鳥やキリンや象とは全然形が違うし、誰がみたって人間は人間だ。他の動物から見たらみんな一緒だ。”

テトがそういうので、ジルは心から納得した。そうだな。人間はただ人間だ。

それにしても、人と少し違うという意味で孤立しがちなピュアソウルに珍しく大勢の家族と人に囲まれたピュアソウルだな。

テトは感心したようにキヨシを取り囲む人々を見た。どの人も心からキヨシと少しでも一緒に居たいようだった。

“これだけ人が多いとな。そーっと俺一人で夕方にいくよ。”

ジルはうなずいた。僕が行ったら、まるで死神だ。

キヨシは今でも時々悪夢を見る。

銃を構えた日本人兵士が目の前に立つ。

“ お前もこれで終わりだ。”

にやりと笑って引き金を引こうとした瞬間、キヨシが日本語で話しかける

“ まってくれ。”

日本兵がびっくりして一瞬戸惑う。

“ 日本人なのか？”

一瞬ひるんだ隙についてキヨシの後ろから同じ部隊の日系2世兵士が引き金を引く。

目の前に崩れ落ちる日本人兵士。

“ なぜだ。なぜ日本を裏切る。”

その日本人兵士の悲しげな責めるような目が頭から離れない。

“ なぜだ、なぜ日本人がアメリカ側にいるんだ？”

裏切り者、裏切り者。

日本兵の断末魔がキヨシの頭にこだまする。

“うーっ。”

“グランパ。大丈夫？グランパ。”

孫娘のケイレンが心配そうにベッドの横にいる。

ぐっちよりと汗をかいたかいたキヨシが夢から目覚める。

“大丈夫だよ。ケイレン。”

“グランパ、少し熱があるのね。うなされていたわ。”

キヨシは平和なベッドの上にいることを確認してほっと安心する。

英語と日本語を話す愛孫娘がハワイの空で笑っている。

戦争中は想像もできなかった平和な光景だ。よかった。終わったんだ。全部終わったんだ。

疑問

思えば、戦後の数十年。

キヨシは日本と戦ったことへのお詫びのような気持ちで日系移民たちにつくしてきた気がする。

日本からハワイに移りすむ人を歓迎し、サポートし、彼らのビジネスや生活が整うよう奔走してきた。

ハワイの日本の文化交流にも力をつくした。

おかげでハワイは真珠湾の悲劇を忘れたように日本と仲良くなっている。

それでも若い人がパールハーバーを訪れると日本を嫌いになって帰ってくることも多い。

父母の祖国を愛する気持ちと故郷を攻撃した国が同じなんてまさに運命の皮肉だ。キヨシは今でもそう思っている。

一度戦争で戦ったものは普通の精神状態には戻れないんだ。

キヨシは平和になった今も心に闇があるように感じる。

一度、人を殺めた人間は魂が汚れた。キヨシはそう思っていた。それをなんとか清めたくて人から喜ばれたくてなんでもしてきた。

“ G o f o r B r a k e ”

当たって砕ける。軍に居た時のスローガンはそのままキヨシの生きる道となった。

常に覚悟を決めてことに取り組んできた。

命がけで生きてきた。

結局自分のためだったのかとふと自分本位な生き方を責めるような気持ちにもなる。

僕は偽善者ではないだろうか。

人に良くして、けれど実は自分の魂を救いたただけなのではないか。

繰り返された自問自答。

けれど、あの時、僕はああするしかなかったんだ。

言い訳じゃない。自分の家族を守る為、自分のアイデンティティを示すため。

孫娘がアメリカを讃える歌を胸に手を当てて歌うたびにキヨシは不思議な気持ちになる。

祖国ってなんだ？この子は100%日本人の血を持って生まれた。けれどアメリカに住み、アメリカの言葉を話し、アメリカ人として国を讃えている。

国なんて所詮そんなもんだ。ただそこに生まれたというだけ。そこに住んでいるというだけ。

見えない線を引いて、先人が勝手に線を引いて決めた国境に翻弄されただけ。

キヨシはほとんど戦争のことを家族に話さなかった。

つらい過去はふたをして捨ててしまふに限る。

今、今にエネルギーを注げば未来はきつと開かれる。あたって砕ける。今だけを考えていきるんだ。

先の見えない苦しみの中で今に集中して最善をつくすことで人生を生き抜いてきた。

けれど、ここ数日、キヨシの頭の中には走馬灯のように過去が浮かび上がっては消えていく。キヨシは穏やかにそつさどっていた。

夕方、

“夕焼けがみたいな”

ぽつりと娘にいうと、車椅子でラナイに連れて言ってくれた。

“なにか飲む？”

“じゃあ、寝る前に暖かいホットチョコレートでももらおうかな。”

“まあ、子供みたいね。”

“なあ、ジェシカ。”

娘に話しかける。日系3世の娘の笑顔は屈託がなく生粋のハワイアンのような。

彼女もグランマと呼ばれる歳になった。

キヨシは最近、ジェシカをなくなった最愛の妻に重ねることが多くなっていた。

ともに人生を歩んだ妻に話しかけるようにキヨシは聞いた。

“僕は人を殺さなくても生きれたと思うかい？”

ジェシカは驚いたように父親を見つめた。

キヨシが戦争について自分の口から話すことはほとんどなかった。

父親の受けた深い傷はジェシカも充分承知している。

父親が何に苦しんでいるのか知りたくて、父親が所属していた部隊について一通り調べたこともある。少し間を置いてジェシカが答える。

“Noway!”

“ありえないか。”

キヨシがゆつくりと微笑む。

“無理だったわ。パパ。”

そう、無理だった。

キヨシは自分を納得させるように娘の言葉を反復する。

軍隊の命令は絶対だった。

群集は大きくなると罪の意識を薄れさせる。

人を殺すことは間違っているという状引きが、戦争になった途端、仕方ないことに変わる。

群集は命令されれば統率され、それに従うようにできている。

そこに個人の意思は反映されない。

あの時、キヨシ一人が僕は誰も殺したくないといったところで、何になっただろう。

代わりに友人が殺され、キヨシは反逆者の汚名を着せされる。

けれど、あの波に流された自分を肯定することもできないでいた。

近づく死に気づいた今、思い出すのはそれが正しかったのか、そうでなかったのかという疑問ばかりだった。

“ パパ、あまり昔のことばかり思い出すのはよくないわ。今は夕日を楽しんで ”

娘が微笑みながら家の中に消えた。

久しぶりに一人きりだ。いつも賑やかで楽しいがたまには一人になりたいときもある。

高台にあるキヨシの家のラナイからはハワイ海の海が一望できる。
今日の夕日はひとときわ赤く美しかった。

大きな太陽が大分水平線へと近づいている。

太陽の光にシルエットとして浮かび上がった海岸沿いのやしは黒い陰となりながらすかに風に揺れている。広大な海が次第に赤く染まり始めた。

“ やあ、 ”

一人になるのを待っていたかのようにふーっと目の前に妖精が舞い降りた。

“メネフネ。気のせいかな？”

“気のせいじゃないさ、しっかり見てくれ。”

テトがくると回って見せた。美しい羽からあでやかな光が飛び散る。

“妖精が来るなんて長いこと生きているけど始めてだ。”

目を細めてキヨシが言った。

“そうか、長いこと生きてきた割に、初めてのことがあってよかったな。”

テトの生意気な口ぶりに思わず頬が緩む

“充分生きただろ？家に帰るときがきた”

テトは遠慮なく言った。

“家に帰る？”

キヨシはしばらく意味を考えてから
キヨシは顔をしかめていった。

“死ぬのですか。”

“いやなのか？こんなに生きたのにまだ嫌なのか？”

テトは驚いたように言った。

“死ぬのが怖いんじゃない。”

“じゃあ、なんだ。”

“死ぬ前に答えが知りたいのです。”

許し

“ なんの答えだ。 ”

キヨシはテトを神の使いのように思った。救われたかった。死ぬ前に。

“ 教えて欲しいのです。 ”

私の魂は汚れていますか？

私は戦争で人を殺した。

汚れているのではないかと、
取り返しが付かない間違いだったんじゃないかとそれだけが気になるんだ。”

テトはしばらくキヨシを見つめた。

キヨシの中に起こった過去を確認しているような眼だった。

そしてしっかりと確信を得たようにテトはこう答えた。

“ 大丈夫だ。ピュアソウル。 ”

キヨシが驚いたように目をあける。

“ ピュアソウル？ ”

“そうさ、あなたは魂の中でもまったくの汚れない選ばれしピュアソウル。
汚れてはいない。戦争の出来事はあなた一人の魂が背負う出来事じゃない。

あの時代を生きたソウルは大きな渦から逃げられなかった。

心配するな。あなたは生まれてからずっとピュアソウルのままだ。”

“ああ、”

キヨシは皺だらけの手で顔を覆って泣き出した。

テトの言葉が神からの許しのように感じた。

肩を震わせて嗚咽する。やがて顔を上げて涙でぬれた顔をテトに向けてといった。

“私はずっと苦しんできたのです。”

“戦場の最前線にいて、もうだめだと思ったとき、
銃弾が自分だけを避けて飛んでいくような気がしたことはなかったかい？”

“そう、なんとか奇跡を味わいました。
僕たちの部隊はいつも一番危険な任務についていた。

G o f o r b r a k e ! スローガンどおり、いつ砕け散ってもおかしくはない状態だった。

けれど、不思議な力に守られているような感覚がいつもあった。

私はあの銃弾が飛びかうなかにて不思議と恐怖に震えることはなかったのです。”

キヨシが思い出すようにぽつり、ぽつりと話した。

“ そうだろうな。ピュアソウル。あなたのガーディアンは強力だ。あなたが果たす戦争後の役割に導くため。あなたの本当の役割はあの戦争が終わったあとにこそあった。

そのために生まれたソウル。

役割を充分に果たしたとは思わないか？ ”

“ 私は、私なりに最善をつくしてきた。 ”

キヨシは思い返してそう言った。

“ それならば、苦しむな。必要ない。 ”

テトはほらね！と言いたげにくるんと周りながら言った。そして続けた。

“ たとえ、罪を作ってカルマを負ったとしても、必ずやり直せるようにできている。

神は魂にとことん甘いんだ。何度でもやり直せるように設定してあ

る。

天使ですら、聖人ですらカルマは作ってしまう。

けれどそれは呪いではないよ。

いつでも気づけば消える。けれどあなたは、生まれてから今までずっと純度の高いピュアソウル。

妖精の俺が言うんだ。信じろ。

そして、自分の家族を思い出せ。周りにいた友人を思い出せ。

ピュアソウルが引き寄せるにふさわしい素敵なソウルじゃなかったか？

“ああ、家族も友人もすばらしい。みんな私の宝です。”

“そうだ。そしてあなたは孤独じゃない。”

“そうだ。私はいつも常に愛する人に囲まれていた。”

“幸せだったろ？”

テトが穏やかに言った。

“ああ、幸せだった。”

“自分自身に矢を向けてはいけない。自分の心に矢を刺して何になる？”

もっと自分自身の魂、インナーチャイルドを愛し、許してあげなくては。”

“自分のインナーチャイルドを？”

“そうさ、他人をいたわるように、自分自身を愛し、許すことも同じぐらい大切なんだ。”

考えてみてよ。世界中の人々が自分を愛し、許し、そして、身近な家族を愛したら、戦争なんて起きるか？

愛は自分の周りほんの少しでも充分なんだ。

皆がマザーテレサのように世界平和に貢献できるわけじゃない。自分のソウルのレベルにあったこと、まず自分を愛し許し、そしてそれができたら、隣にいる人を愛してみる。

ステップバイステップなんだ。

一人残らずそうしたら、それだけで世界が変わる。

ゆびをぱちんと鳴らすように簡単な事なのに。”

“けれど。戦った兵士たちも、家族を愛していた。一部の人間によってコントロールされた世界ではその小さな愛への尊敬など踏み潰さねのです。”

“そつだな、未熟な魂に引きずられる。そんな魂も気づけば変わったはずだ。チャンスは一度じゃない。”

そうやって少しずつ魂は進化してきた。何度でもやり直せる。気づいたときからそれは始まる。”

キヨシは考え深げに空を見つめた。

“ピュアソウル、君はよくやったさ、難しい時代を魂を傷つけずに生き抜いた。あとは自分を許すだけだ。”

自分を許す。キヨシが長年かけてできなかったこと。

“自分の潜在意識に呼びかけるんだ。アイラブユー。ごめんなさい。そして有難うってね。”

テトが優しく言った。

“僕は先日偉大なカフナにあった。”

テトはカイを思い浮かべながらいった。

“彼はこのメソッドを使いこなして人々を癒していたよ。ハワイアンヒーリングシステム、ホ・オポノポノという名前で行っていたな。知っているかい？”

キヨシはその名前を知らなかった。

“自分をクリーニングして過去をゼロにする方法さ。”

自分の中の潜在意識に呼びかけ、いたわり、愛し、許す。そうすると驚くほど未来は開ける。

人間っていうのはさ、こんなクリーニングが必要なぐらいネガティブなことに意識を向ける生き物なんだよな。

考えなくてもいいことを考えてそこにマナが流れてしまう。

そうすると現実になってしまう。余計なことを一切掃除してゼロに戻すとさ

、愛のエネルギーがたくさん充電されて幸せになるんだ。

その愛はどこから来ると思う？

無限なんだ。

アースを飛び越えて宇宙の神と繋がる。

宇宙の神の愛はどれだけ与えても消えることがないほど深く、大きい。

いくらでももらえばいい。

ひとを愛する以上にまずは自分のインナーチャイルドを守り愛するんだ。”

ハワイアンに古来から伝わる伝統の秘法。ホ・オポノポノ。

ハワイの選ばれたソウルにだけそと教え伝えられた取って置き魂をクリーニングするメソッド。

心をゼロの状態に戻すことで過去から自由になり、問題を解決する。驚くほど簡単で確実な方法。

これを使いこなすと、ネガティブなエネルギーをそっくりポジティブな愛のエネルギーで満たすことができる。

すべての出来事の問題は自分自身の中にあるという考え方はすぐに何かの性にして生きる人間には気付きにくいメソッドだが、

記憶や想いは思ったよりずっと現実の問題に影を落としているのだ。

これをクリーニングすることで心は驚くほど元気に、伸びやかに開放される。

そして満たされた愛のエネルギーは想いを現実にし、次々と大きな変化として実際に現れる。

人間はこれに気付けばもつと上手く未来を作り出せるのだ。ネガティブな意識のない妖精たちは常にホ・オポノポノを実践していると言っている。

自分の心を自分で清め、常にポジティブな愛のエネルギーで満たしている妖精たちに不幸なことは起こらない。

当たり前のこととして日常にあったこの方法が人間たちには未知の世界なのだとテトはカイから聞いた。

人間の中で使いこなせる人はまだまだ少ないらしい。

テトはキヨシこそ過去の記憶から解放されるべき人だと感じた。

“妖精から教わるなんて光栄だろ？こんなこと知らないなら早く言ってくればいくらでも伝えたのになあ。

妖精の常識は人間には通用しないんだな。

”

テトがキヨシにいつているのが独り言だかわからない声でぶつぶつ言った。

妖精の言葉にキヨシは素直に目を閉じて呼びかける。

“長い間、苦しめてごめんなさい。私は君を愛しています。今まで有難う。”

なんどもなんども呼びかける。 I love you . I love you I love you…

キヨシの目から涙がこぼれ落ちた。自分で自分のソウルを清め救う。

心が清められていくのが分かる。大丈夫だ。と心の声が聞こえたように、不安も恐怖も消えていった。

“世界中の人々が今日から I love you と自分自身に呼びかけ始めたら、世界は一瞬で癒されるな”

テトは苦しみから解放されていく気高い老人を見つめながらそう思った。

“思い返せば、そうだよなあ。これだけネガティブなことばかり考えている生き物も珍しい。

人間に必要なのはホ・オポノポノだな。自分で自分をクリーニングできれば世界は自然に変わるもんなあ。”

テトはキヨシの様子を見ながらつくづく思った。アースにさじを投げられた人間に今、必要なのはクリーニングだ。

テトがキヨシを見て言った。

“さあそろそろだ。家に帰る時がきた。”

キヨシは聖人のように穏やかな顔になっていた。

“ありがとう。ありがとう。神様。私を生かしてくれた神様。ありがとう。いい人生でした。”

キヨシは戦争の罪が今やっと許されたように顔の緊張を緩めた。長く深く引きずっていた後悔と苦悩が溶けた瞬間だった。

そしてすーっと車椅子にもたれるとそのまま息を引き取った。

丁度そのとき、ハワイカイの広大な海に大きな夕日が沈む。

真っ赤な太陽は水平線すれすれで完全に沈む前に光を放った。

一瞬、瞬くようにグリーンの光が瞬く。

“グリーンフラッシュ。”

テトが言った。グリーンフラッシュを見たものは幸せになるという。

“ピュアソウルの死に祝福を”

テトがそう祈って、キヨシの胸元に舞い降りた。

手をかざすとすーっと白い光が天に伸びキヨシの胸元に輝く結晶が浮かび上がった。

テトはピュアソウルの結晶をそつと手にとった。

“グランパ。今の海を見た？グリーンフラッシュよ。きっと幸せになるわ。”

キヨシの孫娘がラナイに飛び込んでくる。

キヨシの手がだらんと車椅子からたれていいる。テトには気づいていない。キヨシに駆け寄りながら彼女は叫んだ。

“グランパ？グランパ？大変よー。マミー”

キヨシの家が大騒ぎになっている。テトはその光景を横目で見ながらそつと飛び立った。

“それにしても大勢に囲まれたピュアソウルだったな。”

と思い出してくすくすつと笑った。次はもう少し静かな人生を選ぶかも知れないな。

それにしても、あれほど気高い魂の持ち主でも自分のこととなるとあまり分からなくなってしまうらしい。

“すべてはあの恐ろしく記憶の悪い頭の問題だな

。生まれて来る前のことだってなんにも覚えちゃいないんだから。変な記憶しか残っていないのなら、クリーニングして完全にゼロにしたほうがましだ。”

車に戻るとジルが待っていた。

“終わったのかい？”

“ ああ、終わったよ。”

“ 次はもつといい時代に生まれ変わるよ。”

テトが確信を持っていた。

“ 人を殺さなくても生きられる時代だ。”

テトがいった言葉にジルは自分の幸せを感じた。

少なくとも俺は、人を殺さなくてもいい時代に生まれている。
それだけを望んでいた先人たちもたくさんいたんだ。ジルは歴史の
重みを感じた。僕は贅沢なんだな。

“ お前さ、今回何にもしてないよな？ ジェニーの時もいなかったし。”

テトがふと思い出したようにジルに言った。

“ リアンの時もご飯作っていただけだったよな？”

“ 何が言いたいんだよ。”

ジルがテトに言った。本当にジルはピュアソウルかな。テトはたび
たび起き上がるこの疑問を消すことができなかった。

“ テト、コーヒーおこるよ”

ジルがお疲れさまというような眼でそういった。

“ コーヒーか！よし早く行こうぜ ”

テトが嬉しそうに言った。

“ ジル、お前いいやつだな。 ”

“ なんだよ、急に。 ”

“ コーヒーくれるやつはいいやつに決まっている。 ”

愛しい妹

“さて、次のピュアソウルは。ペレが唯一教えてくれたピュアソウルだったな”

そう言ったあと、テトの表情が少し曇った。まだ羽が痛むのかとジルは思った。

テトがめつたにしない表情だ。けれど、次に続いたテトの言葉はジルの想像を超えるものだった。

“ジル、兄弟がいるのか？”

“ああ、カイルアに妹が住んでいる。双子なんだ”

“双子か。なるほど”

テトが少し考えるような目をする。

一卵性双生児の遺伝子は99%同じというが、ソウル的にも驚くほど近い。

ジルの双子の妹もジルと同じくピュアソウルだ。

テトは、ジルが家族の死を受け入れられるか不安を覚えた。

“その妹は何をしている？”

“今はフラハラウでインストラクターをしている。

有名なクムフラのアラカイ（弟子のインストラクター）なんだ。週に一度はワイキキのホテルでステージをしている”

“そうか、フラダンサーか。ペレが選ぴそうなソウルだ。”

“ペレが選んだ？もしかして次のピュアソウルはラナなのか。”

ジルの声が思わず裏返る。ピュアソウルの死をみてきたジルは次のソウルが自分の妹、ラナと知って愕然とする

“ま、待ってくれ。ラナが死ぬってことか？？”

“死はペレが選んだから決まったのではない。初めから死ぬピュアソウルの中から選ばれている”

どちらが先でもジルにとっては同じことだった。

“まだ28歳だ。病気だつてない。”

この間、ミスアロハフラに選ばれてこれからって時だ。

なぜラナが。。。原因は？死因はなんなんだ？いつだ。いつ死ぬんだ？”

“落ち着けよ。全部はとも答えられない。とにかく行こうぜ。ラナのところへ”

ジルはまったく平静を失っていたが、テトをのせてカイルアへ車を

走らせた。

パリハイウェイはいつもすいていて、緑の中の坂を上って下ったところにかイルアの街が広がっている。

ワイキキの喧騒と違い、1軒屋が多い落ち着いた住宅街で、ラナは実家に住みながら近所のクムフラのスタジオに毎日通っていた。

カイルアのビーチはとにかく青い。引き込まれるような青さだ。

いつも強い風吹いているビーチの空気は清らかで、真っ白な砂浜の砂は頬をすりよせなくなるほど決め細やかで美容液のようだ。

ジルもラナもこのビーチを庭のように育った。

“この時間はクムのところにいるはずだ”

眼をつぶつても運転できるなれた道。

ジルは実家にはよらず直接クムフラのスタジオへと向かった。

実際、こんな昼間から妖精を伴って実感を訪れる勇氣もなかった。

母はラナを失ったらどうなってしまうだろう。

妖精とラナ

ジルの心は重く、震える手でハラウのスタジオの扉をあけた。

ちょうどラナが古典のフラカヒコを踊っているところだった。

ペレをたたえるフラ。

イプヘケと呼ばれる使う巨大なひょうたんのような楽器でリズムをとり、

低く響く荘厳なチャント（詠唱）のフラカヒコ。

ペレが題材だけあって大地を表現するために重心が低い体制で動きも激しい。

荒い息遣いのなか、長い髪を翻して踊るラナ。妹のフラを見るのは久しぶりだった。

“アレが君の妹か。ピュアソウルのフラはさすが光が違うな。”

テトが言った。

もともと現代フラのアウアナと違い、神々にささげる神事に踊られるフラカヒコは荘厳なものだ。

観光でみるショーダンスとは本来意味合いが違う。

ラナのクムは祈りをささげるように歌う。

クムとはハワイ語で先生という意味を持つ。

胡坐をかいた間に挟んだイプヘケでリズムを取りながら次第に早く

なっていく踊りを先導するように歌っている。

低いよく通る声がハラウに響く。

チャントと呼ばれるハワイの言葉で唱えられるリズムのある祈りのような歌は聴いていると心が清められるような神事の魅力を持つ。文字を持たなかったハワイアンは歴史や天変地異などをチャントに盛りこんで後世に伝えてきた。

特に王族一族に関しては、家系図をはじめさまざまな事実が、しっかりと記録されている。

神々を讃える言葉や、王族の歴史、埋葬された場所など事細かにチャントに替えられ口伝えで後世に残されているハワイの文化はとても特殊だ。

ジルはいつでもラナやクムのチャントを聞くと厳かな気分になったものだ。

70歳を越えるクムに刻まれた皺はまさにハワイ文化の生き字引を思わせ、その存在は人間国宝だった。

クムフラとはそれだけ価値がある人なのだ。

パウと呼ばれる腰で履く、ひだがたつぷりと寄せられたハワイアンファブリックで作られたスカートを翻して、腰を振りながら踊るラナ。

“きれいだな”

自分の妹ながら、ジルは心からそう思う。

ラナに限らない、フラに打ち込むダンサーたちはどの顔もりりしく美しい。

ラナの瞳と腰まで伸びた黒髪がペレを思わせる。ラナは情熱の塊の

ような女だった。

“ハイナ！！”

フラが終わりに近づくと必ずかけられるお終いの意味のハワイ語ハ
イナを聞き取ってジルに再び緊張が走る。
ラナに一体何が起きるっていうんだ。

“ジル。何しにきたの？”

踊り終わったラナに声をかけられてはつとするジル。

ジルの肩にのっている妖精に眼を見張る。口が開いたまま動かなくなっている

“気の性じゃなければ妖精が見えるんだけど。。これってメネフネ
？”

“まあ、なんというか、みたいなもんだ。テトだよ。”

“始めまして。ジルを女にすると君のように美しくなるのか。不思議
だな双子って”

とテトが軽口をたたく。

“ラナよ。妖精と話しているなんて。信じられないわ。クムにも見
えるかしら。”

“やあ、シンディー。久しぶりだな”

テトがクムに気安く声をかける。

“もしかして、テト?? まあ、なんてこと。私が少女時代に遊んでいた妖精とこんな歳に再会できるなんて!!”

“シンディーが10歳ぐらいの頃、僕らはこの辺のビーチで遊んでいたんだ。”

テトが驚く二人に説明する。

あの少女がピュアソウルのクムか、縁とは不思議なものだなとテトは思った。

“私が妖精と遊んでいたって言っても偉大なグランマ以外は誰も信じてはくれなかったけれどね”

とシンディークムが笑う。

“すっかりおばあちゃんになっちゃったのに、よくわかったわね。”

“妖精は魂で区別がつくからな、肉体の見た目が変わったって間違えたりはしないさ”とテトが笑った。

“なんて素敵な日なのかしら。妖精と話せるなんて、本当に妖精なのちょっと見せて”

ラナが感嘆の声を上げる。そして、テトを点検しはじめた。

“羽がなんてきれいなのかしら、うわー。光るのね。”

ちょっと飛んでみて。そう、わたしの手にも乗れる？

抱きしめたいわ。なんでアロハ着てるのー？

ジルとおそろい？仲良しね。ハグしても壊れない？”

“飛べるけど今まだちょっと痛いからあんまり飛びたくない”

テトがふてくされて言う。

“なんでー？なんで飛べないのに羽があるのに？”

“質問が多いんだよ。ラナ”

質問攻めに面倒になったテトがそういつて笑った。

素敵な日。感激したようにラナが言った。

ジルが複雑な表情でそれを見ている。

ラナがもうすぐ死を迎えるから来た妖精なんだ。

死神みたいなもんじゃないか。

ジルは悲しくて仕方がなかった。

“おい、ジル。”

ラナの点検から逃げ出してきたテトがジルの肩に止まっていった。
。乱れた服を整えながらジルの心を見透かしたように言う。

“ 僕は死を操ったりしない。

いいかい、肉体は滅びても魂は死なない。ピュアソウルを地球に返すだけだ。そんなに悲しむな。”

耳元でテトがささやく。

“ 僕は人間なんだ。そんな風に割り切れるか。”

苦しげにジルがつぶやいた。

まったく、カイの死を祝福できるとかなんとか言っていた矢先にこれだとテトは少し呆れた。

本当にピュアソウルなのか？けれど、テトは優しく言った。

“ そうだな。人間は視野が違った。ちょっと時間が必要だな。”

“ ジル、今日はゆっくりしていけるの？妖精を連れてくるなんて、クムに会わせにきたの？
本当になんて素敵な日なのかしら。”

はしゃいでいるラナ。クムも久しぶりの再会に心を弾ませている

“ テト、あなたは歳をとらなくていいわね。あの日のこと覚えている？”

昔話に花を咲かせているそばで、ラナは一言も聞き漏らすまいと嬉しそくに話を聞いている。

ジルは少し離れた場所でそれを見ながら、複雑な思いでラナの死について考えていた。

いつだ。どうやって。せつかくミスアロハフラになったばかりだったのに。

双子

ミスアロハフラは、幼い頃からフラを学んできたロコガールたちにとっては憧れのタイトルだ。

フラをやっている人で、ミスアロハフラにあこがれない人はいない。

年に一度、ハワイ島ヒロで行われるフラコンペティション、

メリーモナークフラフェスティバルで世界で一番の、たった一人のフラガールに贈られる称号がミスアロハフラだ。

コンペティションにはクムが認めたダンサーしか出られない熾烈なもので、

ラナは持ち前の気の強さでフラ漬けの日を送り、去年やっと努力が報われたばかりだった。

ミスアロハフラに輝いたあの日の踊りは今もジルの心に焼き付いている。

ラナのフラは圧巻だった。

世界中からフラダンサーが集まるメリーモナークは文字通りお祭り騒ぎで、

会場は人でごったがえしている。妹の晴れ姿を見ようとニューヨークから駆けつけていた僕は始めて見るフラダンサーたちの熱気に圧倒されていた。

どのハラウもフラダンサーも真剣にフラに取り組む姿勢が美しかった。

“ラナよ。ついに彼女よ”

と会場から声があがった。ジルも少し緊張してステージに注目する。シンディークムよりも少し高く若々しい声でゆっくりとステージを歩きながらラナがチャントを唱える。

鮮やかなグリーンのティーリーフのスカート。

黄色いタパの布を胸に巻き、朝積みのマイルで作ったたっぷりとしたハクを頭に載せ、ウェーブのかかった黒髪が腰まで伸びている。

伸びやかなラナのチャントは満場になっている会場に響き渡り、

ざわざわしていた観客はぴたつと息を呑んだように静まり返った。

ラナのチャントが終わり、イプヘケのリズムとともにラナが激しく踊りだすと会場からうおーっと歓声が上がった。

ラナが座るたび、ラナが回るたび起きる歓声はどんどん大きくなり、ジルは熱気に鳥肌がたった。

激しく優しく、ラナは魅力的だった。激しい下半身の動きと裏腹に優雅な指先の動き、回るたび翻るスカートと長い黒髪。

会場が一体となってラナのフラに魅入る。やがて、曲の終わり

“タンタンタン！”

シーンとした会場にイプヘケの音が響きぴたつと止まると同時にラナもぴたつと動きを止める。

観客はうねるように立ち上がり、拍手と喝采をラナに送った。

まるでフラの神が乗り移ったようだ。

人々は口々にラナのフラを讃えた。

今でも鮮明に浮かび上がるラナの誇らしげな姿。自慢の妹だった。

“これからだったんだ。これからたくさんのステージで活躍し、やがてシンディーのようにクムフラになるはずだったんだ。

”

ジルはたまらなかった。

“ラナのフラがもう少し見たいな”

テトが言ったのでラナが喜んで何曲か踊った。

ジルはフラを見ながらテトにいった。

“現世のゴールは通過点でしかない。

再び産まれてくるときにラナはもっと重要な役割を担うかもしれない。

今しかないんだよ。常に今しかない。

過去が何万回もあったように、未来もきりが無いほど永遠だ。

だから考えて何になる？

今にすべてをかければ点が線になっていく。ラナは次、産まれてきてもフラが上手いと思うよ”

とテトがいった。来世でもラナはフラを踊っているのだろうか。

“ペレに愛されたフラだ。簡単にその能力を失ったりはしないさ。ずっとフラを踊っているさ”

テトがつぶやいた。ラナはフラを踊っているときが一番美しい。

ジルもずっとそう思ってきた。ラナ。僕の大切な妹。

1位のタイトルをとつてもラナはいつもラナだった。

とてつもなく優しく、それでいて負けず嫌いの頑張りやだった。

僕はまぶしい妹に追いつこうと自分も頑張ってきた気がする

。双子特有のテレパシーのように、不思議とわかりあえる自分の半身のような存在だった。

失いたくない。こんな風に死に執着する自分がピュアソウル？ジルはとても信じられない思いだった。

幼かった頃、ラナと僕はよく二人きりで遊んだ。

多くの双子がそうであるように僕らは二人でいることで満たされすぎて、

友達を作るのが苦手だった。一つのことを言っただけで十わかりあえる相手が身近にいるのに、

簡単にはわかりあえない他の友達は少し面倒だった。

ある日、ラナが熱を出して幼稚園を休んだ。

僕はラナが居ない学校で初めて孤独を感じた。

産まれてからずっとラナがいた僕は一人ぼっちにとてつもなく弱く

て打ちのめされた。

ラナがいなければ話す相手もないんだと気づいた。

休み時間、それぞれ友達は何と歓声を上げて校庭に走っていく、取り残された僕は一人しやがんで砂をいじっていた。誰も話しかけてはこない。

休み時間が永遠のように長く感じる。少しも楽しくはない。やがて、体がほてってきて頭がガンガン痛みだし、ぼくはその場に倒れて起きられなくなってしまった。

“まったく双子っていうのはおかしいものね。”

ママは関心したように、ベッドに並んで寝ている僕たちをみて言った。

“ラナが熱を出すとジルも熱をだす。なんなのかしらねえ。”

僕は再び欠けていたものを取り戻したかのような安心感で包まれていた。

ラナと僕はもともと一つだったんじゃないか？ラナが隣にいること、それは僕の不安や恐れをどれだけ消してくれただろう。

“ラナ、君が休むと僕は遊び相手がいなくなっちゃうんだ。だから同時によくなって同時に学校にいくよね”

ラナは熱にほてった顔を僕に向けていった。

“きつとそうなるわ。私たちいつも同じだったじゃない。”

いつも同じだったじゃない。

そう、いつもラナと同じだった。

食べるものもやることも思春期を迎えて男と女で少しずつ変わってきてても、

根底に流れるものはシェアしあって生きてきた気がする。

ラナが失恋するとなぜか僕も数日後彼女に振られたりして、心の痛みも喜びもわかちあってきた。

ラナは次第にフラに熱中していった。僕は僕でフットボールに夢中になって、

少しずつ男女の差が出てきたけれど、双子独特のテレパシーのようなものは健在で、

僕らはいつも一緒だと家に帰るたび確信しあったものだ。

だから去年、ラナがミスアロハフラになったとき、僕は自分のことより嬉しかった。輝く妹を見て、僕も輝く気がしていた。

ラナ、僕の大切な妹。

強さと情熱

シンディーがCDを取り出してかける。激しいカヒコとちがってゆったりとしたアウアナが流れる。

“カレオーハーノ。”

イズラエルの優しい歌声。

故郷の家と自然をたたえた歌。

カレオハノとは権威と尊敬の声という意味だ。

ラナの優しい表情、ゆったりと動く指先。

フラは一瞬たりとも手が止まることがない。

山、月、風、すべてモーションで意味を表す手話のような踊りだ。ゆるる腰。潮の満ち引きのようにゆったりとした古来からの動き。満足げにそれを眺めるクムフラ。

“私も昔はラナのようにきれいだったのよ”

とお茶目に笑った。

“知っているよ。君は美しかった。今でもあまりかわらないけど”

“まあ、妖精はお世辞も上手なのね。”

“お世辞じゃないさ、美しさは心のありようだからね”

テトはそういつて優しく笑う。人間だったらかなりのプレイボーイに違いない。

“クーホーメー、クーホーメ。”

イズの甘い歌声が続く。ハラウに響く声の主はイスラエル・カマカヴィオレ。

通称イズ。340キロの巨体から出される美しい声で人々を魅了した僕の大好きな歌手だ。

けれど38歳という若さで逝ってしまった。彼もピュアソウルだっただろうか。

ゆったりとしたメロディーのカレオハノは僕とラナの大好きな歌だ。

カレオハノ、そうカレオハノがあなたの名称

私生まれ育った土地、私の故郷、私が愛するふるさと、それはケアウカハ

名高し、それはケアウカハ

ラナは不思議とハワイ島の歌が好きだった。ペレに愛されたフラダンサーだからなのか。

ラナのフラを眺めながら、ジルの頭の中には走馬灯のように昔のラナの姿が浮かびあがった。

思えば、ラナは常に勇敢だった。

ティーンネージャーになった頃、こんなことがあった。

ラナのクラスには色んな国の子が混ざっていて、中には母国から離れたばかりで英語が上手くない子も混ざっていた。日本から来たゆりという子は内気な性格もあつてなかなか馴染めず英語の上達も遅かった。

ラナは何かにつけてゆりをかばっていた。

ある日、クリスという白人の女の子がゆりをからかい出した。

“ ゆり、もう一度言ってみて、なんて言ってるのか分からないわ。あなたってサンキューもまともに言えないのね。日本人ってなんでこんなに英語が下手なのかしら。イライラするわ ”

メインランドの白人主義の地域からハワイにきたばかりのクリスは高飛車なところがあつてクラスでも浮いていた。

ラナがクリスの前に立っていった。

“ クリス、じゃあ、あんたは日本語が話せるっていうの？ 日本語話してみなさいよ。産まれてから英語しか話してないくせにそれができるからってなんでそんなにえばってるのよ。 ”

ラナはきつとクリスを見据えて言う。

“ なんなのよ。ラナ。あんただってイラつくでしょ？ ”

なんだってここはこんなにアジア人がえばっているのよ。白人と同じレベルだと思っているわけ？ 私がいたところではみんなバカにしていたわ。貧相で礼儀を知らない東洋人はアメリカに来る

なつて。”

“もう一度言つて見なさいよ。あんたの肌が白いからつてそれがなんだっていうの。”

“ここはハワイよ。コスモポリタンな島よ。少しこの子より鼻が高いからつてその鼻へし折つてやりたいわ。”

“大体あんたのパパ、どの国の車乗っているのよ。日本の車じゃないの？”

“それを作つた国をバカにするなんてその車に大金払つたあんたのパパもバカつてことじゃない。”

“誰にも生まれてきた国や言葉をバカにされる権利なんてないわ。”

“クリスはきつとにらみつけるとクラスから出て行つた。”

“ラナは隣でおびえているゆりに言う。”

“心配しなくていいのよ。英語なんてそのうち覚えるわ。ステップバイステップ。フラと一緒にね。”

“ゆりがラナにはにかんだ笑顔を見せる”

“サンキュー”

“ちゃんと言えるじゃない。ゆり。私あなたの英語好きよ。マイデИАー。”

“そしてそつとハグをする。”

“ありがとう。ラナ。”

ゆりは日本語でお礼をいった。

“ You are welcome ! 強くなるのよ。ゆり、負けちゃだめよ。”

ゆりは徐々に明るくなり、英語も習得した。

ラナに影響されて始めたフラにすっかりはまり、今ではラナの大切なフラシスターの一人。

2年前日本に戻ってからフラのお教室を開き、ハワイと日本を結ぶ架け橋となっている。

ラナが日本へ行くときはいつもシンディーとラナの世話や各地イベントの世話に走り回ってくれる大切な友人になっていた。

“ ラナはいつも大切なものを間違えたりしない”

ゆりは口癖のようにラナをこう表現する。ラナは知っている。

何が一番大切なのかをいつも知っていて、何かを決めるときその順番は絶対揺るがないの。だから信用できる。

ラナの心意気は幼い頃から大人になるまで変わらなかった。

自分の信念を曲げない、敵を作ることを恐れない。

時には情熱的に時には優しく繰り返されるフラのステップのようにラナはいつだってラナのままだった。

フラに対する熱意も一環していた。

数多くいたフラシスターの中でもラナの熱心さはクムの眼を引いた。特に初めからダンスが上手だったわけでもない。どちらかといえば、

目立たないフラを踊る少女だった。
けれどその熱意はきつと将来この子が中心にいるとクムに確信させるものだった。

思春期になって興味が男の子や勉強やファッションにうつっていく女の子たちの中、
ラナはいつでもフラに対して誠実だった。

“クム、この振りは大地を表現しているならもつと沈んで下から手を上げるべきではないですか？”

少女の時は子供とは思えない指摘の鋭さに驚いたりもした。

美しく成長したラナのフラは神々しいほどだった。
奉納のフラをささげるとき、ラナが踊る前は必ずさーっと通り雨が降ってフラシスターの中でも有名だった。

“次はラナよ、雨が降るからイプにカバーを。”

皆当然のように大切なものやぬれたら困る機材などを大きな木の下に隠す。

ラナがすくつと立つと晴れている空からサーッと雨が降る。
困るほど多くもなく気づかないほど少なくともなく、いつも数十秒清めるように祝福するように雨が降るとさっと止む。

そしてラナが踊りだす。足首と手首に巻かれたマイレのグリーン、
たつぷりと寄せられたひだが美しいタパのパウスカート。
低いシンディーのチャントとイプヘケのリズムに合わせて踏まれる
カホロのステップ。

パウスカートが地面につくほど体勢が低く、ラナのフラの安定感と存在感、下半身のハードな動きと対照的に優雅にながれる指先のモーション。

どれをとっても完璧だった。だから、去年、ミスアロハフラになったとき、誰もが思った。

“ やっぱりラナが。”

と。シンディーも次のクムはラナにと決めていた。

予兆

テトに言われるまでもなくシンディークムにはラナの踊りがペレに愛されていると確信した出来事が何度かあった。

フラシスターとともに奉納フラをするためにハワイ島へ合宿に言った。

ペレは時々フラシスターたちにいたずらをして自分の存在をアピールしたりするので、

オアフに戻ったあとフラシスターたちは

“買ったシエルのネックレスがどこを探してもない。ここに入れたのに。”

とか

“火口にレイを捧げようと思って持っていたら何度投げても自分の手の中に返ってきてしまって、

ペレはこのレイ嫌いなのかしら。代わりに私の髪飾りを風に巻き上げてもって行ったわ。”

など少し不思議な体験を披露しあうのが通例になっていた。

その日、ラナの奉納フラは困難を極めていた。

火口に着いたときはへとへとになるほど風が強く、長い髪を巻き上げるほどで、立っているのがやっとの強風に

“これじゃ踊れないかもしれない”とシンディーも思っていた。

ラナは

“大丈夫。踊れるわ”

というと一人すつと立ち上がる。

何か確信があるように強いまなざし。

この子はやはり違うわ。とクムは神々しいものを見るように見守った。

いつものように雨がさーっと降る。そして風がぴたりとやんだ。

“ペレがラナのフラを見たがっているんだわ。”

シンディーは確信した。

そしてラナが踊りだす。ペレをたたえるカヒコが終わるとまた風が吹き出した。

ラナは一人火口に向かってうなずいている。

“ペレの声が聞こえたの？”

シンディーが聞くと

“いいえ、ただそんな気がただけです”

とラナが笑った。なんて言っていたのかしら。

シンディーには確かにラナがペレと話しているように見えた。

ラナはペレに愛されている。シンディーには少しうらやましいほどだと思った。

“それにしてもラナは美しいな。フラダンサーとして生きてきた回数が多いんだ。”

ラナは生まれてくる前もフラダンサーだった。その前も、その前も、
年期が違うな”

テトがラナのフラに惚れ惚れしながらジルに言った。

“ジル。花がどうして美しいか知っているか？”

ラナを見つめながらジルが答える

“考えたこともないな。”

“心が美しいからさ。”

“花はただ花だからきれいなさ。心がきれいだからただそこに
あ
るだけで美しいんだ。”

美しいものは人の心を動かす。それだけ人はマナに敏感なんだ”

そうか、それならラナは花のようだな。

情熱的に大きく開く八重のハイビスカス。

赤でもなく淡いピンクでもない。真紅の八重のハイビスカス。そこ
ではたと気づく。

ハイビスカスカ、長くは咲かない花だな。

踊るラナのまわりにふわーっと金色の光が見えた気がした。

踊り終わったラナはふーっと長い息を吐いた。そして、一瞬顔をしかめるとこめかみを押さえた。

“ あれ、どうしたのかしら。”

立ちくらみをしたようにふらっ足元が危うい。

“ ラナ？”

心配したシンディーが声をかける。

“ 大丈夫？どうしたの？”

心配をかけまいとすぐに笑顔に戻るラナ。

“ 大丈夫。少し頭痛がするの。カウチを使わせてもらってもいいですか？”

“ もちろん。少し休みなさい。いつも元気なラナがおかしいわね。疲れているのかしら。”

それは少し頭痛というぐらいの顔色ではなかった。どんどん顔色が悪くなっていく。

その様子をみて凍りつくジル。

“ まさか？”

別れと疑問

テトを見るとテトも真剣な表情をしている。

“ 早すぎる。僕たちさっききたばかりだろう？ ”

“ ジル、色んなことのスピードが加速しているのかもしれない。それだけきつと緊急事態なんだ。アースが。 ”

“ ちょっと待ってくれ。せめて両親を呼んでくる ”

ジルはすでもう泣きそうになってクムのうちを飛び出した。

訳もわからない状態の両親を無理やりクムのスタジオに連れて戻ってくる

“ ジル、どうしたっていうの？突然現れて、ラナは少し眠っているだけよ ”

シンディーは血相を変えているジルをびっくりしながら見つめている。

“ テト、ラナはどう？ ”

“ 眠っているよ。 ”

“ なんだっていうのジル？説明して欲しいわ。 ”

ジルの母親は怒ったように言ったあと、テトに眼を留める。

“まあ、メネフネ。私も小さい頃はたまに見えたけれど、大人になつてからは初めて”

テトに会って嬉しそうなママを制してジルは言う。

“ママ、説明は後だ。ラナがもうすぐ逝ってしまう。”

“行くってどこにだい？眠っているじゃないか。”

ジルの父親も突然のことにも訳がわからずにうろつろしている

“とにかくラナを起こそう。具合でも悪いのか？連れて帰ろう。”

ジルの父親がカウチに近づいてラナを優しく起こす。

“ラナ、具合が悪いのか？ラナ？お家で休もう。”

“ラナ、ラナ。帰ろう。”

ママも呼びかける。

“まあ、そんなに急がなくてもほんの少し休んでるだけですよ。皆どうしちゃったのかしら今日は。テトが来たからかしらね”

シンディーがとにかくお茶でも入れましようと言って奥に入る。

“ラナ。ラナ。おきてラナ。”

ジルの母親も引き続き呼びかける。

“ハニー、様子がおかしいわ。こんなに呼んでいるのに起きないなんて。”

ジルの顔色が変わる。テトを見ると

“わかつているだろ”

という顔でジルを見る。

“嫌だ。嫌だ。ラナ。ラナ。”

ジルは取り乱してラナにすがりついた。

“なぜだ、なぜ起きない。”

“ラナが死んでしまった。僕の最愛の妹が。”

ジルの悲鳴がスタジオを包む。

“なんてこと。”

顔を覆って泣き出す両親。お茶を持って入ってきたシンディーはカップを床に落として立ち尽くすんでいる。

“だって、さっきまであんなに元気にフラを踊っていたじゃない。”

騒然となる。それぞれが訳もわからず取り乱している。

“ ラナ、大変だ。悪夢のようだ。 ”

“ ほんとうよ、さっきまで本当に元気に踊っていたのに ”

“ ああ、なんてこと、私より先に娘がこんなことになるなんて。 ”

ラナの母親は泣き崩れてしまった。

テトが混乱を落ち着けようとラナにすがっているジルに話しかける。

“ ジル、落ち着け。ジル。ラナの顔を見てご覧。苦しまずに逝ったほら、ちゃんと見てご覧。お前の自慢の妹だろ。ピュアソウル。死ぬときでさえこんなに美しいんだ。 ”

ラナは微笑みながら眠っているようだった。ジルは涙に滲んで妹の顔がよく見えない。

“ だめだ。ラナ。僕はとても耐えられない。君無しの人生なんて、僕の魂の半分が消えてしまったようじゃないか。 ”

“ 消えたりはしないよ。ジル。ラナは帰っただけだ。またすぐ会える ”

テトが優しくジルに言う。泣きじゃくるジル。

“ 見てご覧、ジル。ラナの魂が行くよ ”

テトがラナの胸に手を当てる。一筋の光がすーっと天に昇っていく。

“ ああ、ラナ。逝かないで。僕たちいつも一緒だったじゃないか。”

ジルがその光にすがろうとする。

“ ジル、泣かないで。またすぐ会えるわ。だっていつも同じでしょ？
きっとそういう風にできているのよ” ジルの頭の中でラナの声が聞
こえた気がした

“ ピュアソウルだ。ジル。”

テトから手渡されたラナのソウルを握りしめて、それを抱きしめる
ようにジルは嗚咽した。

“ どうしてこんなことに。”

来る人すべてが口にしたこの言葉。診察した医師は言った。

“ 脳梗塞ですね。きつと踊っているうちにすでに頭部からかなりの
内出血があったと思われます。”

それで、急にカウチに横になった拍子に大量出血して死に至ったか
と。

頭の遠くでその言葉と両親の嗚咽を聴きながらジルはラナの言葉を
繰り返していた。

“ だっていつも同じだったじゃない。”

“ ジル、またすぐ会えるさ。”

テトがいった。

“ すぐっていつさ。僕も死ぬのか？どうしてさ、アースの機嫌をとるためにどうして僕らが犠牲になるんだ。”

ジルは怒りに燃えた眼でテトを見つめた。

“ それは違う。アースは命をコントロールしたりしない。
俺たちは、死ぬことになっている。ピュアソウルを探しているだけさ。
順番が違う。”

“ じゃあ、誰が決めているんだ？その死をだれが決めているのさ。”

そんなこと。とテトは静かにいった。

“ 自分に決まっているだろ？ピュアソウルは自分でいろんなことを決めてこの世に来ている。”

産まれてくる両親も、出会う人も初めから決まっている。だから絶妙なタイミングでいろんなことが起こる。”

“ 全部が計画どおりってことか？自分で決めた人生をただ計画通り生きて死んでいくのか？”

“ 違う。迷路のように、生きているときに選んだ道で起こることが違ってくる。”

これを選んだらこっちにいく、
コレを選ばなかったらこっちへいくっていう具合に色んなオプションがあるんだ。

でもそのどの道も、結局自分で決めている。色んな道はあるけれど、その道すべてがクリアしたい課題に向かって進んでいる。

早く課題をクリアすれば早く逝くときもある。すべては魂の進化の為。

ピュアソウルはほとんど卒業試験に近い位置に居る。魂のレベルが高ければ若くして死ぬこともある。

他に役割があるからだ。ジル。お前本当にピュアソウルか？ピュアソウルならそういうことを本能で感じていてもいいはずなんだけだな。

テトの疑問は隠しきれないほど大きくなっていた。

“ 知るか。僕はラナと99%同じ遺伝子でも、きつとその1%がピュアソウルかそうでないからの違いんじゃないか？

僕はラナみたいに立派じゃなかった。魂が清らかだと思ったこともない。普通の人間なんだ。”

“ そうなのか？？間違えるってことがあるのかな。”

“ 神様だつて時には間違えるんじゃないのか？

とにかく僕には荷が重過ぎるよ。大切な人に死はつらすぎる。また会える？そんな風に思えるか。”

ジルは苦しそうにいつてうなだれた。

その様子をみてテトは思った。

“ 本当に間違えるってことがあるのか。こんな一大事に。いや一大事だからなのか。

とにかくペレにもう一度あつて確認してこようか。”

誰もが早すぎるラナの死に参っていた。

カイルアはラナの死を悼むようにスコールが降った。

ジルとその家族の絶望にテトは息苦しくなっていた。

少し離れないと死んでしまう。テトは少し混乱していた。こんなに死に執着するピュアソウルがいるのか？

ジルは本当にピュアソウルなのか。

女神ペレ

憔悴しているジルとその家族を置いて、

テトは一人、ペレに会いに行くことにした。

確認しないと、間違いだったら大変なことになる。

ピュアソウルじゃなかったらジルが壊れてしまう。

魂のレベルに応じて背負う課題は違ってくる。

魂のレベルがピュアソウルでなかったらアースを救うなんて荷が勝ちすぎてとても耐えられない。

絶えられない課題を突きつけられたソウルの苦しみは計り知れない。

人間ってのはややこしいな。なんだってあんなに落ち込んだり機嫌が悪くなったりするんだ。

もっと自分をコントロールすればいいだけのことなのに。イケパパルアの性だな。

テトはぶつぶつとそんなことを思う。

人の魂はハワイ語でイケパパルアと呼ばれる痛みや苦しみ、楽しみや喜びを感じるイケパパルアという下着のようなものに包まれて体の中に入っている。

イケパパルアの大きさが大きいとオーラがあるのように表現されて他人への影響力が大きい。

けれど、イケパパールアという感情の領域が余計な不安や苦しみを感
じさせることも事実だ。

妖精は苦しみや不安を感じない。

自分たちで制御できる。悲しみは人間に共感できなければなんの助
けにもならないために残してある。

だからラナが死んだ悲しみはテトにも理解できる。

けれど、それはただ悲しいだけ、苦しんだり、起こってもいないこ
とを心配したり、恐怖を感じたりはしない。

ジルが居ないので移動にはもっと楽な方法を取ることにした。

想う。

なるべく詳しく正確に想う。そこにエネルギーである強いマナが流
れると現実になる。

気づくとテトはペレの洞窟の前に居た。

“ペレ、テトが来たよ。あってくれるかな？”

“何しに来たのよ。”

ペレが面倒臭そうに出て来た。

ご機嫌が悪いらしい。

“ここにきたってことはピュアソウル集めてきたんでしょうね？”

“あと少しなんだよ。”

“じゃあ、なんで戻ってきたのよ。”

アースの機嫌が悪くてイライラするわ。わたし、いつそのこと大きな噴火でもさせて終わりにしたいくらいよ。”

ペレはそういうと真っ赤に燃えた瞳を一瞬ギラットさせた。

“やめて。俺たちの努力が無駄になるじゃん。今ので軽く地震位起きちゃうだろ。”

“なんかいいことないわけ？まったくなんで私が人間に振り回されなくちゃいけないのよ。”

全部消したらアースだって本当は清々するんじゃないのかしら。”

“またまた、想ってもないことを言わないんだよ。”

ペレ。君は怒ると真実を言わなくなるんだから。君が人間を守っているくせに。

愛してやまないんだろう。俺たち妖精が嫉妬するくらいの愛さ。”

テトが言った。

“ふふん。わかったようなこと言うんじゃないわよ。”

ペレはそういつて女神の微笑を見せる。

この人はまったく。誤解されてばかりいるな。

テトはいつも想う。気分屋で情熱的。我侭で奔放。

ペレのイメージはそう見えるだけだ。実際にそんなに人間臭い女神は存在しない。

ペレの魅力の一つ。人間臭さを演じられるところだろうか。

恩に着せるのが大嫌いな女神はいつも減らず口をたたいては自分を悪者にして人間をサポートしている。

“ねえ、偉大なディーバ。教えて。ジルは本当にピュアソウルなのか？”

“テト、何を言い出すかと思ったらそんな初歩的なこと私が間違えるだけでも？”

“そうだよな。でも僕が知っているピュアソウルと違うんだ。

大分未熟な気がして。聖人と呼ばれるような人と違ってもっと人間臭い。おろおろしたり悲しんだり、

大きな不安に打ちひしがれたりしている。さっきもラナの死に耐えられる風でなかった。”

“ラナ！。ラナが死んだの？彼女のフラは最高だったわ。

私によく似た瞳をもつフラダンサー。

ラナのピュアソウルでアースの機嫌もよくなるかしら。しばらくラナの魂を私の側に置いときたいわ。”

ペレは楽しそうにいった。

“ ジルはラナの双子の妹だ。 ”

“ 知っているわ。 ”

“ じゃあ、やっぱりピュアソウル？ ”

“ だから何度も言わせないの。 ジルは今回のミッションの代表ピュアソウルよ ”

“ 代表？？ ”

“ そう、ピュアソウルに進化するピュアソウル。 ”

進化する瞬間の巨大なエネルギーをピュアソウルの結晶に注いでアースに持っていくのよ。 ”

“ ピュアソウルに進化する瞬間のエネルギー。 ”

ちょっと待ってくれ。

“ じゃあ、やっぱり今はピュアソウルじゃないんじゃないか。 ”

“ 今この瞬間はね。 ピュアソウルに進化する課題を持った魂なのよ。貴重でしょ？ ”

“ 現世で進化できなかったら？ ”

“ だからあなたを呼んだんじゃない。

ジルがおじいさんになるときに進化したんじゃないのよ。

なるべく早くいろんなことに気づいてピュアソウルへの課題をクリアしないと。時間がないわ。 ”

テトは想った。ピュアソウルに進化する魂を見られるなんて光栄だ。

けれどそんな瞬間に上手いこと立ち会えるのは数百年に1度。なぜジルが選ばれたんだ。

“ 可能性が高い順から選んだのよ。

しつかりやんなさい。

アースが人間の滅亡を決めたらさびしいじゃないの。

問題児ほどかわいっていうでしょ？ 魂の進化を応援するのは私の趣味よ。

全部が高尚な魂じゃ退屈だもの。 ”

と言ってペレは笑った。

人間に思い入れたっぷりの女神は妖艶な美しさに溢れている。

アース早まらないで。

テトはそう想わずにはいられない。

人間を愛している女神とばかり妖精のために。

人間はそう悪い生き物じゃないんだって証明してみせるから。

“ 所謂いえばテト。あんたラカの水取りにいくんですって？ ”

“ そうだよ。これが終わったら。女神様は何でもお見通しなんだな。 ”

“ 違うわ。興味があっただけよ。テト、簡単にラカの水なんて手に入らないわよ。いくら妖精でも無事には帰れないわ。 ”

“ 仕方ないさ。愛する人が望むから。

待ってれば会えるっていつても人って待つのが苦手だろ？
目の前から消えた瞬間にもうそれを恋しがっている。

セイラが泣いて頼むんだ。物事の理屈なんてふつとぶさ。ラカの水を取ってくればセイラはまたハッピーになるってわけ。 ”

“ セイラ。 ”

ペレは少し遠い眼をする。

“ 人間と妖精の子供。タブーを犯した妖精の子供 ”

“ ペレ、そんな風に言わないでくれ。セイラは俺の愛する人 ”

“セイラに罪はないわ。だから私も見逃している。けれど、妖精が悪魔と取引するなんてあつてはならないこと。一度清めなくてはと思っていたわ”

” 清める？ “

“ そうよ。テト。ラカの水で、リリーとリアンを蘇らせなさい。あの聖水で悪魔もリリーの魂から離れるわ。 ”

“ 恋人と女神の命令じゃ、俺はなんとしてもやり遂げないといけない。 ”

テトは覚悟を決めたように言った。

“ そうだ、ジルを連れていきなさい。そうしたら助けになるわ。 ”

“ 人間が助けになるのか？ ”

テトが不思議そうにいった。

“ 魔物の思うツボじゃないか？ ”

“ そんなことないわ。きつと助けになるから連れていきなさい ”

ペレは命令口調でいった。妖精は女神に逆らわない。

“ 女神様のご忠告、胸に刻みます ”

“ ははは。なにかあつたらヒイア力と呼びなさい。妖精ぐらいの助けならあの子でもできるはずよ ”

“ありがとうございます。”

テトはうやうやしくお辞儀をする。

“あんたもやれば礼儀正しくできるんじゃない。女神に敬意を払うなら毎回その態度で来なさいよ。”

ペレが冗談めかしている。

ヒイアカとはペレの妹。

奔放な姉の使いをさせられているこの従順な妹はペレとは対照的に穏やかで優しい気性の持ち主。

ペレの命令とあればテトが呼べば必ず助けてくれるだろう。

“ヒイアカに会えるだけで嬉しいよ”

とテトが言っているとペレは

“私よりヒイアカのほうが美しいなんていったら溶岩の中に放り込むわよ”

と怒ってみせた。

“いいえ、あなたより美しいディーバは居ません。ペレ。最高の女神”

テトがうやうやしくお辞儀をするとそれでいいというようにうなず

いてみせた。

まったくチャーミングな方だとテトは思う。
人間にあの冗談はきつすぎるけどね。

人間はペレの冗談を全部間に受けて恐れおののいてしまった。
だからペレは悪魔のように恐ろしい神として誤解されている。

悪魔が神？魂の違いすぎるこの二つを比べるなんてまったく人間の
想像力って貧困だ。テトは笑ってしまう。

ヒイアカ

ジルは夕暮れのカイルアビーチに居た。

透明度の高い青い海にうつすらとオレンジの光が入り、銀色に輝いている。

“どこに行ってたんだい？テト、全部終わったよ。”

ジルは憔悴しきったように言った。ラナが死んでしまった絶望に満ちている。

“そうか。”

テトは息苦しくなってやっと応える。たまらないな。人間の絶望は。ペレのもとに行っていた数日の間にお別れの儀式は済ませたようだった。

“僕は妹を失った上、妖精にも見捨てられたのかと思ったよ”

“くだらない心配ばかりするなよ”

テトは言った。なんてネガティブなんだ。すべての不幸は不安から始まるというのに。

テトは呆れてしまう。

“ ラナは海が好きだったから、海にも返してあげるんだ。大好きだったカイルアビーチに ”

“ そうか、そうだな。好きにしたらいい。 ”

テトは思った。気の済むようにしたらいい。
たとえそれがラナの魂が抜けたあとのただの灰だったとしても人間にとっては大事な儀式なんだろう。
ラナにもその気持ちは通じるだろうから。

ジルは大切そうにラナの灰が入った小瓶を取り出して海に流した。

“ ラナ、また会おう。僕の魂が君に追いついたらきつとまた会えるね ”

“ 最後に一緒にいれてよかったな。ジル。 ”

“ ああ、ラナのフラも見れた。でも、突然いなくなるなんて残酷だな。 ”

“ そうだな。でも、勘違いするな。死は呪いじゃない。
どちらかといえば祝福だ。ラナは苦しまずに人間を卒業した。祝ってもいいくらいだ。 ”

テトはそういつて励ました。

ジルは、そんなテトを眺めながらため息を漏らした。

“で、テト、僕はピュアソウルじゃなかっただろ？一人の死でこんなにダメージを受ける人間がピュアソウルな訳がない。”

“そうだな。まだピュアソウルじゃない。安心しろ。今は悲しんでもいいぞ。普通の人間だったんだから。”

“そうか。よかった。僕は、泣きたいんだ。ただラナが居ない悲しみを吐き出したい”

テトはそつとしておくことにした。なによりジルの絶望が身に伝わる。

人間ってやつは本当に弱くてやつかいだな。

けれど優しい妖精はそつとビーチに息を吹きかける。

“夜の風がジルに優しくなるように。悲しみが小さくなるように”

と呪文をかけて。

カイルアビーチを吹き抜ける風はジルの体にまといつくように流れていった。

悲しみが海に溶けるように。

風に吹かれるたびにジルは“また会える”という言葉を手ではなく心から信じられる気がした。

また会える。同じなのだから。そうだな。きっと会えるんだ。今だけだ、さびしいのは今だけ。ジルは涙をぬぐった。

“そこにいるのかラナ。神にでもなったのかい？それとも天使？テトのように妖精になったのか？僕もそこにいけるだろうか。ラナ。君が恋しいよ。”

ラナの声が聞こえないかと思ったが、すっかり暗くなったカイルアの美しいビーチにはただ波の音だけが響いていた。

翌朝目覚めるとテトの前にヒイアカが立っていた。

“ヒイアカ。”

驚いて美しい女神に抱きつくテト。

テトにとっては巨大なヒイアカ。気さくな女神はそつと小さな妖精に口付けをする。

“久しぶりね。テト。お姉さまの使いできたわ。”

ヒイアカのどこかゆったりした心地よい話し方。

おっとりした性格がそうさせるのかヒイアカは側にいるとゆったりした気持ちになる女神だった。

“テト、カネの水を先に取りにいけて、お姉さまが言うのよ。”

“でも、ピュアソウルの方が先じゃないのか？”

“そうよねえ。私もそう思ったんだけど、

お姉さまは、カネの水を取りにいく途中でジルがピュアソウルにな

るかもしれないって言うの。テトもそう思う??”

“ どうか。ピュアソウルになる瞬間に立ち会ったことがないんだ。何をきっかけてピュアソウルに変わるのか検討もつかない。なにか試練がいるのかな”

“ わからないわ。お姉さまがヒイアカにあなたたちを力ネの水の洞窟まで案内しなさいっておっしゃるから私来たのよ。一緒に行く?”

おっとりした様子のヒイアカはテトが行かないといったらそう、と言って帰ってしまいそうだ。

“ 一緒に行ってくれるの? ヒイアカ。”

“ そうね、入り口までって言われているけどそれでいい? テトはなんであんな危険な場所に行くの? 妖精だって無事に帰れないわ”

ヒイアカが心配そうに言う。

“ あら、しかもテト。あなた羽が傷ついているじゃないの?”

珍しいものを見たかのようにヒイアカがテトの羽をしげしげと眺める。

“ なんでこんなふうに切り取ったの?”

“ 耳が聞こえない老人の鼓膜に使ったんだ。”

“ なるほどねえ。痛かったでしょ? 私が治してあげるわ。”

そういうとヒイアカは眼を閉じて何かを念じ、ふつとテトの羽に息を吹きかけた。

見る見るうちに羽の傷がふさがっていく。

“うわ、ヒイアカ。すごいな。治ったよ。”

テトは元気に飛び回りながら嬉しくてクルクル回った。七色の光の粉が周囲に舞い散る。

“結構痛かったんだ。助かったよ。”

“ふふふ。女神って意外と役にたつのよ。妖精はすぐにそれを忘れちゃうのね。”

“で、どうしてカネの水をとりに行くんだっけ？”

思い出したようにヒイアカがおつとりという。言いたくなければ言わなくてもいいのよとその眼が言っている。

“セイラのお母さん呼び戻すんだ。カネの水で。それがセイラの望みなんだ。”

“そうなの。あなたは愛する人の望みをかなえたいのね？”

“そう、愛する人の望みだからかなえてあげたい。それだけ”

“ふふふ。ロマンね。”

ヒイアカが楽しそうに笑う。

“ そうだな。 ロマンだ。 ”

テトも楽しそうだ。

愛している人がいるっていいだけですばらしいことだよ。

恋は世界を一瞬で変えてしまうんだ。

テトはピンク色の光を放ちながら飛び回った。

“ まあ、恋の色ね。 ”

ヒイアカがまた楽しそうに笑う。

“ そう、恋の光だろ。 世界が変わる魔法の色さ ”

“ カネの水をとってセイラの家族を戻すのさ ”

“ ふふふ。 楽しみね。 ”

“ ああ、ヒイアカにも会って欲しいよ。 セイラは特別なんだ。 ”

ヒイアカとテトが楽しそうに笑うのを聞いて
ジルが起きてきた。

“ ジル、元気をだして。 カネの水を取りに行こう。 大丈夫。 僕らにはディーバヒイアカがついてるんだから ”

突然現れたヒイアカにジルがびっくりする

“女神様なのですか？”

ジルが訪ねる。

“ペレの妹のヒイアカだ。優しく美しいディーバだよ”

テトが紹介する。

“一緒にカネの水がある場所まで行ってくれっていうんだ。”

女神。

ジルが出会った二人目の女神。

ペレの激しさとは正反対のおっとりとした美女で全てを許してくれ
そんな慈悲深い目はやはり人間を超越していた。

“カネの水？何の話だい？”

“カネの水さ、それを飲むと命が再び蘇るんだ。”

“なんだって！ラナの命も蘇るのかい？”

顔を見合わせるヒイアカとテト。

“そっか、そうだな。蘇るな。なんだ、そっかラナにも使えばいい
んだ”

どうして気づかなかったんだろうとおかしそうに笑うテト。

“ ラナが蘇る ”

沈んでいた心が再び活気を取りもどし、力がみなぎってくるジル。希望が体を駆け巡るのが分かる。

テトがおいしそうに口をもぐもぐした。

散々ジルの絶望で苦しめられたお返しだ。存分に味わった。

ヒイアカがそんなテトを面白そうに見ている。

“ そんなにおいしいのテト？ ”

とおっとりという。

“ ヒイアカも食べてみればいいのに ”
という

“ ふふふ。 ”

とヒイアカは楽しそうに笑った。一瞬で部屋が希望で溢れかえった。

“ よし行こう。カネの水を取りに！ ”

“ 巨人も魔物も怖くないぞー！ ”

テトが言う。

“ 巨人？魔物？”

ジルにはなんのことかわからない。

“ 気にしない。気にしない。先のことは気にしない”

ヒアカが歌うように楽しそうに言う。

今が楽しいなら心配するのはよそう。せつかくの楽しみが消えてしまうわ。

二人に引きづられるようにジルも旅立った。

そうか、僕には女神と妖精がついている。なにが怖いものか。自分に言い聞かせながら。

入り口

太陽が昇る方向へ歩くのよ。

ヒイアカがいうのでそれに従って歩く。

ヒイアカは呼べば姿を現すが色んな場所をいたりきたりしているらしく、

現れたり消えたり、突然前を歩いていたりを繰り返している。

“まったく忙しい人だな。ペレがものすごくたくさんの用事をヒイアカに言いつけるんだ。”

とテトがおかしそうにいった。

カネの水のある洞窟へは歩いてしかいけないらしい。

森に入ってから、ここは本当にハワイなのか？と思うような見覚えのない道が続いている。

“ハワイにこんな道あったっけ？”

ジルが聞くと

“大昔からあったさ。人が歩かないだけだとテトが答えた。”

“誰と一緒にいると思っているんだ？女神だぞ”

テトがおかしそうに笑った。

“ヒイアカ、どこへ行くの？”

“ヒイアカ、どうして人間といえるの？”

“ヒイアカ、ペレのお使い？”

女神ヒイアカは妖精たちに人気があるらしい。

ひっきりなしにどこからともなく現れてはヒイアカに挨拶をしてくそのたびにヒイアカは

“カネの水をとりね。”とか

“お姉さまのお使いよ”とか丁寧に答える。

そして呼ばれて返事をしてはまた消える。本当に忙しそうだ。

色とりどりの妖精たちがそれぞれ美しいのでジルは楽しかった。

女の子の形をした妖精もいた。

どの妖精も端正な顔立ちで美しかったが、アロハを着ているのはテトだけだ。

“テト、アロハシャツきている妖精って君だけだな”

“そうだな。みんな服に興味がないのかいつも同じようはふわふわしたものを着ている。”

妖精って感じだろ？俺は人間の服に興味があるんだ“

“へえ。スーツも似合ってたもんな。”

ジルの褒め言葉にテトが嬉しそうに笑った。

一通り妖精たちが挨拶にきたのか、しばらくするとやっと静かになった。

“一休みしましょう”

ヒイアカがいつのまにか現れて木の根元に腰掛けている。

“どれぐらい歩いたかな？”

“そうねえ。ざっと二十時間ぐらい”

“二十時間！僕全然疲れてないよ”

ジルが驚いていった。人間が二十時間も休みなく歩いて平気にいるなんて。

“ヒイアカがずっとマナを送り続けていたからね。でも体は疲れているはずだからちゃんと休まないと壊れちゃうよ”

テトが言った。

“そうね、食事もとらないといけないわ。”

女神が木の根元に腰掛けるのを、待っていたかのように、フルーツ

や水、さまざまな野菜が
目の前に置かれた。メネフネの奉納らしい。

“ ありがとう。みんな ”

ヒイアカはにつこりして、

“ さあ、いただきましょうか。 ”

とテトとジルに声をかけた。

“ コーヒーないかな ”

とテトが言った。

“ ないな ”

ジルは即答した。

“ 森の中にはコーヒーはないか。 ”

とテトは諦めたように前にあるフルーツに手を伸ばした。

ジルもそつと口に運んでみる。妖精が持ってきた食事は一口食べる
たびにエネルギーが沸くような不思議な食べ物だった。

マナがいつぱい入っているようだった

“ 女神と食事ができるなんてまったく光栄だな ”

テトはヒイアカにうやうやしく声をかけた。

正確にはヒイアカは食事の間も消えたり現れたりを繰り返していて
何も口にはいかなかったけれど、

“そうね。久しぶりにゆつたりと食事をしたわ”

と本当にのんびりしたかのように言った。

テトはそれを聞いておかしそうに笑った。

“いつもはもっと忙しいんだね”

“ふふふ。そうなのよ。お姉さまのお気に入って忙しいのよね”

とヒイアカもおかしそうに言った。

“ペレはすぐに怒るしなあ。ヒイアカも大変だよな”

“ふふふ。でも本当は優しい人よ。いろいろ人間には誤解されているけれど。”

“そうだな、ヒイアカの恋人を殺したとか、嫉妬に狂って世界を焼き払ったとか散々ないわれようだよな”

“ふふふ。女神は人間に理解されようなんて思わないもの。お姉さまの力を畏怖して自然を敬うハワイの人たちはある意味賢いわ。”

“そうだな。バランスを考えずどんどんビルを建てちゃう都会の人間よりは賢明なのは確かだ”

“命のバランスもね。子供を愛さない動物に未来はないわ。希望そのものだもの。命の希望はそこにあるだけで世界を清めるのに、子供が減っていることに無関心なのは人間だけだわ。”

動物としての本能まで失ってしまったのかしら。アースの決断に人間は気づきもせずに滅びるかもしれないわ。”

ヒイアカが悲しそうに言った。人間の鈍感さに心優しい女神や妖精が心を痛めている。

“とにかく出発しよう”

再び歩きだしたが、ジルは頭の中で思い返した女神の言葉に強烈な危機感を持った。

アースが人間の絶滅を決めたという思い事実。

虐殺するわけでも、災害を起こすわけでもなく、ただ子供がいなくなっていくという現実。

人は気づかないかもしれない。

なんだか最近子供が少ないね、なんて会話に登ったときはすでに手遅れで、

人口の減少は止まらない。子供大きくなって大人になるってこういうんな基本的なことすら人間はわからず、

子供は手もかかるし、お金もかかるし面倒だなんて平気で言ったりするんだ。テトの言い方を借りれば長い時間で考えることができない人間らしい考え方だ。

ただ黙々と山道を歩いているからだろうか、ジルはなんだかしみじみと色々なことを思った。

“さあ、目の前のことに意識を集中しろ”

テトが言った。ジルの頭のなかが読めるようだ。

“あれこれ考えてもお前の能力なんてそれほどない。

目の前のことを精一杯やる分ぐらいしかない。力を分散するな。今はカネの水だ。

物事は一つずつに100%のマナを注げば成功するようにできている。”

色々と思い悩んでいるのを吹き消すようにテトはジルに何度も言った。

“集中しろ。カネの水に。そんなに簡単じゃないんだ。全力で行こう。”

珍しくテトも緊張しているようだった。

妖精といえど、無傷では帰れない。そんなに恐ろしい洞窟なのだろうか。

ジルは少し不安になったが、あわてて思った、集中しろ、起こってもないことを考えるのはよせ。

いいイメージにエネルギーを流すんだ。きっと成功する。呪文のように自分に言い聞かせた。

“あそこが洞窟の入り口なのよ。”

消えていたヒイアカがふつとまた現れると前方の大きな岩盤を指差していた。

入り口などどこにもない、巨大な岩の壁だった。

“ 入り口。。。 ”
ジルがつぶやく。

“ どこから入るんでしょうか？ ”

ヒイアカに訪ねる。

“ 入り口を強く思い描くと現実になるの。そっから入って。集中するのよ。 ”

“ 意念でドアを作るのか。よしジル、具体的に思い描け、あのあたりから、ここまでぽっかり入り口が空いている洞窟を想像しろ。 ”

テト自身もそれを強く思っているように目を閉じる。ジルは必死で岩の壁を見ながら入り口を想像した。ここからここまでがぽっかりと。。。

すると、岩壁がぐらんとゆれたように見えて、ぼわーっと黒い入り口が浮かびあがってきた。

“ いいぞ、はつきり見えるまでもっと強く想うんだ。 ”

テトが励ます。

“ 入り口はある。確実にそこにある。 ”
ジルがより強く想う。

“ よし、入ろう。 ”
テトが目を開けた。ジルも目を開けると、そこにはしっかりと大きな入り口が口をあけていた。

“私はここでねー。頑張つて。魔物に勝つのよー。
ヒイア力は歌うように言つて消えた。”

“ありがとう。ヒイア力。”
その姿に手を振るとテトは元気に言った。

巨人の声

“よし、行こうジル。”

テトに押されるように中に入ると、入り口はまたすつと塞がった。

出れるかな。と一瞬不安になる。

途端、黒い煙が向こうから襲ってくる。

テトが叫ぶ。

“ジル、不安を消せ。自分の中の不安を消すんだ。ここではお前の不安が形になって攻めてくる。それが魔物だ。”

ジルは必死に打ち消す。大丈夫。大丈夫。きっと出れる。

すると黒い煙はすつと消えた。

“人間にとっては大変な場所なんだ。一瞬たりとも不安を感じるな。感じたら必死に打ち消せ。”

死の恐怖が襲ってきたとしてもだ。もし、死の恐怖を感じてそれを不安に想ったら一瞬でやられるぞ。”

テトが言った。

“待ってくれ。人間には無理じゃないか。怖いものは怖い。”

“大丈夫だ。ジル。カイからホオポノポノを教わっただろう？”

常に記憶をゼロにしろ。不安は記憶から来る場合が多い。潜在意識をゼロの状態にして自分をクリーニングし続ける。そして、愛のエナジーで満たしておくんだ。

ジルは必死に繰り返し

I love you I love you

すべて上手くいく。

自分の中をクリーニング。心をゼロの状態に。なんども繰り返しすることでだんだんと上手く意識できるようになってくる。

“大丈夫。ペレが指示した。お前は選ばれたソウル。きっと打ち勝てる”

テトが励ます。妖精の陽気さが少しうらめしかった。

はじめに説明しておいてくれ。

“初めから知っていたらなにか変わるのか？心の準備なんてすると不安の種をまくだけだろ？”

テトがおかしそうにいった。

“やるしかない時のほうが多い。目の前のことに集中しろ。”

テトは声をかけ続ける。実際、テトに話しかけていてもらわないとすぐに逃げ出したくなるような場所だった。

“魔物を作るのはおまえ自身だ。忘れるな。”

テトはジルを励まし続けた。

“明かりを”

テトは強く念じて通路に明かりを灯した。

“弱いけど仕方ない。俺も色々意識を分散しないといけないから”
とテトは言った。想い続けることは容易くない。

“大丈夫、絶対に大丈夫”

ジルは声にだして言い続ける。

“絶対に大丈夫。”

“絶対に大丈夫。大丈夫……”

“そうかな。本当に大丈夫か？”

不気味な声がする。

“惑わされるな。巨人の声だ。”

テトが激を飛ばす。

“お前はここに、閉じ込められ、食べるものも飲むものもなく、誰にも見つからずに死ぬんだ”

あざ笑うような声だ。一瞬、ジルが恐怖を感じる。ここで餓死する自分。

前方から黒い煙がものすごい勢いでジルを包む。

“テト、”

“ジル、声にだせ。お前は絶対大丈夫だ。”

“大丈夫だ。ここからカネの水をもらってラナを呼び戻す。”

念じるようにジルが言う。何度も、何度も。

黒い影が薄くなってジルから離れた。

“油断するな。巨人は色々しかけてくる。”

テトが言ったようにしばらく行くとまた声がする。

“人間の絶滅は決定だ。人間ごとにき覆せるものか。”

“お前が来る場所ではない。お前が何をしたところで、人間は消滅する”

巨人の声はひっきりなしにジルを責めてくる。

自分がちっばけな自分一人が人間を救えるのかと。

“ お前ごときにアースが救えるか？たとえ救って何になる？どうせお前はあと数十年の命。

アースが人間を絶滅させたってお前に関係あるのか？人間がいないほうがアースは幸せかもしれないぞ。”

巨人の声がこだまする。

“ 耳を貸すな。クリーニングしろ。すぐに心をゼロの状態にするんだ。心の中の間について話しかけてくるんだ。”

“ 僕の愛するインナーチャイルド。僕が守る。心を愛のエネルギーで満たす。今はカネの水のことだけを考える。”

“ いいぞ、その調子だ。”

テトが励ます。

巨人がついに一際大きな声で呼びかけた。

“ これを成功させて何になる？カネの水を取ってラナが蘇ってもテトは死ぬぞ”

“ なんだって？”

思わず大きな声で反応するジル。

“ テトは知っている。命をコントロールする水を取りにきた妖精はその命を差し出すことになっている。命の量をコントロールする。それがルールだ。”

“ 本当なのか？ ”

ジルの中で驚きと不安が交差する。

“ 耳を貸すな。”

テトが言う。

“ 本当なのかテト？ カネの水を得たらテトは死ぬのか？ ”

“ ああ、引き換えだ。命の量はバランスをとらなくてはいけない。”

“ 聞いてないぞ、リリーをよみがえらせたって君が死んだら意味ないじゃないか。”

“ 意味？ 意味なんて必要か？ セイラが望んだことだ。”

“ セイラも君が死ぬなんて知らないはずだ。”

“ 僕は死など恐れない。家に帰るだけだ。”

“ 違う。セイラは半分人間だ。そんな風に考えられないよ”

ジルが必死に言う。黒い煙が前方からものすごい勢いでジルに向かってくる。

“ 気にするなジル。 集中するんだ。 命を差し出さないとカネの水はもらえない。

それがルールだ。 僕はまた生まれてくる。 いいか、カネの水をもつたら急いで帰れ。 あとはヒイアカが教えてくれる”

テトは言った。

“ 嫌だ。 テトを失って帰るなんて絶対に嫌だ。 ”

変化

ジルはきつぱりといった。

“セイラが悲しむ。”

テトの目に初めて悲しげな影が浮かんだ。

“セイラは悲しむか？”

妖精のテトに初めて迷いが浮かんだ。

“ああ、悲しむ。君は帰らなくてはいけない。”

ジルは言った。そしてきつぱりと思った。不思議と迷いや恐怖はなかった。

“僕の命を使おう。”

家に帰るだけなんだろ？

そしたら蘇らせなくてもラナに会える。

君の恋人はまだこの世にいるんだ。テトは残ってセイラの側にいらなくてはいけない”

ジルは覚悟を決めたように大きく息をした。

ジルの体が大きくなったようにテトには見えた。

ジルの体の中からじわりじわりと金色の光が滲み出てくる。
やがて金色の光はジルの体中を包み込み大きく輝いた。

“ 僕の命をここに捧げる。 もって行くがいい。 カネの水をテトのも
とへ ”

強く、強く念じる。 やがてジルの金色に包まれた体から白い光が浮
かび上がり、
全体を包むように光の強さを増していく。 テトも目を開けてられな
いくらいのまぶしい光が洞窟を明るく照らす。

どんどん光は大きくなる。 太陽を直視したかのような大きな光だ。

“ ああ、ペレが言っていたのはこのエネルギーか。

ジルがピュアソウルに変わっていく。
”

その光はテトが持っていたピュアソウルの結晶にどんどん吸い込ま
れていく。

テトの手から離れたピュアソウルの結晶は宙に浮かびくるくる周り
ながら一つになる。

ジルの体から放たれた光を吸ってどんどん大きくなる。
やがて洞窟いっぱいぐらいの球状になったピュアソウルの集合体は
まるで小さな太陽のように光を吸いきって中に浮かんだ。

“ピュアソウルに変化するときのエネルギーってこのことか。”

テトがつぶやいた。アースを癒すピュアソウルエネルギー体。

ぼわんぼわんと浮かびながら漂う光の玉はゆったりと回転していた。

なんて幻想的な光景なんだろう。

洞窟全体がピュアソウルのエネルギーで清められたように清々しい空
気になっている。

“僕の命と引き換えにカネの水を”

ジルが決意したようにもう一度言ったとき、

周りの洞窟が秒速で後ろにさーっと流れた。瞬間移動したようにテ
トとジルは巨人の前にいた。

どこから現れたのかと思うほど洞窟に不具合大きさの男が背中を丸

めるように岩に腰掛けている。

座っていないと動けないくらい頭は天井すれすれだ。あごはしゃくれ、髪はぼさぼさで、ごつごつして手をさすりながら低い声でテトとジルに話しかけた。

“カネの水が欲しいのか？”

のそーっとした鈍い声は長い間誰とも話していなかったようだった

。巨人は退屈そうにそういった。何万年もここにいたのだろうか。日の光になれていないのか、ピュアソウルのエナジー体をまぶしうに見ている。

“神を連れてきたのか？”

巨人がつぶやいた。

“いや、ピュアソウルだ。ヒイアカに導かれてきた。”

“なぜ、カネの水がいるんだ。女神に案内させてまで。”

暗闇の中に慣れていた巨人が自分のいる洞窟が明るく浮かび上がっているのもめずらしそうにあたりを見回している。

“こんな来客は久しぶりだ。ここは水以外なんにもないんだ。退屈だ。”

巨人はテトとジルを歓迎しているように見えた。

それほど広くない洞窟は巨人がそこに座れるだけのスペースをやつと確保したように四面を厚い岩盤に囲まれ、牢屋のようだった。陶器の皿のような大木を切り抜いたような器が中央にあつて、そこに岩盤をつたって水がぽたぽたと落ちている。どうやらこれがカネの水らしい。

“カネの水を少しもらいにきた。蘇らせたい人がいるんだ”

テトが言った。

“妖精が生に執着するのか？”

“いや、ただ愛する人が望むから。”

テトが答えた。

“愛か、ロマンだな。”

ふふつと巨人が笑ったように見えた。

“人間に恋したのか？妖精が”

巨人はおかしそうに言った。

“素敵な子なんだ。”

とテトが答えた。

“お前もか？”

巨人が突然ジルをぎろつとにらんでいった。

“そうです。妹のラナを蘇らせたいのです。”

“自分の意思で帰ったピュアソウルをまた呼び出すのか？”

巨人は不思議そうに言った。洞窟の中にも色々なことがわかるらしい。

“そう思ってここまでできました。けれど、命を差し出さなくてはもらえないと分かった。

ぼくは僕の命を使います。僕がラナの方へいくことにしました。テトは恋人の側にいなくてはいけません。”

ジルは巨人をまっすぐ見据えていった。

“ジル。”

テトはジルの進化をまぶしそうに見つめる。見事なピュアソウルに変身したジルは神々しいほどだった。

巨人はしばらく考えているようだった。

“ いいさ。少しぐらい分けてやる。”

巨人はひょうたんのような形の水筒に取り出した。

巨人の横にはぼたん、ぼたん、と岩場から水滴が落ちてたまったカネの水を、

巨人は自分の手のひらをジョウロのように泉の中に沈め、器用にひょうたんの中に水を入れると、栓をして差し出した。

“ ここまで誰かが来たのは久しぶりだ。僕も退屈しのぎになったよ。”

ジルが拍子抜けしてそれを受け取る。

“ 僕の命はいらないのか？”

“ そうだな。本当はそういうルールなんだけど、ピュアソウルに変化するところなんてめったに見れないし、

僕が光を見たのは数百年ぶりだ。あのエナジー体はものすごくきれいだし、

久しぶりに洞窟が明るくなって楽しかった。退屈しのぎになったよ。”

“ といって巨人はフオーフオーフオーと笑った。

久しぶりに楽しかったから、特別にやるよ。巨人はそういった。

“ ペレも見逃してくれると思うよ。”

ジルとテトは顔を見合わせる。

“なんだよ、もしかしてペレが作ったルールかよ。
テトが吹き出した。”

“そうさ、ペレはたくさんのルールを作った。それで命のバランスが保たれている。
でもまあ、一つぐらい狂ってもペレも何も言わないさ。どうせみんないずれ死ぬ。少しずれたただだ。”

巨人はおかしそうに言って、もう一度フォーツフォツフォオと笑った。

ジルは神妙な面持ちでカネの水を受け取った。

“まったくペレも人騒がせだな。”

とテトは言ってにやつと笑った。

“ジルがピュアソウルになるための仕掛けか。”

神々はとことん人間に優しい。いつでも試練とともにチャンスを用意している。

なんのことだかわからないがジルは自分が成長しているのを感じた。
。魂が軽く、わくわくする希望に満ちている。
表にでるとジルはつぶやいた。

“ はあ、世界はこんなに美しかったかな。 ”

光の美しさ、遠くに広がる青い海。手前を覆いつくす濃いグリーン。

“ そうさ、気づけば世界はいつも美しい。

人間はないものねだりをしながら、アレが足りない、コレが足りないっていつも文句ばかりいうけどさ、

手に入れているものを見つめなおせばそのすばらしさにため息がでるさ。

ないものより持っているものを見つめて生きれば幸せはそこにある。天国も地獄も、心のありようだからな。自分が今手に入れている幸せを見つめれば、

そこが天国になる。気づけば、毎朝空が青いというだけで感動して泣けてくるさ。 ”

テトが言った。 そうだな。 まったく外の世界は美しかった。

“ 僕は、今まで何を見てきたのかな。 側にあるものは近すぎて見えないのかな。 ”

ジルは心から思った。 今あるものに感謝して生きればその瞬間そこが天国になる。

“ さあ、このピュアソウルのエネルギー体をアースに奉納しにいかなくちゃ。 ”

テトが言った。

“ ジル、お前と一緒に行って俺は嬉しいよ。お前いやつだな ”

“ ははは。コーヒーくれるからだろ？ ”

アース

“まずはペレのもとに。”

お前の寿命が少し縮むけど、

まあ、

さつき失くしていたかも知れない命だ、

気にするな。我慢してくれ。時間がない”

テトはそういつて、意識を集中しだした。

体がばらばらになってまったくついたような不思議な感覚がジルを襲う。

“人間に2度もコレを使うのは初めてだ。大丈夫か？”

テトが心配そうにジルに言った。

“大丈夫だ。くらくらするけれど。”

ジルは少し頭を振って、段々しっかりしてきた意識を取り戻した。

“何年短くなったのかな？”

ジルがテトに訪ねた。

“細かいことは気にするな。”

人間は100%死ぬ。”

テトは取り合わない。

気づくと見覚えのあるペレの洞窟だった。

“ペレ、テトとジルが来たよ。”

ぎーっと扉が開いてペレが現れた。

ペレが正装をしている。

輝く赤のドレス頭にはマイレのハクをかぶっている。

きれいに整えられた黒髪を後ろにたらし、静かに前に歩み出て来た。

ラナ。

一瞬ラナの姿とオーバーラップする。

“アースにピュアソウルを奉納する。”

ペレが畏まったように言った。どうやら荘厳な儀式が始まるらしい。

“アースの決定を覆すお願いだ。何が起きるかは分からない。”

女神ペレでも力が及ばないことがあるのだろうか。

ジルとテトにも緊張が走る。

“ヒアカ、ここに来て、この二人を清めよ。”

ヒアカが美しい白のドレスで現れた。姉と同じくマイレのハクをつけている。

“はい、お姉さま。”

そういつて、テトとジルに祈りを唱えながら聖水をかけた。自分のマイレのハクから一枚お葉を抜くとふつと息を吹きかけてレイに替えた。

それをジルの首から提げる。テトには小さなハクを作って頭にかぶせた。

“こちらへきてここに座りなさい。まずは命をつかさどる偉大な神、カネを呼びアースにこのエナジーを運んでもらうわ”

ペレがそういつて、ジルとテトを自分の後ろに控えさせた。そしてピュアソウルのエナジー体を自分の前に置くと祈りだした。

ハワイ語のチャントがしばらく続いた。

“偉大な創造神、カネ。私たちの望みを聞き届けたまえ。

ピュアソウルをアースに捧げます。アースに奉納してくださいませよう。”

ペレはハワイ語のチャントを続ける。

ヒアカもペレに合わせて詠唱する。女神たちのチャントが洞窟に響き渡るとざざーっとな風が吹いてジルは鳥肌がたちっぱなしだ。

やがて洞窟中に響き渡る太い男の声がした。ジルは心臓を掴まれたような圧迫感を感じる

“ヒイアカ、カネが来た。ジルにガードを”

ペレの支持でヒイアカがジルの体のまわりに細い指で何かを描いた。ぼわんと透明なエナジーがジルとテトの体を包んだ。それとともにジルの心臓の鼓動が少し収まってきた。人間がいる場所じゃないんだ。ジルは痛感していた。

女神と妖精、偉大な神の聖域なんだ。ジルに不思議と恐れはなかった。洞窟が愛で満たされているからだろうか。

“ペレ、愛しい私の女神。私を呼び出したのはなんのためか？”

姿は見えないが太い男の声がわんわんと洞窟にこだまする。

“偉大な神、カネ。このピュアソウルのエナジーをアースへ。命の決定を覆すお願いです。どうかお聞き届けくださいますよう。”

ペレが深々と頭をたれる。ペレの言葉を聞いた途端、

“命の決定を覆す”

太い男の声が大きくなり、洞窟に突風が吹いた。

“ペレ、美しい私の女神。君のたつての願いだというのか？
私はなんと人間に警告しただろうか。あの愛すべきおろかな動物に。

”

“ お怒りはごもつとも。

アースの決定は絶対です。

けれどこのピュアソウルのエナジーをもってなにとぞ怒りを静めたまえ。アースに何とぞお届けください”

ペレと、ヒイアカが再びチャントを唱えだす。

髪が巻き上がる。ヒイアカにもふだんのおっとりした表情が消え、鬼気迫る表情でチャントを唱えている。ペレの目はぎらつと光、一歩も引かない強い意志が感じられる。

強風はますます強くなりぐるぐると渦を巻き始めた。

ペレは一步も引かない。チャントの声は益々凜と神々しく洞窟に響いた。ジルとテトはヒイアカのガードのなかでことを見守り続ける

“ 怒りを静めたまえ。偉大な創造神、カネ。”

ペレとヒイアカの祈りに負けたのか、風が次第に弱まってきた。ペレの神もゆったりと後ろになびく。

ヒイアカの表情がふだんのおっとりした眼差しに戻っていく。ペレの目は依然として炎のようにぎらつと輝き、

カネさえも怖気づきそうなほど意思の力に満ちていた。

“ ペレ、私の美しい女神。君の願いを聞き入れないものがいようか。願いを聞き届けよう。私がアースに奉納する”

再び野太いカネの声が響くとチャントのリズムに合わせてピュアソ

ウルのエナジー体の下の大地が揺れ始め、
真つ二つに分かれると深い深い岸壁の谷ができた。その奥深く
に真つ赤な光を放ちながらぐるぐる回る光が渦まいている。
深く、深く、奈落のそのように深い位置で燃えるような赤で渦巻
いている強大な光の渦。
ジルの位置からはとても見えなかったが、その存在はひしひしと感
じた。

“アースだ。”

テトがジルに言った。

“俺たちが直視できる相手ではない。遠く離れていてもこのエネ
ルギーだ。”

テトにも緊張が走る。

“カネによりアースに奉納を”

ペレは凜とした声が響く。

ペレとて直接は奉納できない相手なのだろうか。

カネの力でピュアソウルは谷の上に運ばれ、そこからシューンとも
のすごい勢いで谷底に落ちた。

ペレはアースにも呼びかける。

“アース、偉大なアース。あなたの怒り、悲しみはもつともです。
けれどささやかな人間の命にチャンスを与えますよう。”

寛大なあなた様ならば、お分かりのはず。妖精たちが人間を愛しています。

私もあなたも人間に慈悲を与えてきたはず。どうかこのピュアソウルを受け取り、怒りを静めてくださいますように。女神ペレの願いをお聞き届けください”

地響きのような低い声であたり一面が震えた。

“いいえ、あなたは絶対です。けれど、もう少しだけ人間に時間をあげて欲しいのです。

彼らを愛する妖精が、人間の中の貴重なピュアソウルが身をもって示した愛の形。

それをお受け取りになれば慈悲深いあなたのこと。彼らの想いはお分かりのはず。”

アースにピュアソウルのエネルギーが到達したのだろうか。大地にドーンと衝撃が走った。アースが一度鼓動をしたようだった。

“ははは。はははは。”

地響きとも笑い声ともとれる不思議な声が響きわたった。ピュアソウルのエネルギーで一瞬アースが暖まる。

次第にペレの目に安堵の色が浮かぶ。

“アースが喜んで笑ったわ”

ヒイアカもほっとしたように頬を緩めた。

“私の偉大なアースにキスを”

ペレは深々とひざまずくと大地にそっと口付けをした。

“アース。私はいつもあなたと共にあります。”

ペレが頭をたれる。避けた岩盤はぎぎーっと音を立てて閉じた。女神ペレはゆっくりと立ち上がると
ジルとテトに向かって歩いてきた。

“よかったわね。テト。ジル。あなたたちの努力が報われて。”

ジルは悟った。この偉大な女神は自分より強大な力の前にも決して
屈せずいつも人間を守ってきたのだと。
意思につよい輝く瞳は人間を守ろうという強い思いの表れなのだと。
絶対的な神々を前に女神一人で立ち向かってきたのだ。

“これで、人間は助かったのか？”

テトがペレに聞く。

“そうね、多分、絶滅実行が一世紀ぐらい伸びたと想うわ。”

“一世紀。”

“完全に助かったわけじゃないのか。”

“まあ、いいじゃない。ちょっと時間ができたんだし。”

“もしかして、これってアースにとってはホットミルクぐらいの効果なのかな？”

テトが言った。

“これってちよくちよく、アースにあげなくちゃいけない奉納なのか？”

“そうよ。だから、またジルと張り切ってピュアソウル探してきなさい。”

ペレがこともなげに言った。

“アースの怒りを静めるためには暖かい飲み物が必要だわ。どうせ人間はちよくちよくアースを苛立たせるんだし、そのときまた奉納して時間を稼ぐの。でもね、いい加減人間も気づかないとアースはもう許してくれなくなるわ。きつと。”

沈黙が続く。

“そのときは、そのときよね。”

ヒイアカがおつとりと言った。

この恐ろしい光景をなんともなかったようにこなす二人の女神。

ジルは膝の震えがとまらなかった。

“ジル、引き続き私の命を受けてテトとピュアソウルの回収をなさい。”

女神の命令は絶対よ。”

ペレが冗談めかしている。

“はい。”

ジルが素直にうなづく。

“そうそう、特別にカネの水使っていいから。

ラナを呼び戻しなさい。そして手伝わせない。”

今度はラナを連れてきてここでフラを奉納させなさい。”

それから、テト、リリーを呼び戻すならリアンと同じ大きさにして二人を一緒に戻しなさい。”

セイラというのでもいいけど仕事を忘れないように。命を捧げずにカネの水をわけるのは今回が最後よ。わかったわね。”

“はい、慈悲深い女神様。”

テトが喜んでいった。

“必ず仕事もします。ありがとうございます。”

“そういつときだけ、かしこまって挨拶するのね。”

まったくふざけた妖精だわ。忘れるんじゃないわよ。”

あなたの命、本当はカネの水と引き換えだったのだから。”

私はいつでも取りにいくわ。サボるんじゃないわよ。”

釘をさしてギロツとにらむ。ジルはすくみあがったが、テトはくすくす笑った。

“わかってるよ。美しいディーバ。僕はあなたの望みどおりの仕事をするさ。”

“わかったらいいわ。ヒイアカ、世界を見回って私に報告を。私は少し休むわ。”

といって後ろ手に手を振ると腰を振りながらセクシーに岩の奥へ消えていく。見送りながらテトが言った。

“ではまた女神様。”

神々の前では人間なんて本当に小さな生き物なんだな。ジルはスケールの大きさに恐怖と尊敬の念を抱きながらペレの洞窟を後にした。ピュアソウルのエナジー体がホットミルク程度とは。

最終章（前書き）

喜びと希望

最終章

テトとジルはカネの水を持ってカイルアの海へ戻った。

浜辺に二人神妙に立つ。

“ペレはリリーとリアンを同じ大きさで呼び戻せっていったよな。”

“ああ、そう言ってたよな。”

“どっちかな？人間かな？妖精かな？”

“さあ、どっちだろうな、でも妖精は悩みがないんだろ？”

“そしたら二人とも妖精の方が幸せなんじゃないか？セイラとも大きさがあうし。君たちは家族になれるよ。”

“そっか、選んでいいのかな。妖精で戻そうかな。”

テトがぶつぶつ言っている。

“よし、まとめて3人分だ。ヒイアカ、そこにいるのかい？ヒイアカ？”

テトが呼びかけるとヒイアカが海の上に浮いた形で現れた。

“テト、呼び戻すのね。”
“おっとりという。”

“ヒイアカ、お願いします。リアンとリリーを妖精に、そしてラナ

を元の姿に”

そういつて、テトがカネの水をそつと海水に混ぜた。

ヒイアカは、うなずいて、混ざったあたりの海水にふーつと息をかけた。

波の流れに逆らつてその部分は生き物のようにぐるぐると回りだすと、

すーつと上持ち上がつて、リアンとリリーが美しい妖精の姿で飛び出した。

リアンは若々しい青年の姿に戻っている。やがて大きなうねりがすーつと上に上がると、ラナが現れた。

“ラナ、ラナ！”

駆け寄つて抱きしめるジル。

“ジル、ジル、やっぱりまた会えたわね”
嬉しそうに抱き合う二人。

“リリー、リアン、”

テトも嬉しそうに二人の妖精に駆け寄る。

“俺が妖精になれるなんて、”

リアンはくるくる周りながら嬉しそうに自分の羽や姿を確認した。

“少しハンサムに若返ったかな。”

リアンが嬉しそうにいった。人間だったときのリアンに浮かんでいた苦悩の表情はなく晴れ晴れとしている。

“ピュアソウル、ついに人間卒業だな”

テトがからかうように言った。
そしてリリー。

“リアン、テト”

嬉しそうなリリー、セイラに良く似た淡い緑の瞳のリリー。

“君の声、戻ったんだね？悪魔から取り戻したんだ。”

テトが飛び回って喜びを表現する。

“リリー、君の声が聞こえる。僕の声も聞こえる？”

なんてすばらしいんだろう。

“セイラに会いに行こう！”

テトが嬉しそうに言った。

“セイラ、セイラ”

テトが、リアンが人間だった頃の家近づくと嬉しそうに声をあげた。

“セイラ、どこに居るのセイラ？”

リリーもリアンも一緒に呼びかける。

大きなモンスターの葉の影からセイラがひょこつと顔をだした。

“セイラ。”

テトの羽の輝きが増す。

“テトなの？”

セイラが飛び出してきた。淡い緑色の髪がふわつと揺れた。

二人の妖精が抱き合いながらクルクルと回るとあたり一面に光の粉が降り注ぐ。

“なんてきれいなのかしら。”

ラナがため息をつくようにいった。

“セイラ、約束どおり、カネの水で命を戻したよ”

テトが胸を張っていった。セイラの顔が喜びで満ちる。

“マミー、リアン！！”

セイラがリリーとリアンに気づいて歓声を上げる。

“リアン、妖精になったの？”

小さくなったりアンを珍しそうに見つめるセイラ。そして、リリーの嬉しそうな顔に飛びついた。

“ マミー、会いたかったわ。 マミー ”

“ セイラ、マイスウィート。戻ってきたわ。 ”

セイラの大きな瞳がますます大きく輝いた。

“ マミー、話せるのね。私の声が聞こえるのね？ ”

妖精たちの歓喜の再会はキラキラと光の粉をふりまきながらしばらく続いた。

光の粉がジルとラナの頭上でキラキラと舞い踊る。
美しい光を見つめるラナをジルは嬉しそうに見つめた。

“ ラナ、また会えたね。 ”

ラナの肩を抱きよせた。大切な人が側にいる幸せに浸る。

“ ええ、ジル。だって私たち同じなもの。 ”

欠けているものは何もない。そう思えるような完璧な幸せだった。

“ ラナ、僕たちは役割があってまだ生かされている。 ”

一緒に神々の役割を果たそう。”

ラナはジルを見ると深くうなずいた。

“ジル、ラナ、一緒に祝おう。歓喜の夜だ。”

テトの嬉しそうな声にジルもラナも妖精たちのもとへ走った。

“テト、でも。まだまだピュアソウル集めないといけないんだよね
ジルが女神に言われた使命を噛締めるように言った。”

“大丈夫。まだ一世紀ある。”

テトがおどけたように言った。

“喜ぶときは100%ただ喜べ。先のことはそれからだ。”

ジルは妖精とともにいる喜びを噛締めた。

“世界はなんて素敵なんだ。僕は生きているだけで涙が出そうなほど感動しているよ”

ジルが世界を抱きしめるように両手を広げる。

テトはその様子を嬉しそうに見つめた。

“やっぱりさ、オレは人間が好きだな。”

“ 人間の希望ほど上手いものはない ”

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0992u/>

ハワイアンソウル

2011年10月9日07時33分発行